

特別史跡熊本城跡総括報告書

調査研究編

第3分冊

2021

熊本市

例　言

- 1 熊本市は、特別史跡熊本城跡で長年実施してきた様々な史跡整備、資料収集、発掘調査の成果を取りまとめ、総括し、特別史跡熊本城跡総括報告書を作成することとした。総括報告書は、史跡整備をまとめた整備事業編（2016年3月既刊）、古文書・絵図・古写真などを網羅した歴史資料編（2019年3月既刊）、発掘調査の成果を中心とした調査研究編（2020年3月第1分冊・第2分冊刊行）の3編で構成される。
- 2 本書は調査研究編の第3分冊であり、第8章資料編「各地区的未公表調査成果」と「既報告未公表資料」について掲載している。対して第1分冊・第2分冊は、既刊報告書の集約版となる。第3分冊で対象とした発掘調査は、第1分冊・第2分冊と同様、昭和35年度から平成28年熊本地震前までとした。
- 3 「未公表調査成果」とは、未報告である過去の発掘調査について紹介するものである。
- 4 「既報告未公表資料」とは、第1分冊・第2分冊で掲載した発掘調査により出土した遺物であるものの、これまで詳細な図面の紹介がなかった資料について、改めて実測図などを掲載するものである。
- 5 図版のキャプションの挿図番号は、章-節-項-○図という体裁をとっている。
(例：第8章第1節第1項3図→8-1-1-3図)
- 6 瓦の文様の表記については、熊本城跡において家紋と理解できるものは「紋」を用い、家紋でない文様については「文」を用いて文章中で区別している。
- 7 総括報告書調査研究編の編集は平成30年度までを美濃口紀子が行ない、令和元年度から林田和人が引き継いでいる。第1分冊・第2分冊の執筆については、第1分冊例言を参照されたい。
- 8 本書（第3分冊）の執筆は、令和2年度熊本城調査研究センター職員が行なった。第3分冊第8章資料編については初出のため執筆者名を以下に記す。なお、() 内番号は、総括報告書調査研究編に掲載の調査地点を表している。
第1節第2項（51・52）・第1節第5項（70・71・72・73）・第2節第1項（2・7・15・16・22）・第2節第3項（37・38） 河本愛輝、第1節第2項（53・54）・第1節第4項（56）・第1節第5項（65・66・67・68・69）・第1節第6項（74・75・76・77・78）・第2節第2項（30・33） 林田和人、第1節第3項（55）・第1節第4項（57）・第1節第5項（58・59・60・61・62・63・64） 山下宗親、第2節第3項（34・35）美濃口紀子。
- 9 本報告書に掲載した遺物の表記・年代については、以下の文献を参考にした。
太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一』（太宰府市の文化財第49集）2000
九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』 2000
- 10 資料の掲載に際し、熊本県文化課・熊本市立熊本博物館・熊本市文化財課よりご配慮を賜った。記して感謝申し上げる。

特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編

目 次

第8章 資料編.....	1
第1節 各地区の未公表調査成果の概要.....	1
第1項 対象範囲.....	1
第2項 本丸地区.....	2
第3項 二の丸地区.....	11
第4項 三の丸地区.....	14
第5項 古城地区.....	30
第6項 千葉城地区.....	59
第2節 既報告未公表資料の概要.....	74
第1項 本丸地区.....	74
第2項 二の丸地区.....	79
第3項 三の丸地区.....	103
第3分冊・本報告書	
第1章 調査の概要.....	1
第1節 特別史跡熊本城跡の概要.....	1
第2節 総括報告書作成の経緯.....	1
第2章 熊本城の位置と環境.....	2
第1節 地理的環境.....	4
第1項 概要.....	4
第2項 金峰山塊の岩質.....	4
第3項 熊本城跡の地形.....	6
第2節 歴史的環境.....	7
第1項 周辺遺跡の概要.....	7
第2項 熊本城と城下町の変遷.....	11
第3章 熊本城研究史.....	15
第4章 発掘調査の概要.....	43
第1節 発掘調査史.....	43
第2節 発掘調査の内容.....	43
第1項 本章の目的.....	43
第2項 対象範囲.....	43
第3節 各地区の概要と調査成果.....	48
第1項 本丸地区.....	48
【本丸上段】.....	49
【平左衛門丸】.....	142
【教寄屋丸】.....	149
【西竹の丸（飯田丸）】.....	154
【東竹の丸】.....	199

【竹の丸】	206
【西出丸】	224
【奉行丸】	230
【權方丸】	255

第1分冊

第2項 二の丸地区	1
第3項 三の丸地区	34
第4項 古城地区	51
第5項 千葉城地区	89
第6項 城下（参考）	98
第5章 総括	132
第1節 地質・層序	132
第2節 遺構	151
第3節 遺物	167
第4節 石垣	191
第5節 西南戦争における熊本城	203
第6章 熊本城の調査研究と課題	208
第7章 付論	213
第1節 熊本城の石垣変遷	213
第2節 熊本城の出土瓦編年試案	233

第2分冊

第8章 資料編

第1節 各地区的未公表調査成果の概要

第1項 対象範囲

本節では、第1分冊・第2分冊で掲載できなかった各地区的未公表調査について紹介する。対象範囲は熊本城旧城域を基本とし、平成30年（2018）に策定された「特別史跡熊本城跡保存活用計画」の地区区分を参考にし、本丸地区・二の丸地区・三の丸地区・古城地区・千葉城地区に区分している。

体裁を整えるための諸条件については第1分冊44頁1・2・3・4を参照されたいが、以下の点について補足する。

1. 調査の番号は第1分冊・第2分冊から続いている。

2. 対象とした調査は、以下の通りである。

- ・特別史跡指定範囲内における現状変更に伴う発掘調査。
- ・埋蔵文化財包蔵地内における文化財保護法第93条および第94条に伴う確認調査。
- ・埋蔵文化財包蔵地内における埋蔵文化財存在状況確認調査。

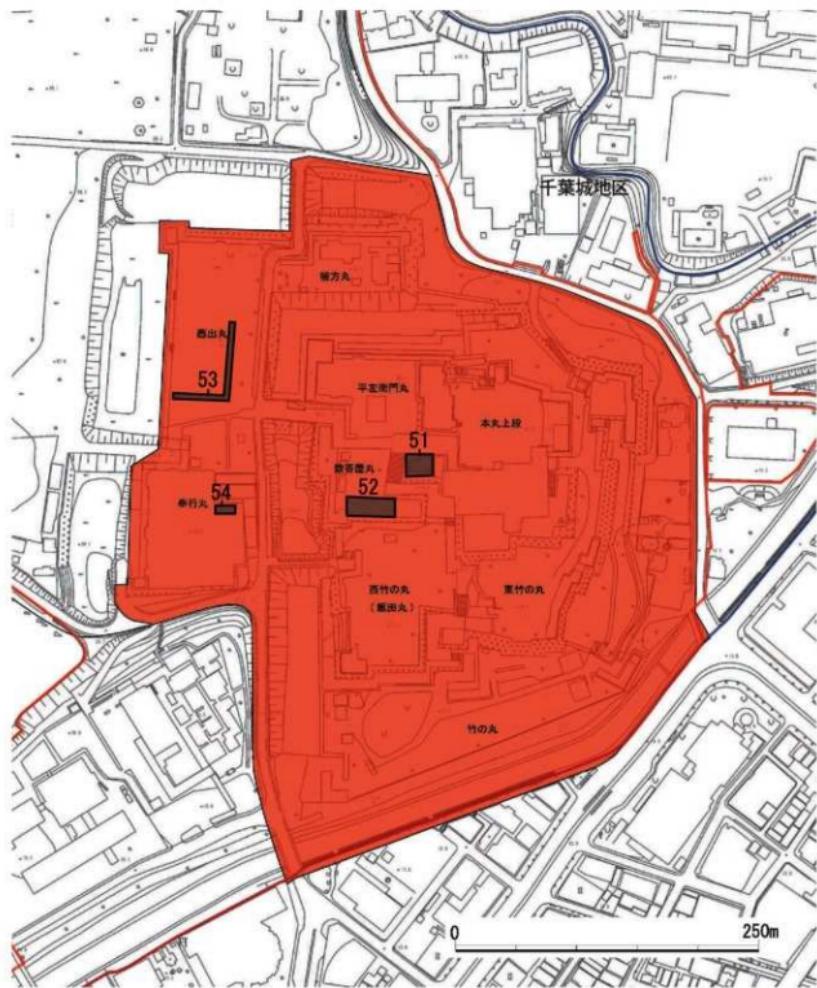
なお、各地区的概要については第1分冊・第2分冊に掲載されている。

未公表調査一覧（番号は調査番号、（ ）は調査地の現在の名称を表す）

地区区分	番号	項目	調査年	調査原因	調査主体
本丸地区	51	弓張跡	1991	売店建替	熊本市教育委員会
	52	敷寄屋丸二階御広間跡	1988	敷寄屋丸二階御広間復元整備	熊本市教育委員会
	53	米蔵跡	1998	史跡整備	熊本市教育委員会
	54	奉行所跡	2006	トイレ整備	熊本市教育委員会
二の丸地区	55	埋門跡	1988	整備事業	熊本市教育委員会
三の丸地区	56	二の丸星形跡（旧櫛川刑部邸部屋）	1992	旧櫛川刑部邸移築	熊本市教育委員会
	57	（三の丸第2駐車場）	2008	駐車場整備	熊本市教育委員会
古城地区	58	（国立熊本病院）	2000	病院建替	熊本市教育委員会
	59	（国立熊本病院）	2004	病院建替	熊本市教育委員会
	60	（国立熊本病院）	2004	病院建替	熊本市教育委員会
	61	（国立病院機構熊本医療センター）	2010	防火水槽設置	熊本市教育委員会
	62	（国立病院機構熊本医療センター）	2010	ヘリポート建設	熊本市教育委員会
	63	（国立病院機構熊本医療センター）	2010	保育所建設	熊本市教育委員会
	64	（国立病院機構熊本医療センター）	2011	雨水貯留槽建設	熊本市教育委員会
	65	（熊本県立第一高等学校）	1984	寄宿舎改築	熊本県教育委員会
	66	（熊本県立第一高等学校）	1993	体育館改築	熊本県教育委員会
	67	（熊本県立第一高等学校）	2003	部室改築	熊本県教育委員会
	68	（熊本県立第一高等学校）	1995	清香会建設	熊本市教育委員会
	69	（熊本県立第一高等学校 脇通路）	2009	歩道拡幅	熊本市教育委員会
	70	古城堀（古城町 店舗）	1999	店舗建設	熊本市教育委員会
	71	桜馬場	2009	野外付帯施設建設	熊本市教育委員会
千葉城地区	72	桜馬場（市道桜町第2号線）	2010	道路改良	熊本市教育委員会
	73	桜馬場 堀平太左衛門顕彰跡	1989	坪井川リバーウォーク整備	熊本市教育委員会
	74	（千葉町 共同住宅）	2010	共同住宅建設	熊本市教育委員会
	75	（熊本家庭裁判所）	2015	庁舎増築	熊本市教育委員会
	76	（熊本県伝統工芸館）	1980	伝統工芸館建設	熊本県教育委員会
	77	（熊本県立美術館分館）	1991	改修工事	熊本県教育委員会
	78	（高橋公園）	2000	鋼像建設	熊本市教育委員会

第2項 本丸地区

本丸地区では、4地点の未公表発掘調査について紹介する。第1分冊に基づく曲輪で区分すると、本丸上段1地点、数寄屋丸1地点、西出丸1地点、奉行丸1地点である。



51. 弓藏跡 52. 数寄屋丸二階御広間跡 53. 米藏跡 54. 奉行所跡

8-1-2-1 図 本丸地区調査位置図

< 51 弓藏跡 >

調査期間：平成3年（1991）3月

調査面積：約 308 m²

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

売店の建て替えに伴い、平成3年1月22日現状変更申請が提出された。

・調査の方法

調査は、御天守方入口之間へ通じる石段側からトレーナーを設定し、遺構検出面に沿って順次調査を行なった。この際、現地表面に残る礎石の調査は避けた。

・調査の概要

調査地は大天守台南側、地蔵櫓門へ下る階段と耕作櫓門の石垣に挟まれた場所である。江戸時代には弓藏と呼ばれる建物が存在した。御天守方入口之間を通り、御天守廊下を通って天守まで通じていた。

調査の結果、江戸時代と明治時代の遺構が検出された。江戸時代の遺構の一部には被熱の痕跡が見られた。

（1）江戸時代

排水溝は、調査地南側を西から東へと延び、凝灰岩製の側石と底石を持ち底石は、二列に分けて敷き詰めており、幅40 cm、深さ15 cmを測る。側石自体の幅は約10 cmで、城内に残る他の江戸時代の遺構と同様である。この溝は、明和6年（1769）の「御城内御絵図」における建物の柱割と照らしても雨落の排水溝と比定できる。

また、排水溝と御天守入口之間へ登る石段まで幅約1m30cmで削石を敷いている。このような敷石遺構は、城内に於いて他に例を見ない。天守への登り口であることに起因するものと思われる。

（2）明治時代以降

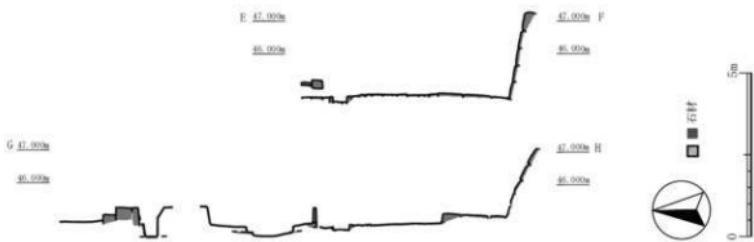
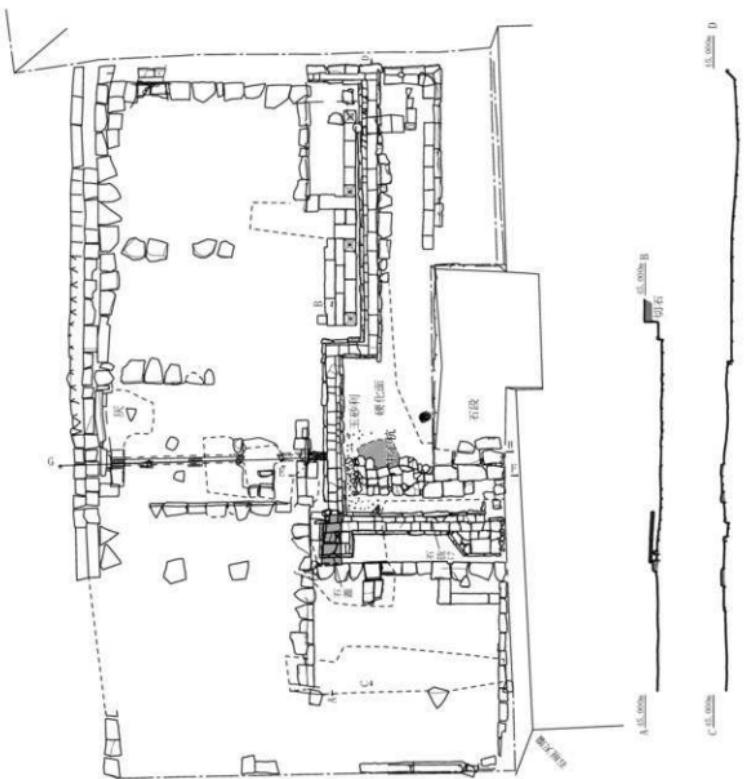
明治時代以降の遺構としては、礎石列と便所と思われる遺構が検出された。明治時代の調査地の建物配置図は極端に少なく、詳細な配置は不明である。しかし、この時代の礎石は、大半が明治10年（1877）の西南戦争時と思われる焼土の上で検出された。したがって、現地表面に残る礎石のほとんどは、西南戦争以降の陸軍施設の建物礎石と考えられる。



8-1-2-2 図 弓藏跡遺構全景（北東から）



8-1-2-3 図 弓藏跡敷石状遺構（東から）



8-1-2-4 図 弓藏跡遺構図 (1/150)

< 52 数寄屋丸二階御広間跡 >

調査期間：昭和 63（1988）年 6 月～7 月

調査面積：約 630 m²

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

数寄屋丸周辺整備の一環として、数寄屋丸二階御広間復元工事に先立ち発掘調査を実施した。

・調査の方法

数寄屋丸二階御広間は、熊本城管理事務所管理棟建設計画の事前調査として昭和 58 年（1983）熊本市教育委員会により発掘調査が行なわれ、礎石列等の遺構を検出している（総括報告書調査研究編第 1 分冊 151 頁参照）。

昭和 63 年（1988）の調査では、二階広間の復元資料を得るために昭和 58 年調査箇所の再確認と、未発掘であった数寄屋丸南辺の石垣に接する部分を主とした。

・調査の概要

調査地は本丸西側の数寄屋丸を区画する南側の石垣に隣接する。江戸時代には西を数寄屋丸五階櫓、東を地蔵櫓門と接続する数寄屋丸二階御広間が存在した。二階御広間は二階建の建物で、一階は南と東を石垣で囲まれていた。

調査の結果、江戸時代の遺構として石垣根石、礎石、排水溝が確認され、明治時代と推定される遺構として、集石（根固め石）、排水溝等が確認された。江戸時代の遺構は石垣際及び、二階御広間北側によく残存し、建物の中心部は明治時代以降の遺構が主となる。

（1）江戸時代

数寄屋丸南辺の城内石垣は床レベルから 1 石ないし 2 石が良好に残存し、目地部分には漆喰の痕跡が認められた。

二階御広間北側の雨落排水溝構成材は半数が原位置に残っており、この溝は材料の凝灰岩を厚さ 10 cm ～ 15 cm の板石状の切り石にして用いている。底にも凝灰岩を用いており側石と底石は切り込みを入れて収めている。

（2）明治時代以降

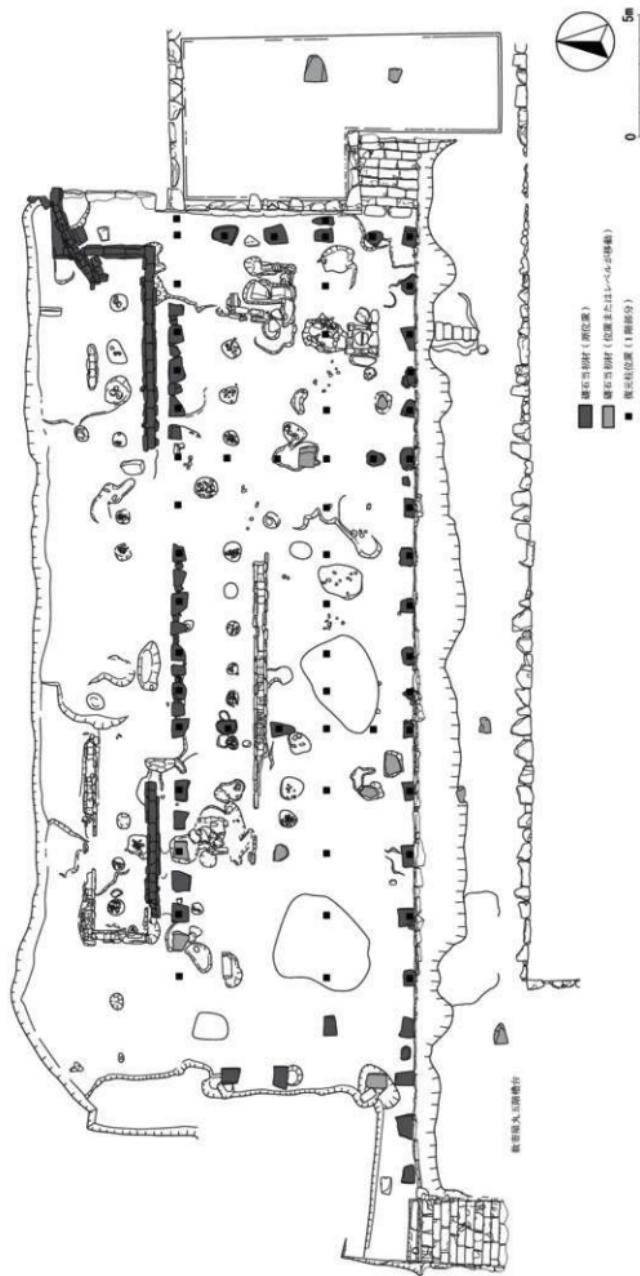
礎石列や土杭、排水溝などが検出された。

・出土遺物

コンテナ 2 箱分の遺物（瓦片）が出土した。



8-1-2-5 図 石垣基底部検出状況（北から）



8-1-2-6 図 数寄屋丸二階御広間遺構図 (1/200)

< 53 米藏跡 >

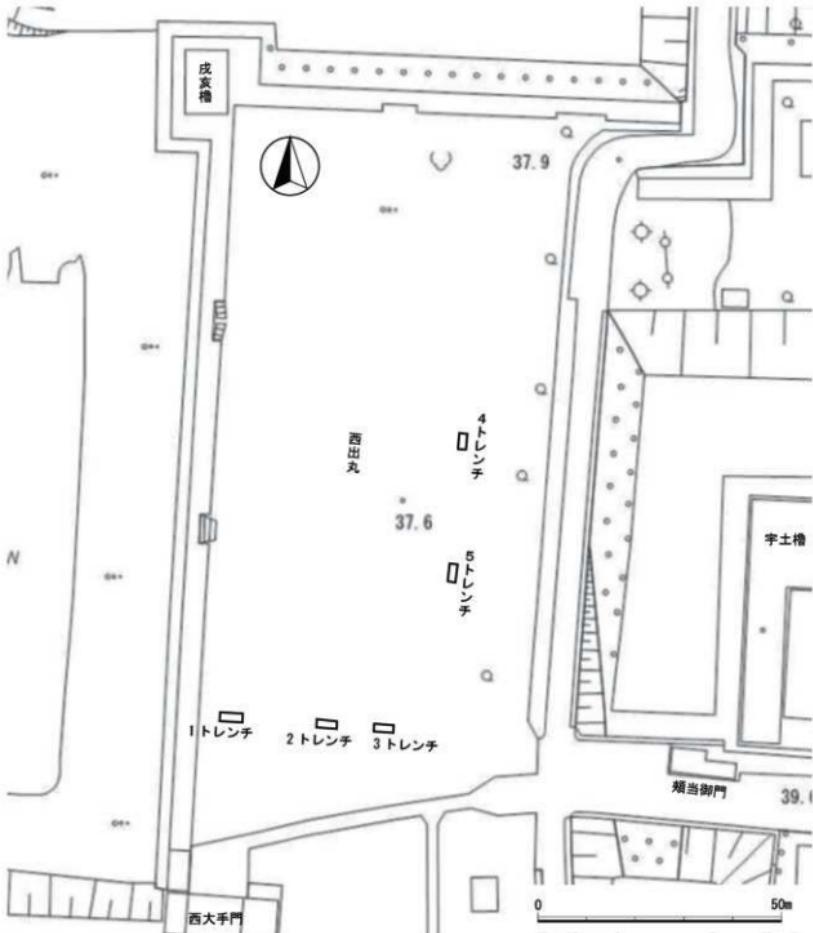
調査期間：平成 10 年（1998）

調査面積：不明

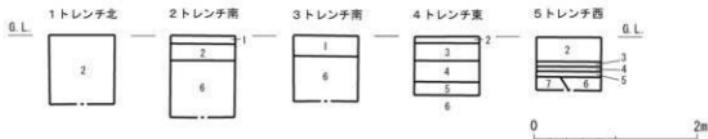
調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

平成 10 年（1998）、特別熊本城跡地方拠点史跡等総合整備事業が計画され、平成 10 年 8 月 24 日付で現状変更について許可申請書が提出された。史跡整備の内容は石垣保存修理・復元計画建造物・復元計画工



8-1-2-7 図 米藏跡トレンチ位置図 (1/1000)



8-1-2-8 図 米蔵跡トレンチ土層柱状図 (1/60)

作物・遺構調査から成る。申請は平成 10 年 12 月 7 日許可となり、米蔵跡周辺について遺構調査が行なわれた。計画では調査後、米蔵を復元又は平面表示等により整備する予定であった。

・調査の方法

米蔵跡の周囲 5 カ所にトレンチを逆 L 字形に設定し、遺構面までの状況を確認した。米蔵の南側に西から東に向かって 1 トレンチ・2 トレンチ・3 トレンチを設定し、米蔵の東側は北から南に向かって 4 トレンチ・5 トレンチとしている。土層図は地表からの深さで図化されているため、地形の傾斜や土層の対応関係については明確でない。

・調査の概要

調査の結果は以下の通りとなる。

- 1 トレンチ：地表から 84 cm 挖削を行ない、すべて搅乱土（2 層）であった。
- 2 トレンチ：地表から 100 cm 挖削を行ない、2 層の下に 6 層を確認した。6 層は山砂のような砂を多く含む火碎流に近似した土である。性格は不明である。
- 3 トレンチ：地表から 80 cm 挖削を行ない、1 層（山砂）の下に 5 層を確認した。5 層は黒褐色土である。
- 4 トレンチ：地表から 70 cm 挖削を行ない、5 層・6 层を確認している。5 層上面に瓦片が集中することからここが明治初期の地表面である可能性が高い。
- 5 トレンチ：地表から 66 cm 挖削を行ない、3～7 層を確認している。7 層は明黄褐色土でこれを 6 層が切り込んでいる。

調査の結果、米蔵の痕跡と考えられる遺構等は確認されていない。遺物の出土については 4 トレンチの瓦以外不明である。

< 54 奉行所跡 >

調査期間：平成18年（2006年）8月11日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

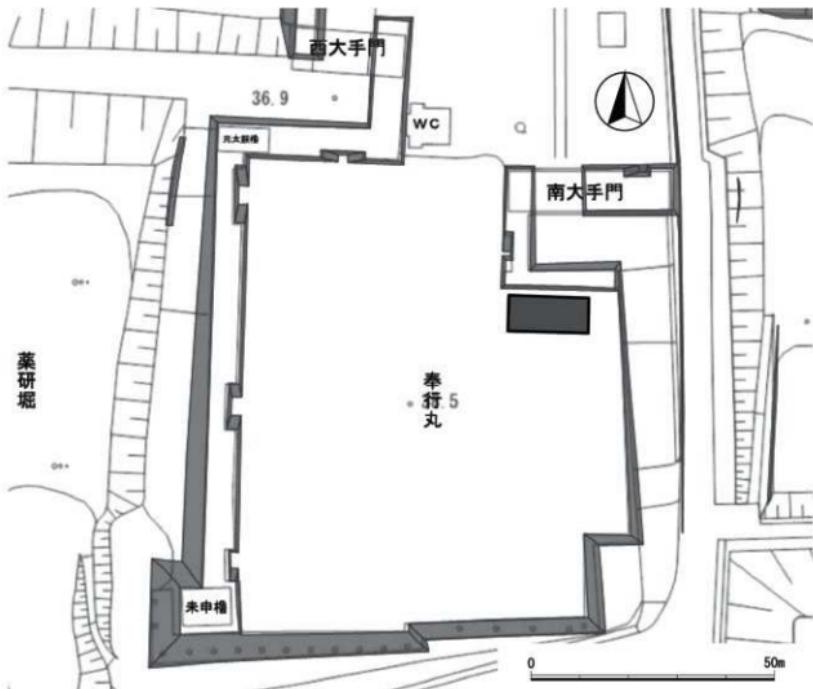
奉行丸トイレ整備に伴い、遺構確認を目的とした確認調査を行なった。

・調査の方法

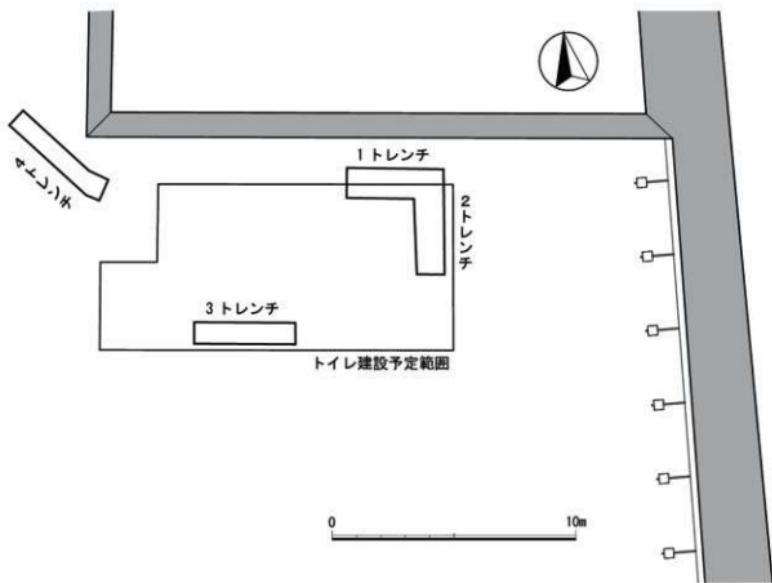
トイレ建設予定地の周辺に4カ所の調査トレンチを設定した。

・調査の概要

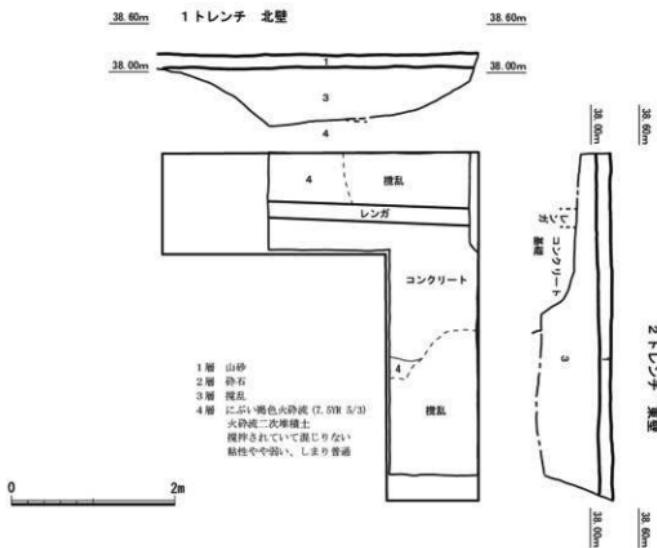
調査の結果、江戸時代の奉行所や郡代等に伴う遺構は検出されなかった。基本土層は1層山砂、2層碎石、3層搅乱、4層にぶい褐色火碎流の二次堆積土となる。4層は熊本城の造成に伴う整地土と考えられ、江戸時代の遺構面であった可能性が高い。1・2トレンチで弾薬庫の基礎が検出されている。遺物等は出土していない。



8-1-2-9図 奉行所跡調査位置図 (1/1000)



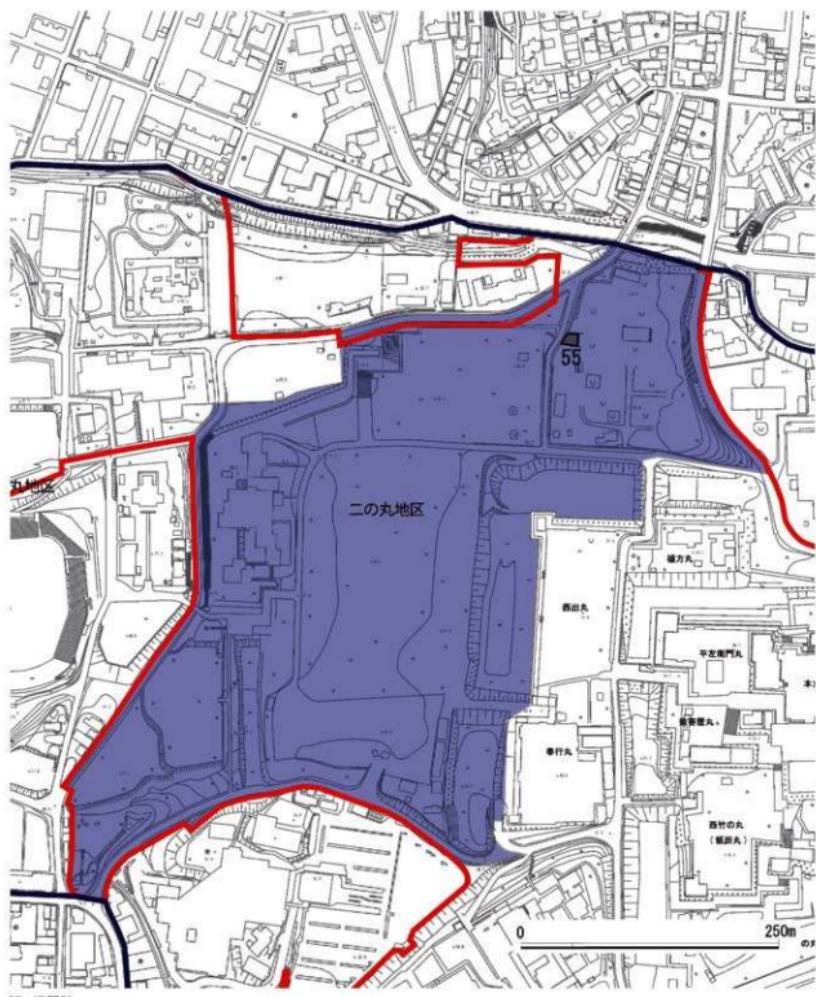
8-1-2-10 図 奉行所跡トレンチ位置図 (1/200)



8-1-2-11 図 奉行所跡トレンチ実測図 (1/60)

第3項 二の丸地区

二の丸地区では、1地点の未公表発掘調査について紹介する。



55. 埋門跡

8-1-3-1 図 二の丸地区調査地点図

<55 埋門跡>

調査期間：昭和63年（1988）10月27日～11月14日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

監物台樹木園西側に位置する埋門跡のブロック積みを取り外し、熊本市政100周年記念事業として冠木門形式の埋門整備が計画され、昭和63年（1988）6月22日に現状変更の申請がなされた。整備に先立ち発掘調査を実施した。

・調査の方法

埋門基礎部分の調査を実施した。

・調査の概要

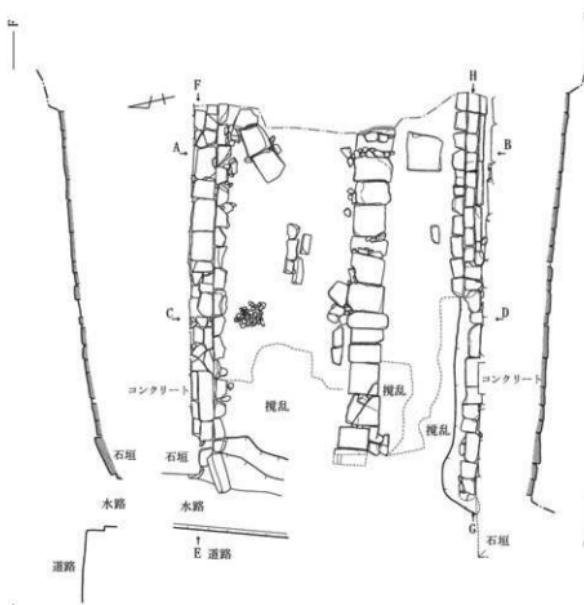
調査の結果、門礎石と礎石中央の暗渠、石垣に沿う開渠を確認している。門礎石は2ヶ所で検出しており、北西の礎石は存在していなかったが、礎石下の根固め石を検出している。南西の礎石については存在していないかった。

暗渠の規模は、門中央やや南側東西方向に長さ約6m、内法の幅約35cm、深さ約20cmである。検出時は全て蓋石で覆われていた。さらに東西方向の暗渠の西側から約2.8mの地点で、北東方向に暗渠が分かれている。北東方向の暗渠の中央は削平され、確認されていない。

開渠は、北側と南側石垣に沿うよう東西方向に検出された。北側開渠は、長さ約6m、内法の幅約45cm、深さ約20cmである。南側開渠は、長さ約8m、内法の幅約20cm、深さ約30cmである。また南側開渠の東側は、溝の両側壁が検出されている。西側は削平されている。なお門の脇にある石垣の目地には、漆喰を確認している。



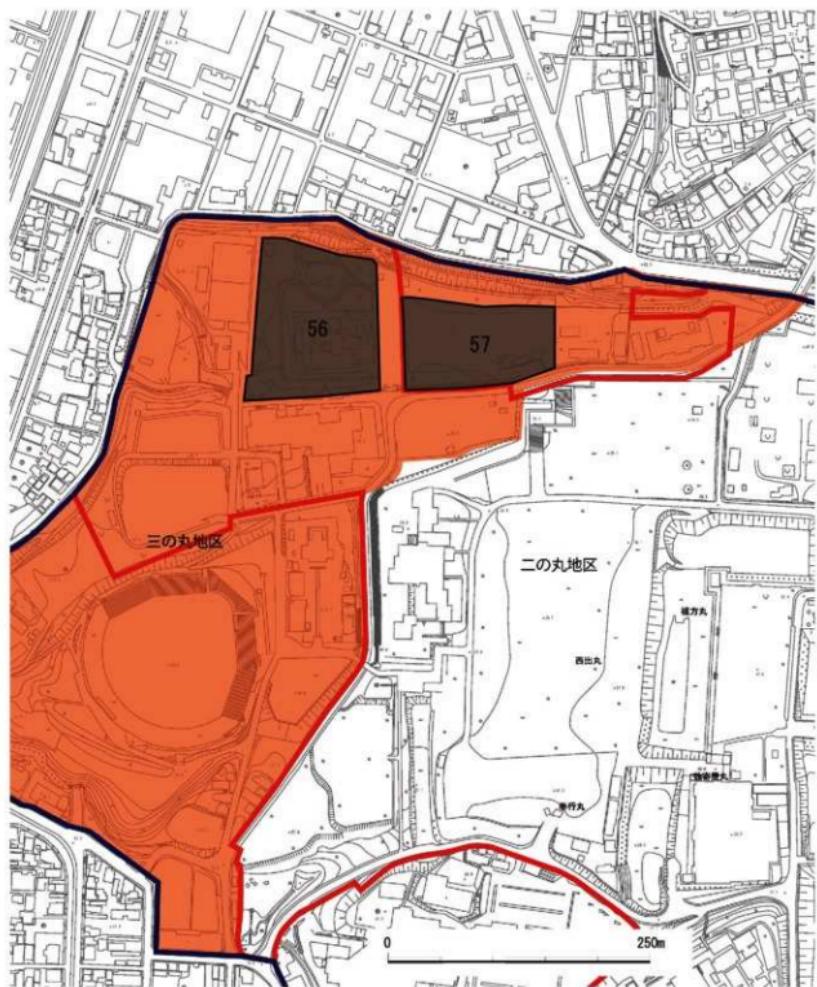
8-1-3-2 図 埋門跡調査位置図 (1/1000)



8-1-3-3 図 埋門跡 平面・断面図 (1/100)

第4項 三の丸地区

三の丸地区では、2地点の未公表発掘調査について紹介する。



56. 二の丸屋形跡（旧細川刑部邸） 57.（三の丸第2駐車場）

8-1-4-1 図 三の丸地区調査地点図

< 56 二の丸屋形跡（旧細川刑部邸）>

報告書：熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報第2号 一平成4年度～平成8年度一』1999

熊本市『熊本県指定 重要文化財 旧細川刑部邸 移築工事報告書』1996

調査期間：平成4年（1992）5月～9月

調査面積：3000 m²

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

熊本県指定重要文化財旧細川刑部邸が三の丸地区移築されることに伴い、発掘調査が行なわれた。発掘調査については上記の報告書により公表されていましたが内容に乏しかったため、第2分冊では掲載を割愛した。今回、出土遺物の一部について実測を行なつたため、遺物を中心に紹介する。

・調査の方法

移築工事の発注は平成3年2月に主屋と土蔵の建設に対して行なわれ、つづく同年3月に茶室・屋敷堀等の移築と庭園の復旧と関連設備（電気・水道・防災等）について行なわれている。発掘調査はこの移築に合わせて地下遺構調査として実施された。

・調査の概要

二の丸屋形跡は「二丸御屋形」と呼称され、文政7年（1824）に藩主齊茲の屋敷として建てられた。明治以降は野砲營地となり、その後輜重兵第六大隊の營地を経て、昭和21年（1946）に化学及血清療法研究所の敷地となった。敷地内はその旧建物の影響で遺構の残りはよくない。

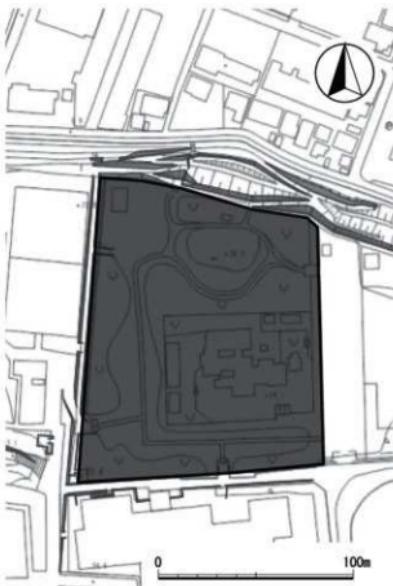
検出された遺構として、土坑が複数確認されている。

・出土遺物

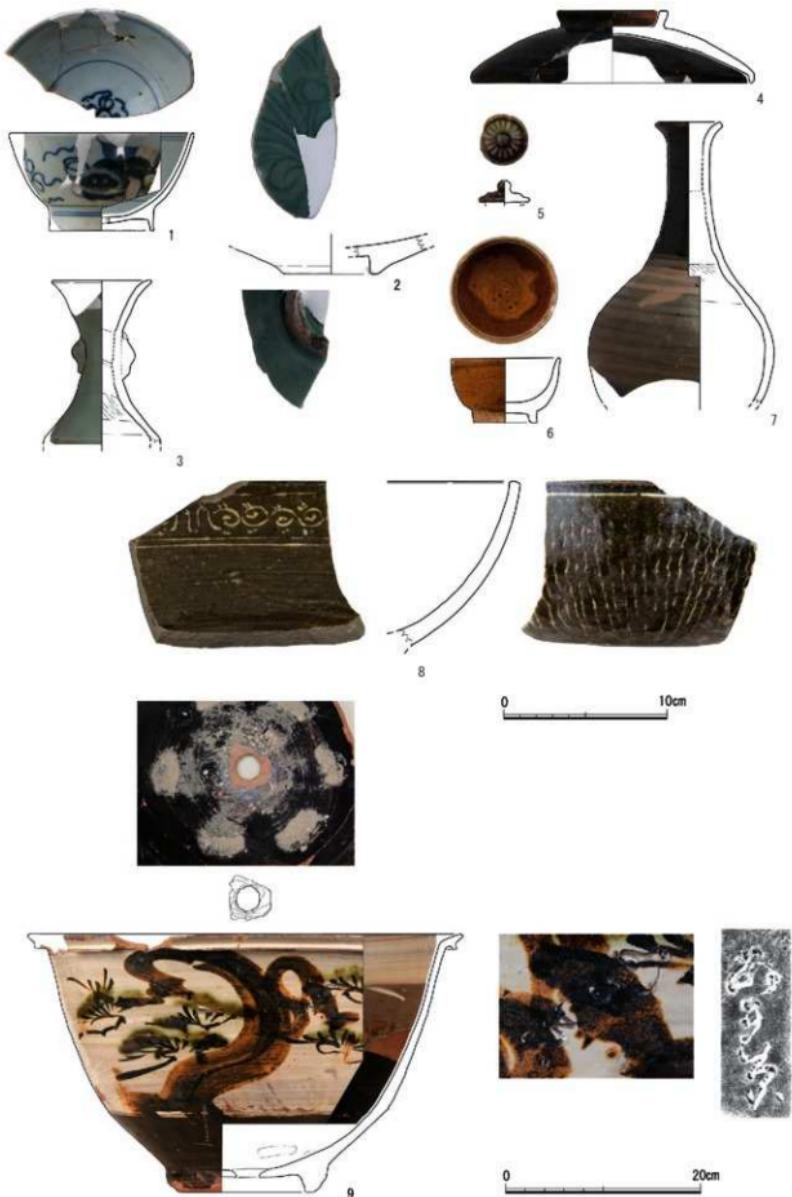
今回77点を紹介する。遺物の実測は平成29年度業務委託により行なった。遺物は現在熊本城調査研究センターが保管しており、遺物の総量はコンテナ72箱である。実測遺物の抽出にあたっては、図化に耐える残りの良いものを中心に選んでいるが、遺物の共伴関係や年代の幅も考慮している。遺構に伴う遺物として、3号土坑、21・28号土坑、24・25・27号土坑の遺物を抽出した。個々の器種や調整等については観察表に譲ることとし、出土遺物の傾向や特徴について記述する。

3号土坑は出土量が多く、17点を図示している（1～17）。陶器（1～10）・人形（11）と石製品・金属製品（12～17）がある。陶器は磁器染付（1）・青磁（2・3）・陶器（4～10）があり、陶器の数が多い。青磁は17世紀代に位置づけられるものの、1の広東碗は18世紀末～19世紀初め、10の擂鉢は高台を有することから19世紀以降と考えられる。したがって、年代としてのまとまりはない。9の二彩鉢は底部に穿孔を施すことから、植木鉢として使用された可能性がある。11は恵比寿人形。12・13は石硯である。13は小型であることから、玩具の可能性が高い。

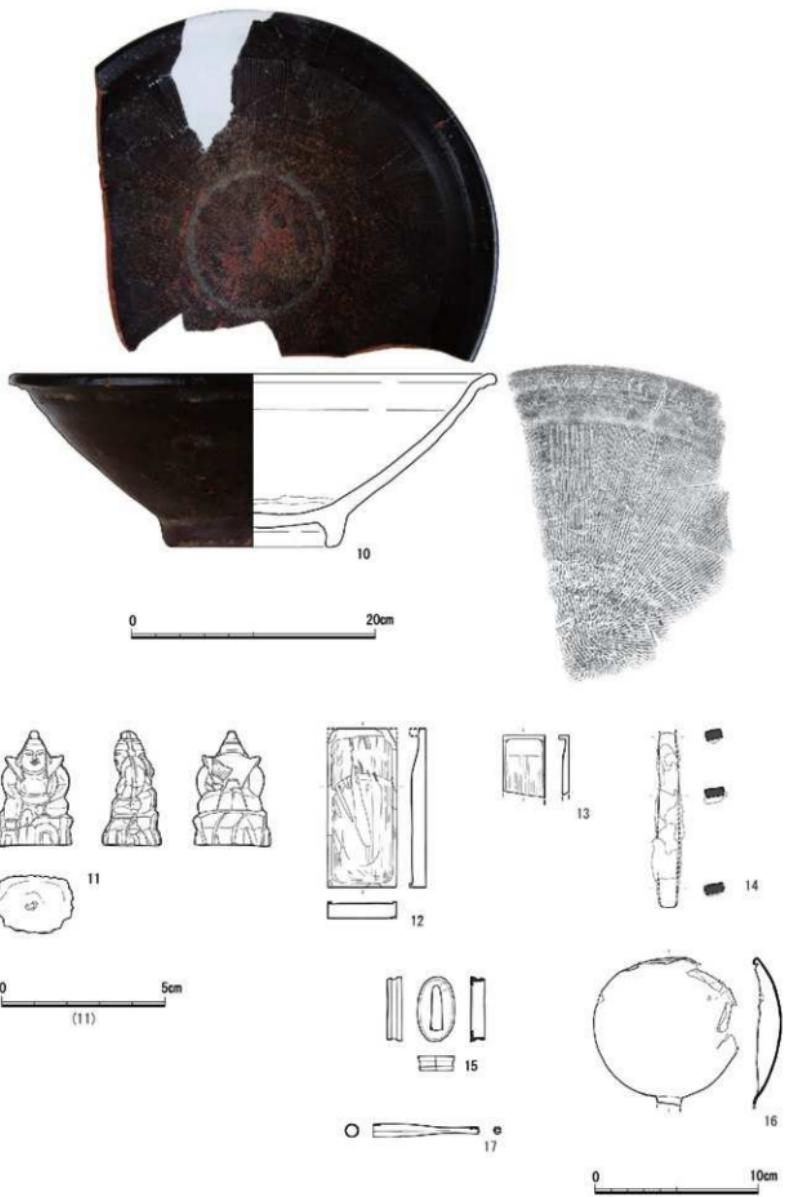
21・28号土坑は14点を図示した。18～24は21号土坑出土、26～31は28号土坑出土であり、25は



8-1-4-2 図 二の丸屋形跡（旧細川刑部邸）
調査位置図（1/2500）



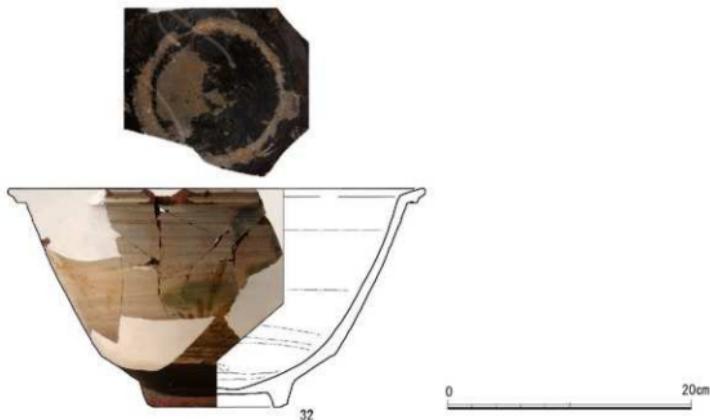
8-1-4-3 図 二の丸屋形跡出土遺物実測図 1 (3号土坑)



8-1-4-4 図 二の丸屋形跡出土遺物実測図 2 (3号土坑)



8-1-4-5 図 ニの丸屋形跡出土遺物実測図3 (21・28号土坑)



8-1-4-6 図 二の丸屋形跡出土遺物実測図4 (24・25・27号土坑)

21・28号土坑から出土した破片が接合した。21号土坑出土分は18のみ縄文土器で、他は土師器と陶器・青花である。城内における縄文土器の出土は非常に稀なため、熊本城以前の土地利用と景観を想定する上で参考となる。19～22までの土師器底部には壊・小皿の別を問わず糸切り痕跡が残る。しかし形態がそれぞれ異なるため、同一時期とは見なしにくい。20の口縁部には油煙の痕跡が認められることから、灯明皿として使用されている。また23の肥前陶器皿、24の青花碗は江戸時代初期に年代が位置づけられ、土師器においても底部糸切り痕が残存するなど、全体として江戸時代初期の様相を示している。

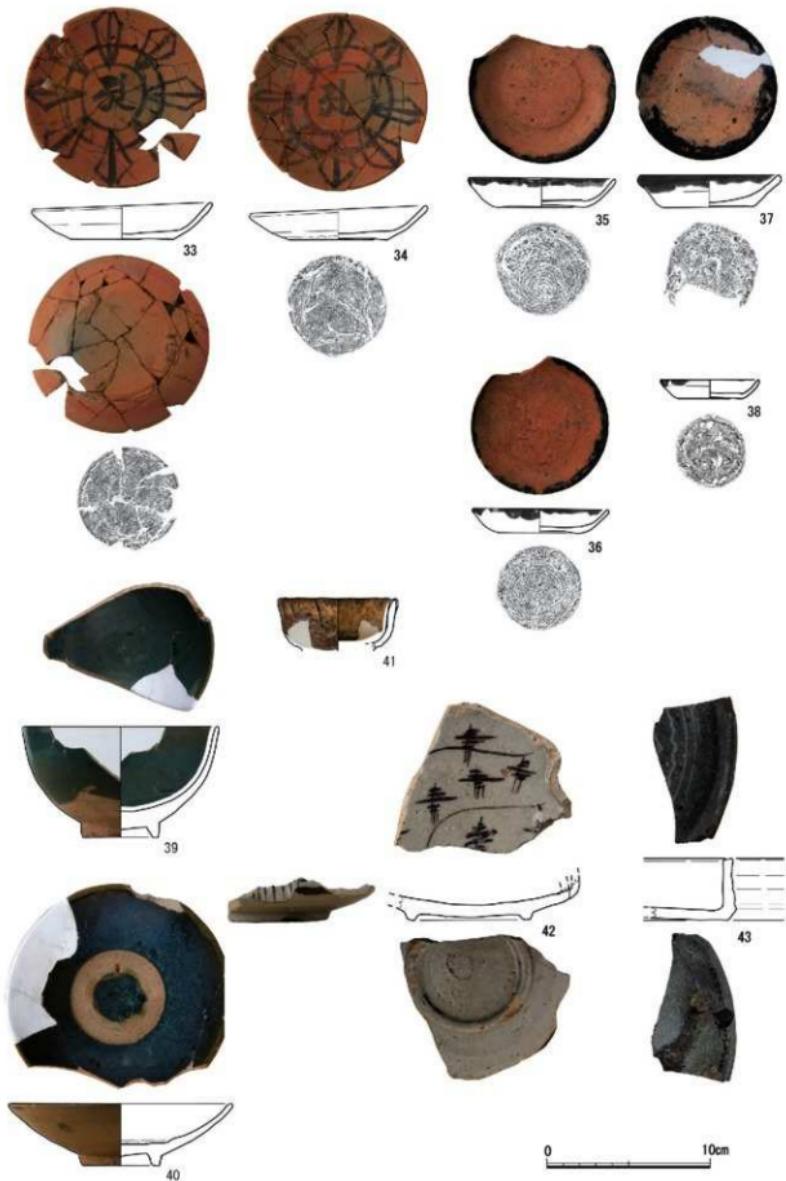
28号土坑からも同じく土師器・陶磁器が出土している。26の土師器坏は先述した20と同一形態で法量もほぼ同一である。ちなみに25の土師器坏も21と同一形態で法量もほぼ同一である。28の肥前陶器皿や29の青織部向付は江戸時代初期に位置づけられる。また30の青花皿は基筒底をなし、31の青花大皿には芙蓉手らしき文様が認められるなど、こちらも江戸時代初期までの年代が求められる。

32は24・25・27号土坑から出土した遺物が接合した、武雄産の二彩陶器鉢である。外面には松が描かれている。

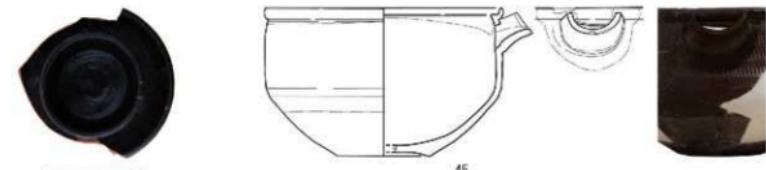
33～77は遺構に伴わない遺物である。33～38は土師器であるが、うち33と34は輪宝墨書土器である。本来、地鎮具として埋納されたものと考えられる。33の外面には「西」と記されている。梵字はどちらも「ア」の文字で一般に胎蔵界の大日如来を表している。33・34は同一形態で同一法量であるため、同時期の所産である。35～38の土師器小皿には油煙の跡が残り、灯明皿として使用されている。

39～46は陶器である。39・40には銅緑釉が掛けられ、1650～1690年代に位置づけられる遺物である。42は志野の皿である。内面に寿字文が複数描かれ、側面に型抜きも認められる。43は盤であろうか、内面に象嵌が施されている。44は鉄袖掛けの灯火具、45は飛び鉢の認められる片口でこちらも鉄袖を上掛けする。

47～58は磁器染付である。47～49の蓋は、47が広東碗、48・49は端反碗とセットになる。碗も広東碗(50・51)と端反碗(53・54)が認められる。碗の高台には銘や文様があり、50は「ウ」、53・54には丁字の吉祥文が認められる。碗ではほかに55の瑠璃釉の碗もある。碗以外では蓋付鉢(56)皿(57・58)、紅皿(59)

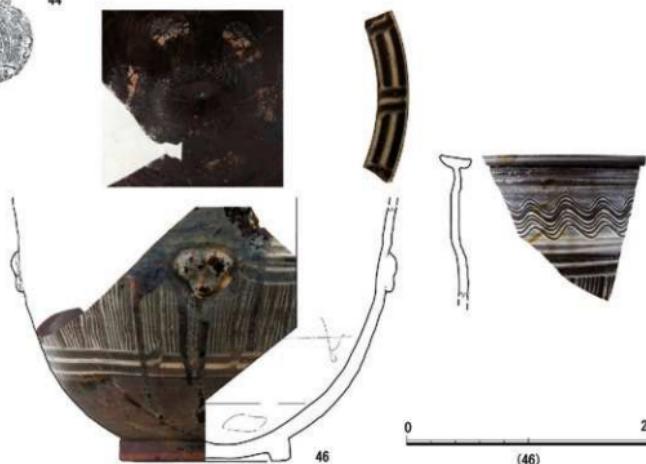


8-1-4-7 図 ニの丸屋形跡出土遺物実測図 5 (遺構外)



44

45



46

0 20cm
(46)

47



48



49

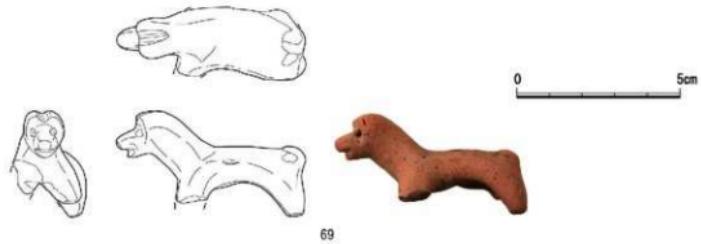
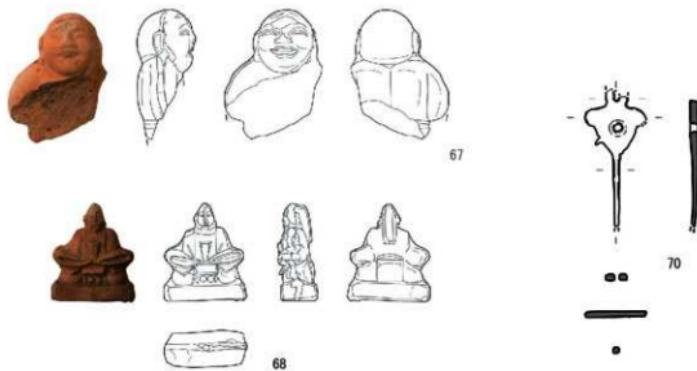


0 10cm

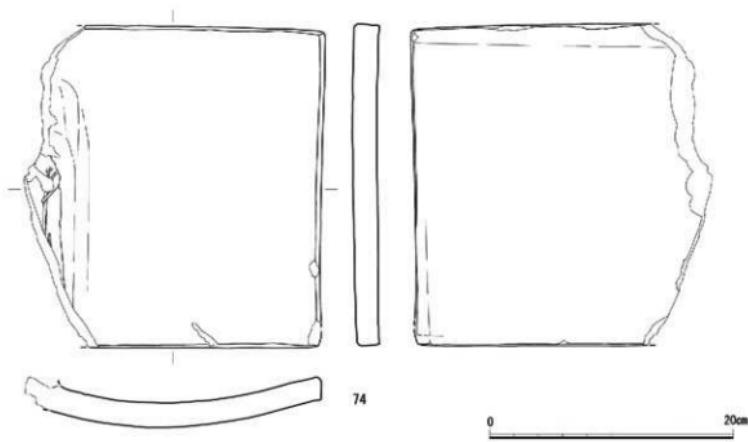
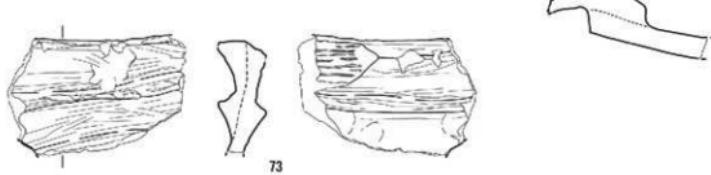
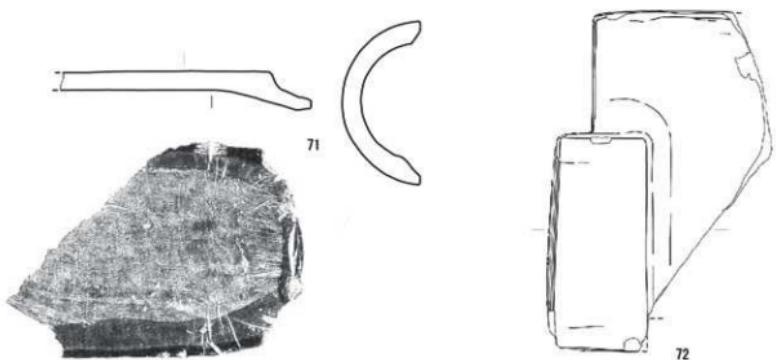
8-1-4-8 図 二の丸屋形跡出土遺物実測図 6 (遺構外)



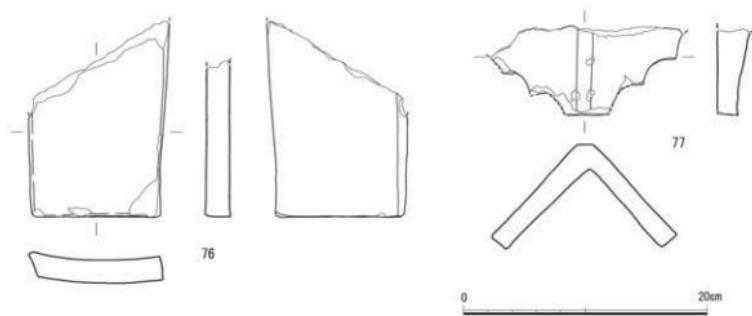
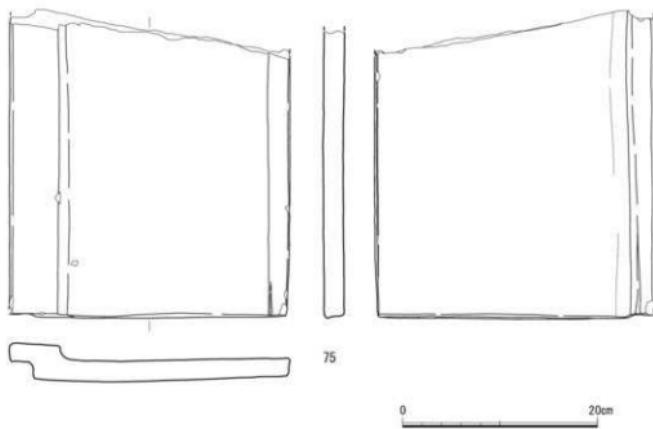
8-1-4-9 図 二の丸屋形跡出土遺物実測図7 (遺構外)



8-1-4-10 図 二の丸屋形跡出土遺物実測図 8 (遺構外)



8-1-4-11 図 二の丸屋形跡出土遺物実測図 9 (遺構外)



8-1-4-12 図 二の丸屋形跡出土遺物実測図 10 (遺構外)

がある。58 盆の高台にも 53・54 と同一の吉祥文が認められる。60～65 は中国産青磁・青花である。60 は同安窯系青磁青磁碗で、12 世紀後半の所産である。66 の白磁とともに平安時代末に位置づけられる。

土製品・人形として 67～69 がある。人形は布袋 (67)・天神 (68) で 68 は犬である。金属製品としては 77 の髪飾りが出土している。65 は青花盆で器壁が薄く精巧な作りであることから景德鎮窯の製品と考えられる。

71～77 は瓦を図示した。71 は丸瓦、72・74 は目板 (棟) 瓦、73 は鰐瓦の一部である。75 は目板瓦、76・77 は道具瓦である。

< 57 (三の丸第2駐車場) >

調査期間：平成20年（2008）9月1日～9月4日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

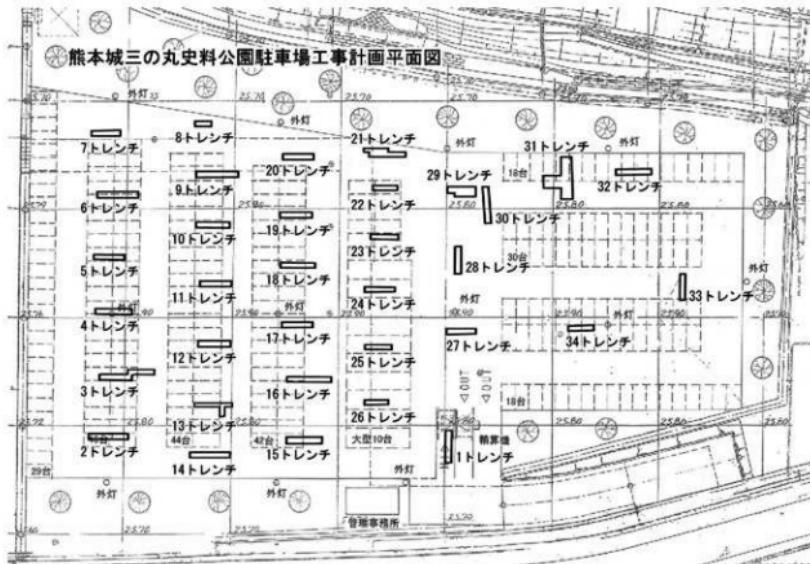
三の丸史料公園の一部が臨時駐車場として利用されていたが、駐車場として本格的な整備が計画された。設計前に文化財の存在を確認するために、平成20年7月30日に埋蔵文化財存在状況の確認について依頼がなされた。

・調査の方法

調査地全体に34カ所のトレンチを設定し、埋蔵文化財の把握を行なった。なお、遺構が検出されたトレンチについては、一部拡張を行ない遺構の状況把握に努めている。

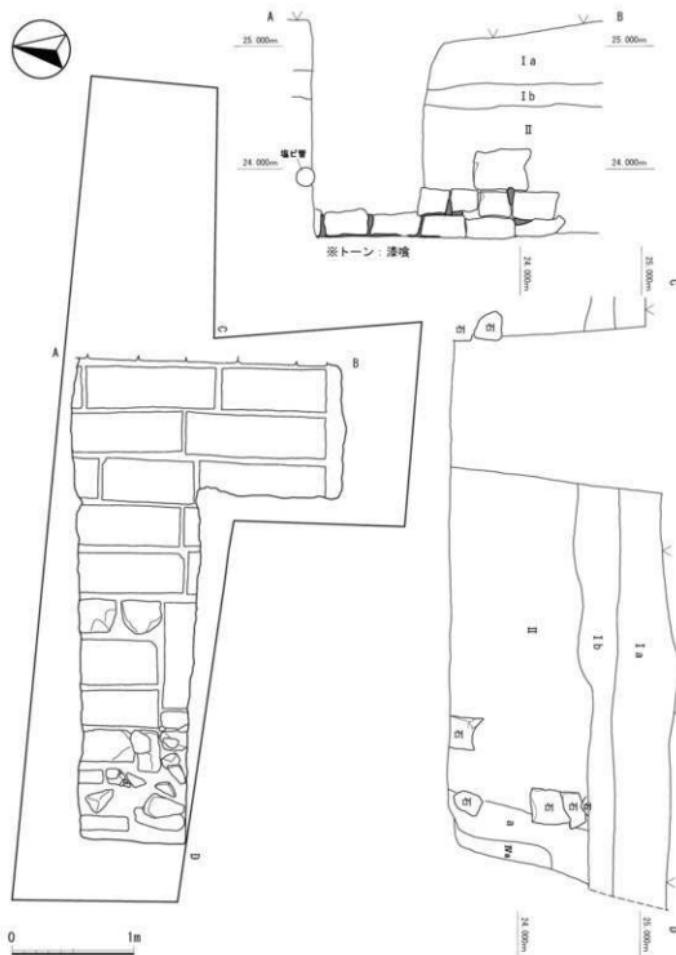
・調査の概要

大半のトレンチで遺構は確認されていない。13・21・31トレンチにおいて、近世の遺構を確認している。13トレンチでは、凝灰岩で構築された遺構を確認している。検出範囲は長さ約4m、幅約2.2mで地山の火碎石堆積物を切るように構築されている。全て凝灰岩製で、トレンチの東側では高さ約20cmの石材を3段検出しており、石材の目地には漆喰が認められた。底面は幅約32～34cmに加工された石材が敷き詰められていた。21トレンチは、南北方向の溝を確認している。全て凝灰岩製で、東側側壁は存在していないが、幅約33cmの石材を底に2枚敷いており、側壁を上に乗せる形で確認された。深さは約40cmである。なお溝の東側では、削平を受けた石材の一部を確認している。31トレンチでは南北方向の溝を確

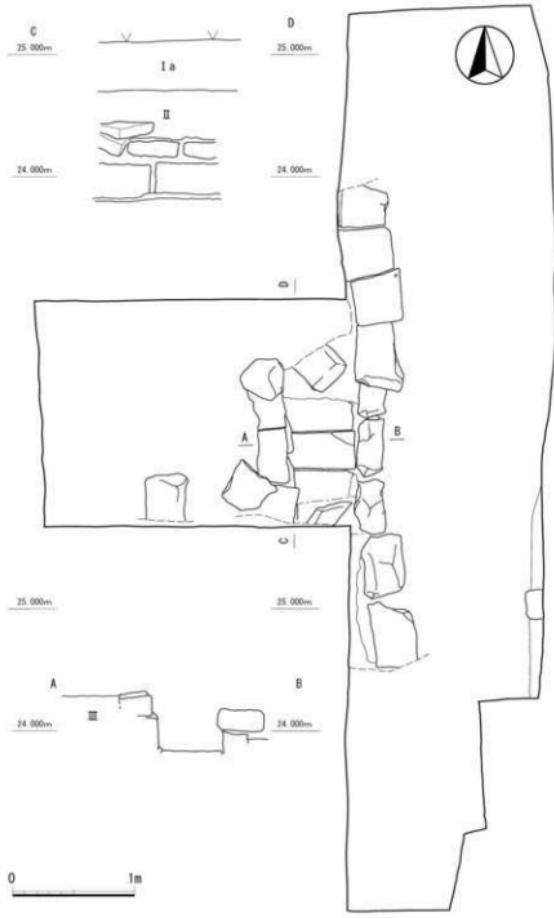


8-1-4-13 図 三の丸第2駐車場トレンチ配置図（縮尺任意）

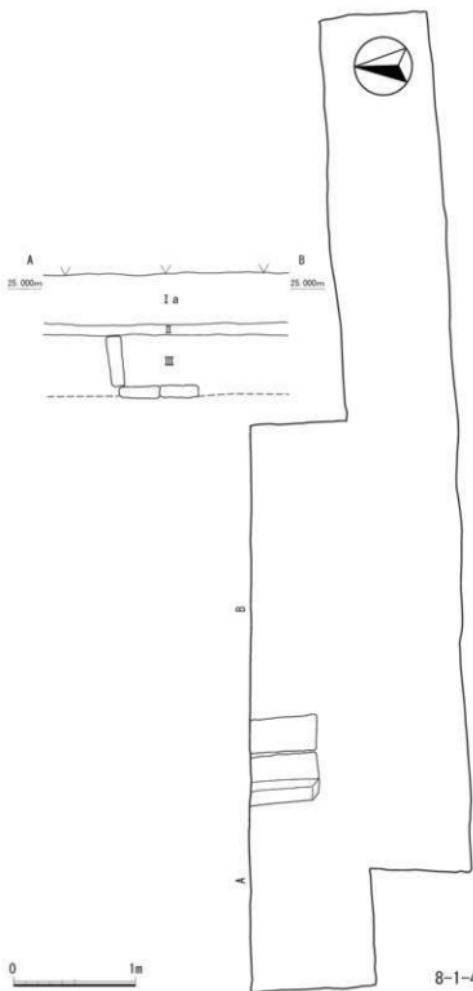
認している。全て凝灰岩製で、長さ約4m、内法で幅約55cm、深さ約44cmである。幅約30cm、長さ約45cmに加工した石材を底に敷き詰め、側壁は2段の石積みを検出している。なお調査地点北東部分に設定した32トレンチは、人为的埋土と推定される土層が、他のトレンチで確認した地山の火碎流より深い位置で確認した。32トレンチ周辺は、谷地形であったと想定される。



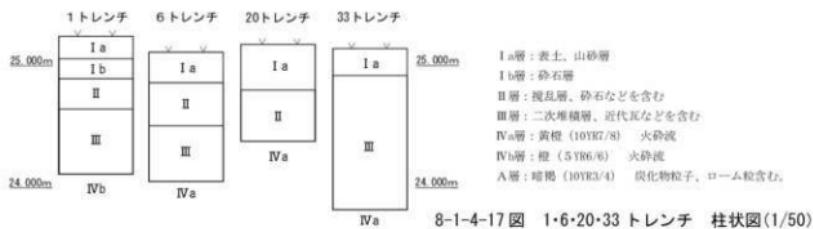
8-1-4-14 図 13 トレンチ 平面・断面図 (1/40)



8-1-4-15 図 31 トレンチ 平面・断面図 (1/40)



8-1-4-16 図 21 トレンチ平面・断面図 (1/40)



8-1-4-18 図 13 トレンチ



8-1-4-19 図 31 トレンチ

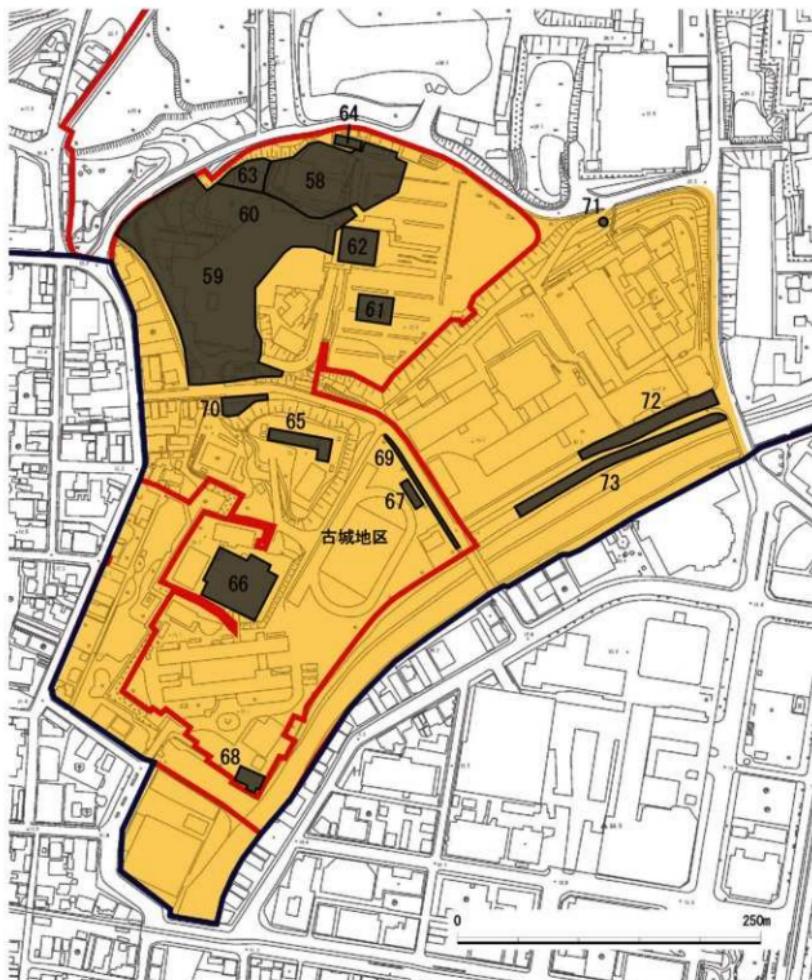


8-1-4-20 図 21 トレンチ



第5項 古城地区

古城地区では、16 地点の未公表発掘調査について紹介する。



58. (国立熊本病院) 59. (国立熊本病院) 60. (国立熊本病院) 61. (国立病院機構熊本医療センター 防火水槽) 62. (国立病院機構熊本医療センター ヘリポート) 63. (国立病院機構熊本医療センター 保育所) 64. (国立病院機構熊本医療センター 雨水貯留槽) 65. (熊本県立第一高等学校 寄宿舎) 66. (熊本県立第一高等学校 体育館) 67. (熊本県立第一高等学校 部室) 68. (熊本県立第一高等学校 清香会) 69. (熊本県立第一高等学校 脳通路) 70. 古城堀 (古城町 店舗) 71. 桜馬場 72. 桜馬場 (市道桜町第2号線) 73. 桜馬場・堀平左衛門預塚跡

8-1-5-1 図 古城地区調査地点位置図

< 58 (国立熊本病院) >

調査期間：平成 12 年（2000）9 月 1 日～9 月 3 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

国立熊本病院の建て替えが予定され、平成 12 年 8 月 30 日に、埋蔵文化財存在状況の確認について依頼がなされた。予定地は高低差が約 3 m 存在する範囲で、駐車場として利用されていた。

・調査の方法

調査範囲に高低差が存在することから、西側の高い部分を西区、東側の低い部分を東区と呼称して調査を実施した。西区は 1 トレンチから 9 トレンチ、東区は 10 トレンチから 14 トレンチを設定し調査を実施している。

・調査の概要

調査地は茶臼山台地の南西に延びる丘陵部の端部に位置している。江戸時代を通じて武家屋敷として利用された。明治時代になると、陸軍の衛戍病院が建設され、戦後は国立熊本病院、現在は国立病院機構熊本医療センターとして利用されている。

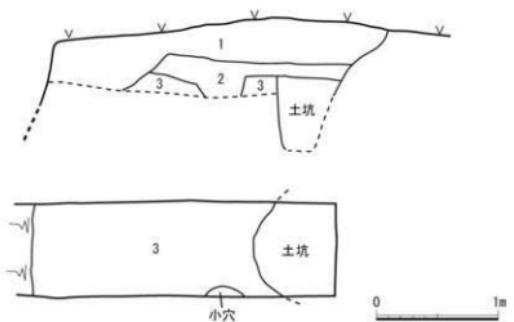
西区の基本層序は以下の通りである。1 層はアスファルト舗装、2 層は明治時代以降の陶磁器などを含む搅乱層、3 層はローム土層下位から火碎流上位とみられる地山層である。遺構は 1・6・7 トレンチで土坑・小穴を検出している。

東区は 10 トレンチにおいて溝の埋土と考えられる土層を検出している。溝を埋めたと考えられる土層は、トレンチ内においては水平堆積であるが方向や規模は不明である。また、トレンチの掘削では底部まで及ばず、深さについても未確認である。11 トレンチから 14 トレンチは、全て近現代の搅乱層を確認している。特に 14 トレンチは、表土より約 1.4 m 下に蓋が残ったコンクリート側溝を検出しておらず、陸軍の病院が建っていた時期は、現況より低かった所を、その後埋め立てていると考えられる。各トレンチとも旧建物基礎などにより図示した深さより下の掘削が不可能であったので、地山の状況は確認できなかつた。

なお西区部分は熊本県教育委員会により発掘調査が行なわれ、「古城上段」として報告されている（調査研究編第 2 分冊参照）。



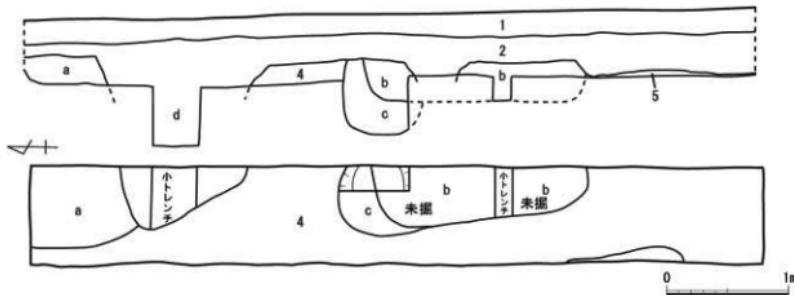
8-1-5-2 図 トレンチ設定図 (1/1000)



8-1-5-3 図 1 トレンチ北壁土層断面 (1/40)



8-1-5-5 図 10 トレンチ土層柱状図 (1/40)



8-1-5-4 図 6 トレンチ東壁土層断面 (1/40)

< 59 (国立熊本病院) >

調査期間：平成 16 年（2004）1 月 26 日～3 月 17 日

調査面積：不明

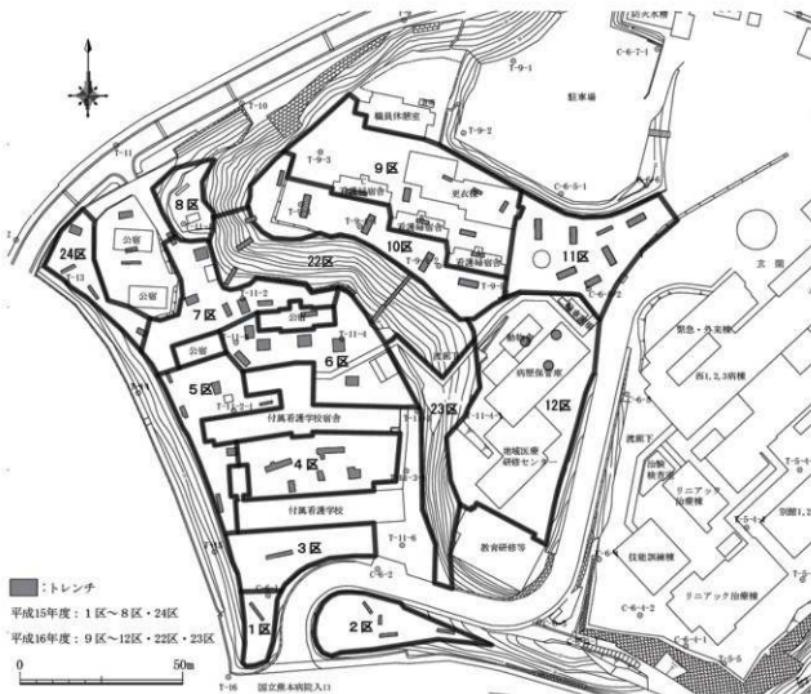
調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

国立熊本病院の建て替えが予定され、文化財の存在を確認するために平成 14 年 1 月 15 日に、文化財保護法第 57 条の第 2 第 1 項（当時）に基づく届出が提出された。

・調査の方法

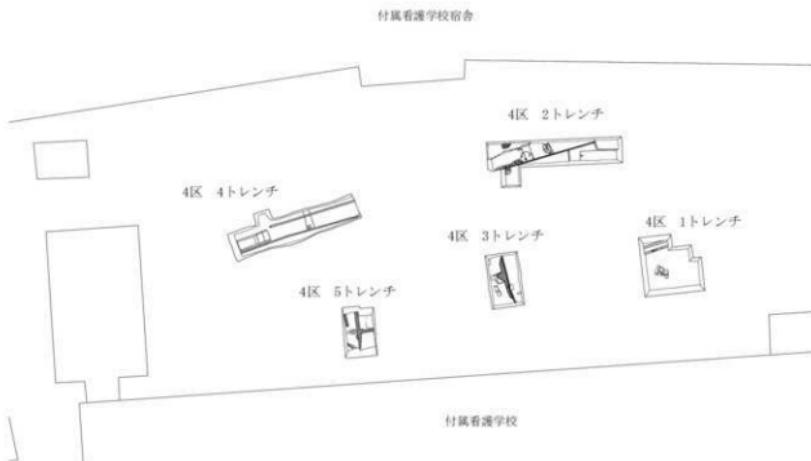
病院建て替えに伴う調査の実施に際し、敷地全体を 25 区画に分けて区画毎に調査を行なうこととした。今回の調査は病院建設が予定されている敷地の西側、約 13 m 低い場所に存在する付属看護学校及び看護学校宿舎を中心に、9 つの区画について調査を実施している。



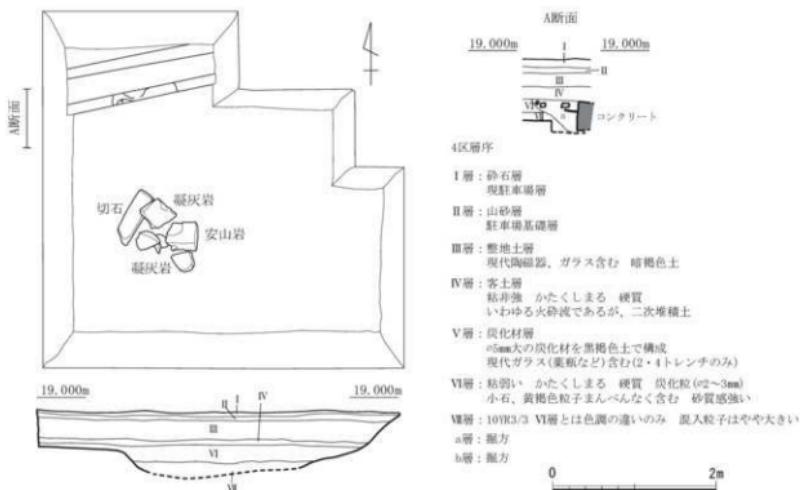
8-1-5-6 図 国立熊本病院全体図（平成 12・15・16 年度調査地点を表示）（1/1500）

・調査の概要

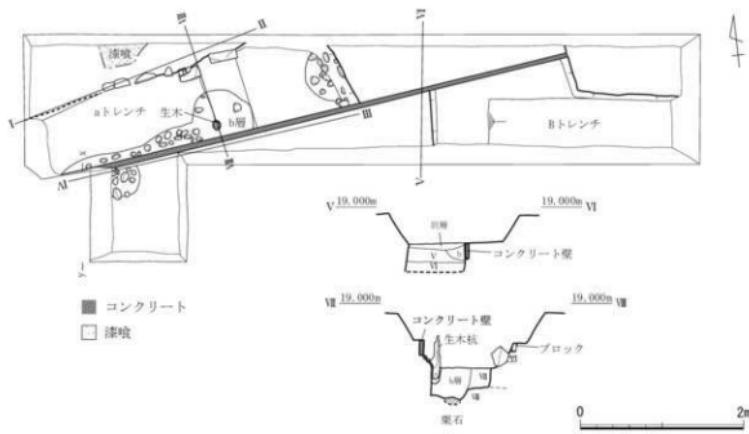
4区は1・2・4トレンチでブロック列を確認している。5区は3トレンチにおいて、ブロック積みの基礎を確認している。6区は3・5トレンチにおいて建物基礎の一部を確認している。7区は3トレンチでブロック基礎を確認している。以上の結果、国立熊本病院付属看護学校敷地全域を対象とした確認調査を実施したが、いずれのトレンチにおいても江戸時代に関連する遺構・遺物は確認されなかった。一方で、明治時代以降の建造物の一部を確認した。明治時代以降の遺物はコンテナ4箱分出土した。



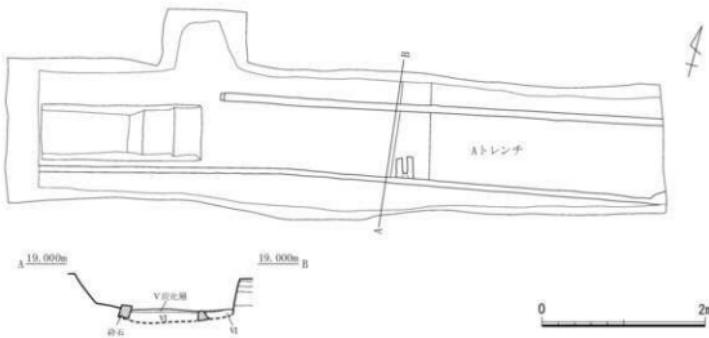
8-1-5-7 図 4区全体図 (1/300)



8-1-5-8 図 4区 1トレンチ 平面・断面図 (1/60)



8-1-5-9 図 4区2トレンチ 平面・断面図 (1/60)



8-1-5-10 図 4区4トレンチ 平面・断面図 (1/60)



8-1-5-11 図 4区1トレンチ



8-1-5-12 図 4区4トレンチ

< 60 (国立熊本病院) >

調査期間：平成16年（2004）10月26日～平成17年1月21日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

国立熊本病院の建て替えが予定され、文化財の存在を確認するために平成14年1月15日に、文化財保護法第57条の2第1項（当時）に基づく届出が提出された。

・調査の方法

病院建て替えに伴う調査の実施に際し、敷地全体を25区画に分けて区画毎に調査を行なうこととした。今回の調査は病院建設が予定されている敷地の西側、現病院が所在する標高と同じ高さに位置する更衣棟、宿舎などを中心に、5つの区画について調査を実施している。

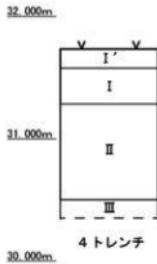
・調査の概要

9区は更衣棟を中心に8カ所のトレンチを設定した。いずれのトレンチでも約1mの掘削で地山である火砕流堆積物の土層が確認された。地山の上に堆積している土層も、現代に形成された新しい土層であった。遺構・遺物とも確認されていない。

10区は前回調査部分の崖面に接した部分であり、11区・12区は病院本館正面部分に位置する。いずれも平坦な地形であるが、12区がやや低い部分に位置する。この3区画に15カ所のトレンチを設定したが、調査結果は9区と同様に、現代に形成された新しい土層の下は、火砕流堆積物の地山しか確認されていない。

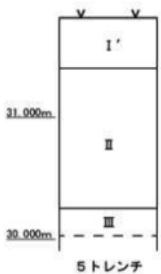
22区は急傾斜地であり、調査中の安全確保と、掘削後の埋め戻しが可能な場所のみを、調査している。土層の観察を行なった所、表土層直下は火砕流を確認している。遺構は確認されなかった。

以上の結果、国立熊本病院本館正面の更衣棟や看護棟宿舎部分・病歴保管庫、斜面部分を対象とした確認調査を実施したが、いずれのトレンチにおいても江戸時代に関連する遺構・遺物は確認されなかった。明治時代以降の遺物はコンテナ4箱分出土した。



8-1-5-14 図 10区 4 トレンチ

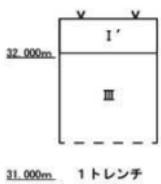
8-1-5-13 図 10区 4 トレンチ土層断面図



8-1-5-15 図 10 区 5 レンチ土層柱状図



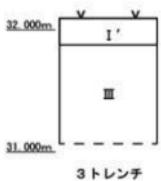
8-1-5-16 図 10 区 5 レンチ



8-1-5-17 図 11 区 1 レンチ土層柱状図



8-1-5-18 図 11 区 1 レンチ



8-1-5-19 図 11 区 3 レンチ土層柱状図



8-1-5-20 図 11 区 3 レンチ

< 61 (国立病院機構熊本医療センター 防火水槽) >

調査期間：平成 22 年（2010）4 月 22 日～4 月 23 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

国立病院機構熊本医療センター敷地の東側、旧病院棟部分に防火水槽設置が計画され、平成 22 年 3 月 26 日に、文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出が提出された。

・調査の方法

建設予定範囲に 3 カ所のトレーニングを設定して、調査が行なわれた。

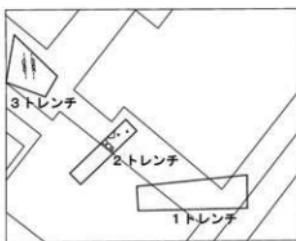


8-1-5-21 図 国立病院機構熊本医療センター全体図

(61 防火水槽、62 ヘリポート、63 保育所、64 雨水貯留槽を表示) 縮尺任意

・調査の概要

調査の結果、2 トレーニングでピットと土坑を検出して いる。3 トレーニングは南北方向の石組みの溝を検出して いる。



8-1-5-22 図 トレーニング配置図 (1/300)

< 62 (国立病院機構熊本医療センター ヘリポート) >

調査期間：平成 22 年（2010）10 月 6 日～10 月 15 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

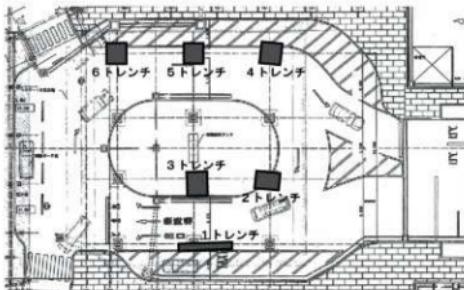
国立病院機構熊本医療センター東側のヘリポート建設に伴い、平成 22 年 9 月 9 日、文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出が提出された。

・調査の方法

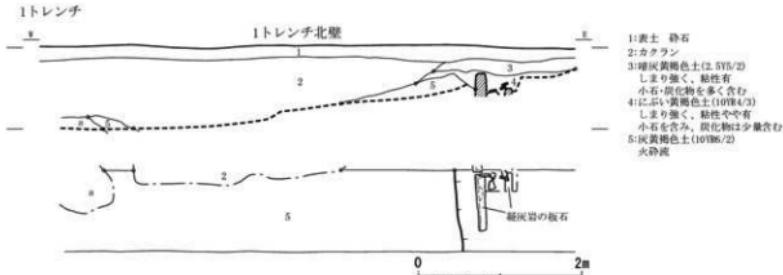
基礎の建設予定範囲に 6 カ所のトレーンチを設定して、調査が行なわれた。基礎設置予定地南側東西方向に 1 トレーンチ、2 トレーンチから 6 トレーンチは、基礎の形状に合わせて約 3 m 四方の範囲で調査を実施した。

・調査の概要

調査の結果、1 トレーンチでは表土下約 40 cm で地山である火碎流を確認している。この火碎流を掘削するように、近代頃の土坑や凝灰岩の板石を確認している。2 トレーンチでは表土下約 10 cm で、1 トレーンチ同様近代頃の土坑を確認している。3 トレーンチは全て現代の土層を確認している。4 トレーンチでは、表土下約 70 cm から地山である火碎流を確認している。5・6 トレーンチは表土下 30 cm から 35 cm で全面コンクリートを確認した。遺構・遺物などは確認されていない。



8-1-5-23 図 トレーンチ配置図 (1/600)



8-1-5-24 図 1 トレーンチ平面・断面図 (1/40)



8-1-5-25 図 4・5 トレーンチ土層柱状図 (1/40)

< 63 (国立病院機構熊本医療センター 保育所) >

調査期間：平成 22 年（2010）11 月 22 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

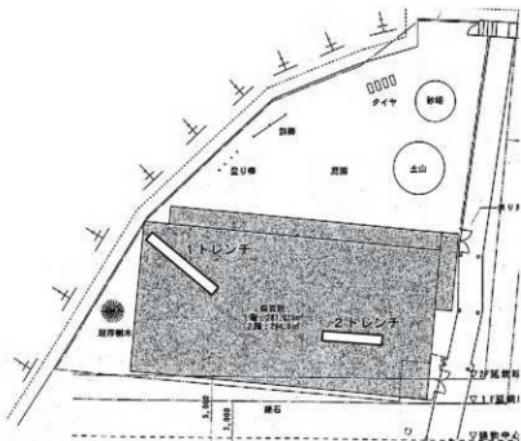
国立病院機構熊本医療センター敷地の北側保育所建設に伴い、平成 22 年 11 月 16 日、文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出が提出された。

・調査の方法

基礎の建設予定範囲に 2 カ所のトレンチを設定して、調査が行なわれた。

・調査の概要

調査の結果、1 トレンチで表土下約 26 cm、2 トレンチで約 76 cm 下から地山である火砕流を確認している。遺構・遺物などは確認されていない。



8-1-5-26 図 トレンチ平面配置図 (1/400)



8-1-5-27 図 土層柱状図 (1/40)

< 64 (国立病院機構熊本医療センター 雨水貯留槽) >

調査期間：平成 23 年（2011）2 月 25 日～10 月 15 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

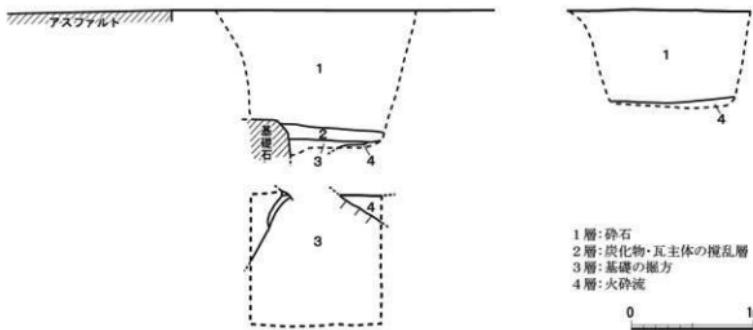
国立病院機構熊本医療センター敷地の北側に雨水貯留槽建設に伴い、平成 22 年 5 月 19 日、文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出が提出された。

・調査の方法

基礎の建設予定範囲に 1 カ所のトレンチを設定して、調査が行なわれた。

・調査の概要

調査の結果、表土から約 1 m から 1.2 m の碎石層と碎石層直下の搅乱層。地山層である火碎流は、地表面から下に約 1.4 m の深さで確認している。この地山層を掘削した現代の基礎とその掘方も確認している。遺構・遺物などは確認されていない。



8-1-5-28 図 トレンチ土層柱状図 (1/40)

< 65 (熊本県立第一高等学校 寄宿舎) >

調査期間：昭和 59 年（1984）9 月 11 日～10 月 26 日

調査面積：約 210 m²

調査主体：熊本県教育委員会

・調査に至る経緯

寄宿舎の改築に伴い、発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

調査範囲は東西に長い L 字状で、東側の南端から西側に向かって調査が進められた。

・調査の概要

調査区東側で柱穴群が確認され、調査区中央に中世の溝が確認された。なお、所見はすべて図面と調査日誌からの抜粋である。

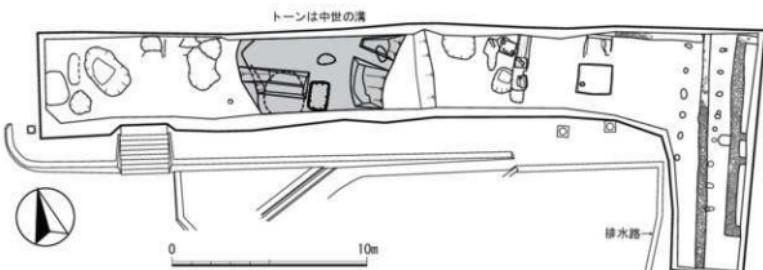
中世の溝は調査区北壁付近で屈曲しており、最大幅は 11 m を超えている。深さは 2 m 以上あり、時代は室町時代と認識されている。

中世の溝と重複する長軸 2 m・短軸 1.5 m の江戸時代の土坑から、三隅で鉄釘が出土し墓と判断されている。この土坑からは合わせて釘が 5 本と土師器・磁器が出土している。ほか、江戸～明治時代の廃棄土坑がある。

出土遺物は調査日誌の記載であるが、室町時代の土師器・瓦質土器・青白磁、江戸時代の土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦・鉄が出土している。



8-1-5-29 図 調査地位置図 (1/2000)



8-1-5-30 図 遺構配置図 (1/250) (熊本県教育委員会提供)

< 66 (熊本県立第一高等学校 体育館) >

調査期間：平成5年（1993）9月24日～平成6年1月14日

調査面積：約1300 m²

調査主体：熊本県教育委員会

・調査に至る経緯

熊本県立第一高等学校体育館改築工事に伴い発掘調査が行なわれた。平成5年8月31日に確認調査が行なわれ、遺構の存在範囲を確定した。

・調査の方法

表土剥ぎの後、10月8日から本格的に掘削が始まられた。調査は明治時代以後の遺構から行なわれ、明治時代の調査終了後11月18日から江戸時代以前の遺構について調査が行なわれた。

・調査の概要

所見はすべて図面と調査日誌からの抜粋である。明治以降の遺構として方形の土坑が多数並んで検出された。土坑の上面に石炭ガラを含む層があり、その下に瓦や漆喰・遺物を含み、最下部は軽石を主とする土層であった。この土坑からは同時に寛永通宝も出土している。ほか貝類を含む土坑や、銅錢・キセル・かんざしも出土している。灰が入った土坑があり、それは軍の書類を焼いたものであった。併せてバインダー・壺・ウイスキー瓶・紐などが出土している。

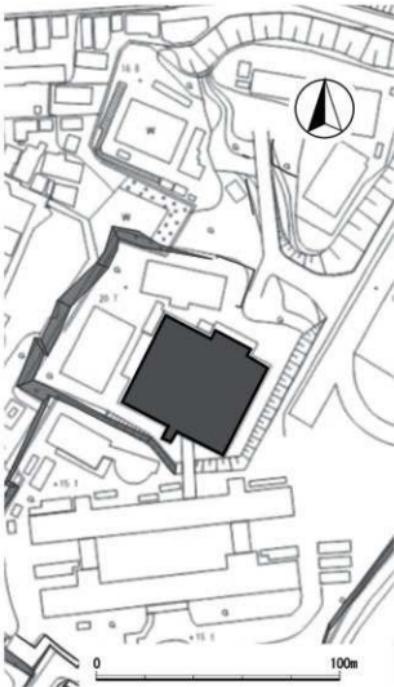
江戸時代の遺構には、石組み水路、溝・井戸、土坑・埋め甕・柱穴がある。

石組み水路は調査区の南側で検出されている。およそ東西に伸び、中央付近でT字状に南に延びている。

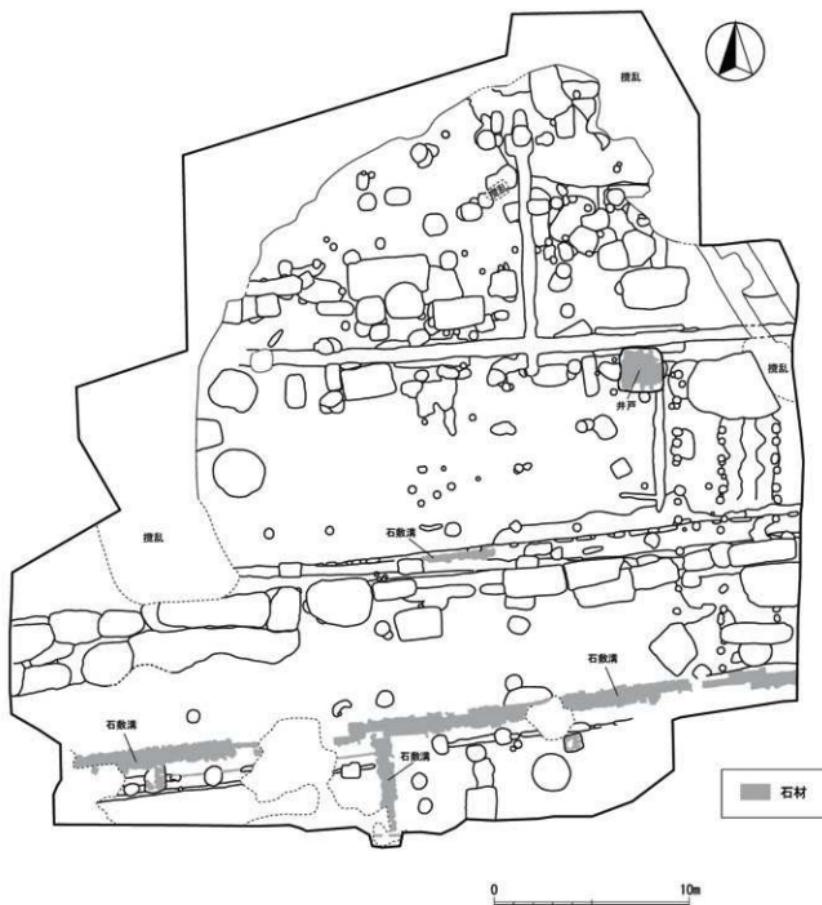
井戸は調査区中央よりやや北東側で検出された。上面は石で閉塞されていて、この閉塞石に柄穴を有する安山岩の石柱を6本以上使用していた。閉塞石を取り上げると、上位は2.2～2.3m四方の土坑状となっていて、井筒の外側に平石を5枚以上並べてあった。井筒は1.3～1.5mの隅丸で、5.6m下まで空間があり、それより下は埋められていた。

埋め甕は2基並んで検出されたがひとつは痕跡のくぼみのみ、もうひとつは底部のみ残存であった。なお、埋め甕からはスッポンの骨が出土している。

土坑からは明代の青磁・青花が出土している。



8-1-5-31 図 調査地位置図 (1/2000)



8-1-5-32 図 遺構配置図 (1/250) (熊本県教育委員会提供)

< 67 (熊本県立第一高等学校 部室) >

調査期間：平成15年（2003）1月14日～2月21日

調査面積：約125m²

調査主体：熊本県教育委員会

- ・調査に至る経緯

部室の改築に伴い調査が行なわれた。

- ・調査の方法

不明

- ・調査の概要

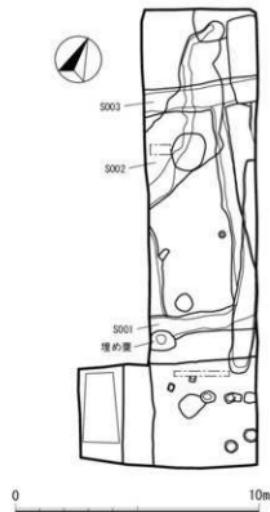
検出された主要な遺構は溝である。S001は逆L字の溝で多量の礫が含まれていた。S002は、北側で検出されている。S003は東西に伸びる溝状である。

ほか、調査区南側の柱穴から礫がまとまって出土している。S001と重複する埋め堀がある。北側と東側に接して平石があることから便槽の可能性が高い。

検出された遺構の時代・時期については不明である。



8-1-5-33 図 調査地位置図 (1/2000)



8-1-5-34 図 遺構配置図 (1/200)
(熊本県教育委員会提供)

< 68 (熊本県立第一高等学校 清香会) >

調査期間：平成7年（1995）2月20日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

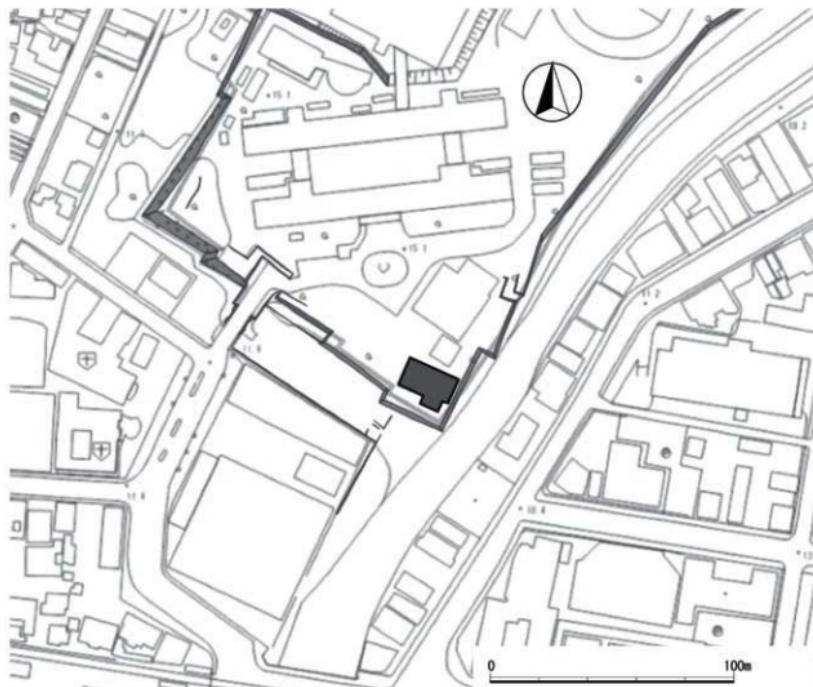
学校施設工事が計画され、平成7年2月15日付けで文化財保護法第57条の2第1項（当時）に基づく届出が提出され、確認調査が行なわれた。

・調査の方法

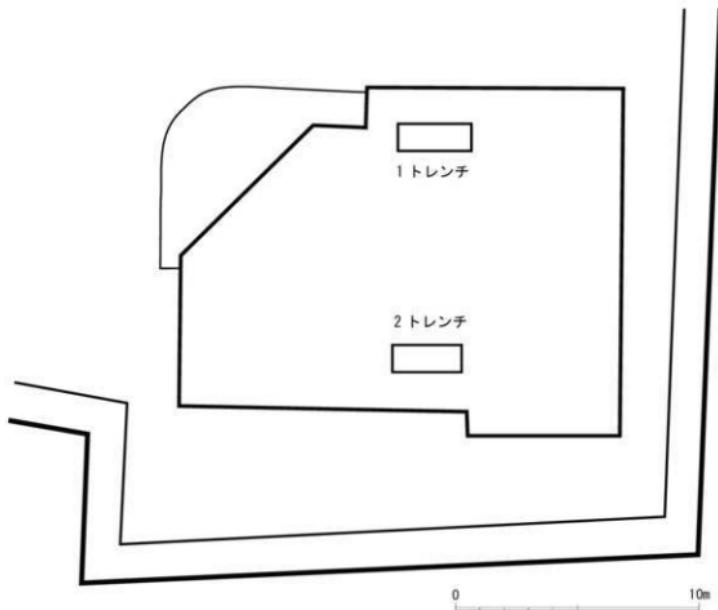
トレンチは2カ所設定され、土層柱状図が作成されている。

・調査の概要

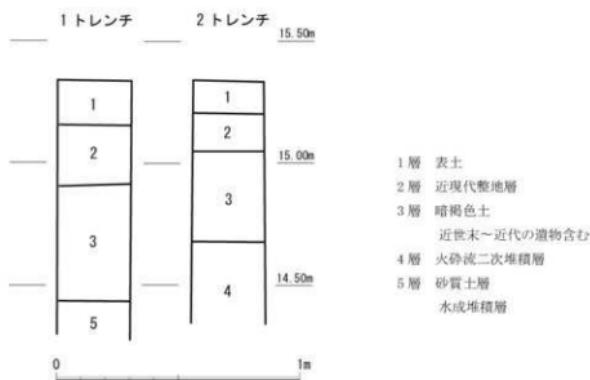
2カ所のトレンチは土層の堆積状況が近似している。1～3層までは同一で3層が江戸時代末～近代とされている。4層は火碎流、5層は砂層であり、河川を埋めた状況が見て取れる。



8-1-5-35 図 調査地位置図 (1/2000)



8-1-5-36 図 レンチ位置図 (1/200)



8-1-5-37 図 レンチ土層柱状図 (1/20)

< 69 (熊本県立第一高等学校 脇通路) >

調査期間：平成21年（2009）8月19日～8月20日

調査面積：約 19 m²

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

歩道整備工事が予定され、文化財保護法第94条1項に基づく通知がなされた。予定される工事により盛土と石垣の撤去が行なわれることから、石垣の時期を確認すること目的として確認調査が行なわれた。

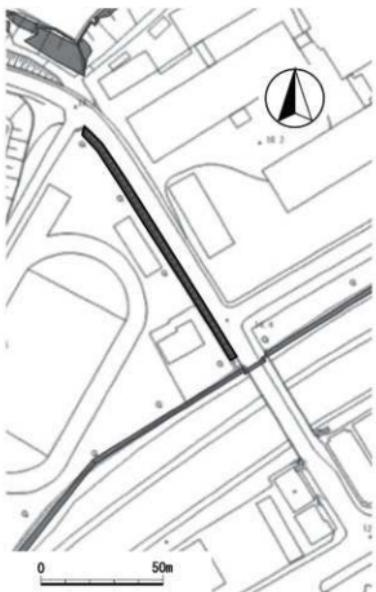
・調査の方法

石垣をまたいで東西方向に6カ所のトレンチを設定し、石垣の構築状況を確認した。

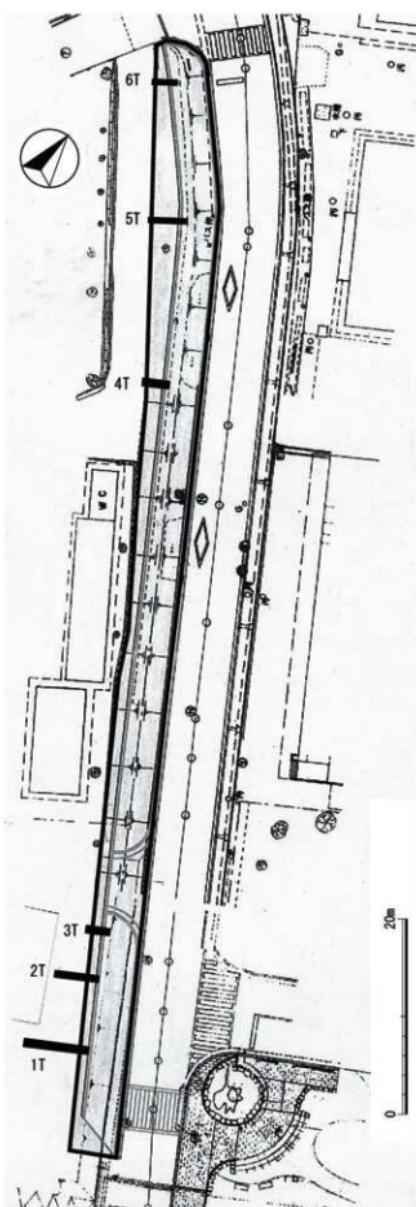
・調査の概要

石垣は5段以上あり、近代以降に盛土・整地されたことが判明した。盛土・整地層から旧陸軍専用の瓦が多量に出土している。石垣の構築方法も近代の特徴を備えている。

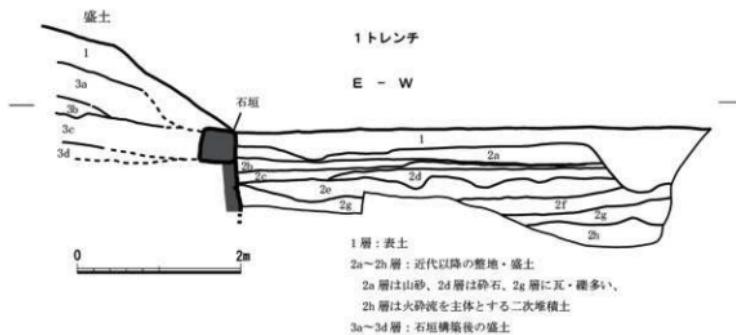
遺物は近代の瓦のほか、江戸時代末期の陶磁器が出土している。



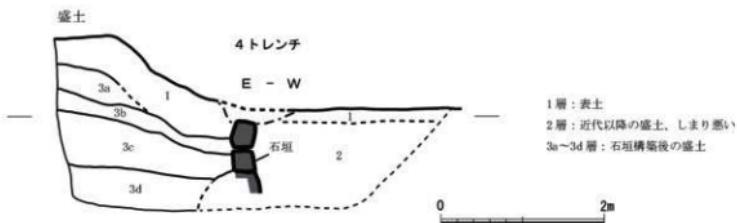
8-1-5-38 図 調査地位置図 (1/200)



8-1-5-39 図 トレンチ位置図 (1/500)



8-1-5-40 図 1 トレンチ土層実測図 (1/60)



8-1-5-41 図 4 トレンチ土層実測図 (1/60)

< 70 古城堀（古城町 店舗）>

調査期間：平成11年（1999）3月31日

調査面積：約10m²

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

店舗新築工事が計画され、平成11年3月24日文化財保護法第57条の2第1項（当時）に基づく届出が提出された。これに伴い、遺構確認のための発掘調査を実施した。

・調査の方法

トレンチを2ヵ所に設定し、土層の堆積状況や遺構・遺物の検出を行なった。しかし両トレンチとともに現地表面から下に約1m前後で湧水し、約1.5mの深さまで掘削を行なった時点では壁面の崩落が起こり危険であると判断し中止した。

・調査の概要

調査地は熊本城跡遺跡群包蔵地範囲の南西端に位置する。東から西にかけて緩やかに下る。標高は約13mである。江戸時代には、現在の国立病院機構熊本医療センターが所在する古城上段の丘陵部と、その南西の一段下った場所を区画する堀切の中であった。

土層の堆積状況は両トレンチとも同じである。

1層：客土層・碎石

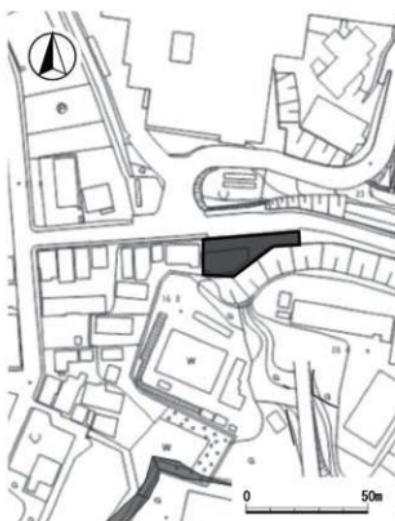
2層：整地層、炭片・焼土を多く含む

3層：暗オリーブ褐色土層（炭粒子・石を含む、グライ化している）

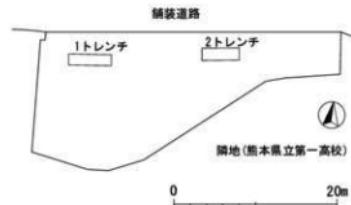
4層：黒褐色砂質土層

土質の状況、過去の確認調査から、堀の内部に堆積している土層であると考えられる。

以上のような状況から、調査地全体が堀内部であると判断されるが、その埋土はほとんど近代以降のものである可能性が高い。



8-1-5-42 図 調査地位置図 (1/2000)



8-1-5-43 図 トレンチ位置図 (1/600)

<71 桜馬場>

調査期間：平成21（2009）年1月25日～1月27日

調査面積：約15 m²

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

桜の馬場整備工事の一環として野外付帯施設の建設が計画され、平成21年12月22日に文化財保護法第93条第1項に基づく届出が提出された。これに伴い、遺構確認のための発掘調査を実施した。

・調査の方法

トレンチを工事計画箇所に2ヵ所設定した。1トレンチと2トレンチで土層に若干の差異が見られた。

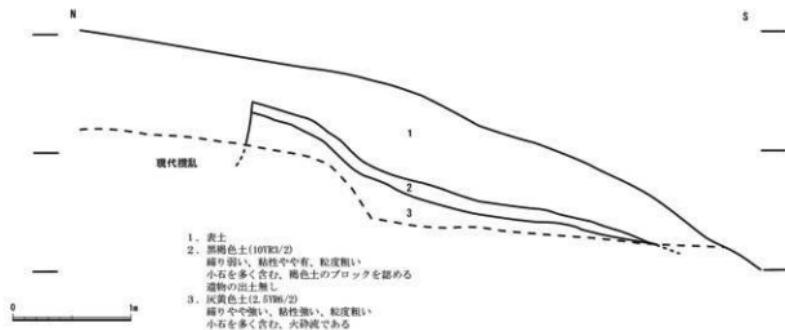
・調査の概要

調査地は慶宅坂東側に位置し、標高は約26mである。両トレンチともに遺物は近世以降のもののみであり、遺構は検出されていない。2トレンチにおいて、硬化面が表土より約-0.8mのところで斜面に沿って検出された。2層には近代遺物が含まれることから、硬化面は近代以降の所作であることは明確である。

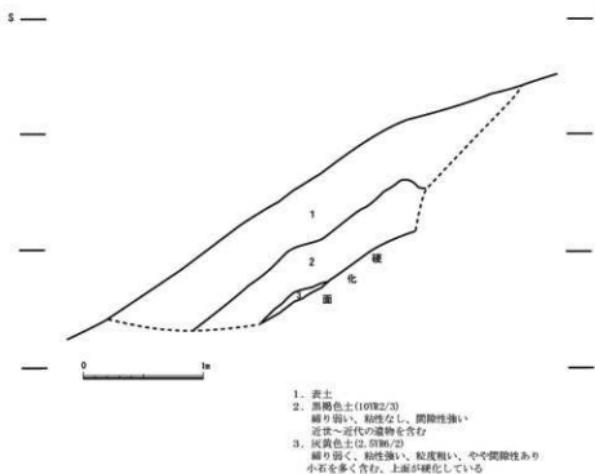
昭和35年（1960）の熊本国体では熊本県営熊本城プールが水泳会場であり、慶宅坂が入り口であったことから、周辺整備に伴うものとも考えられる。絵図を見て、近世段階では遺構らしいもののが存在しないことから、検出された硬化面は新しいものであると考えられる。



8-1-5-44 図 トレンチ位置図 (1/1000)



8-1-5-45 図 1 トレンチ土層図 (1/40)



8-1-5-46 図 2 トレンチ土層図 (1/40)

< 72 桜馬場（市道桜町第2号線）>

調査期間：平成22年（2010）6月4日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

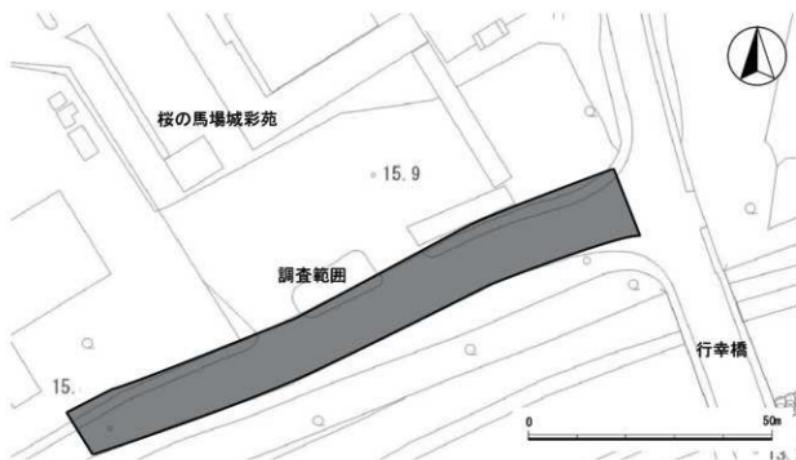
熊本市道桜町第2号線道路拡幅改良工事（全長約130m）が計画され、平成22年5月31日に文化財保護法第93条第1項に基づく届出が提出された。これに伴い、遺構確認のための発掘調査を実施した。

・調査の方法

トレンチを工事計画箇所に2ヵ所設定した。

・調査の概要

調査地は行幸坂の南西側に位置し、標高は約15mである。両トレンチともに表土下-0.2m程度の地点で、非溶結凝灰岩の二次堆積層である灰色土（5Y4/1）を検出した。



8-1-5-47 図 調査範囲図 (1/1000)

< 73 桜馬場・堀平太左衛門預櫓跡 >

調査期間：平成元年（1989）8月～11月

調査面積：約 4020 m²

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

熊本市が坪井川流域リバーウォーク沿いの景観の向上を目的として、重要文化財長堀の西側へ続く堀と櫓の復元を計画。平成元年6月19日現状変更を申請し、建造物復元に伴う遺構確認のための発掘調査を実施した。

・調査の方法

発掘は、東側では堀の控柱の痕跡を検出することに主眼を置き、石垣と平行に2.5m幅のトレンチを6カ所設定し、北から第1～第6トレンチとした。西側では旧地形を明らかにすることに重点をおき、石垣と直交する70cm幅のトレンチを2カ所設定し、第8～9トレンチとした。

・調査の概要

調査地は旧城城南側、坪井川沿いの石垣上に位置する。江戸時代には桜馬場内部は武家屋敷地であり、石垣上には堀と堀平太左衛門預櫓と呼ばれる単層の櫓が存在した。

(1) 第1～第6トレンチ (8-1-5-49図)

検出した整地面は、現在の石垣の天端より60cm程度がっており、更に北側では30cm程下がっている。いずれも明治以降の建物の基礎、石垣の積み替え等による搅乱によって、堀の控柱の痕跡を検出することが出来なかった。

(2) 第7トレンチ (8-1-5-50図)

レンガの基礎が露出しており基礎部分を避けて掘削を行なった。基礎の南側では、地表面より約40cm下で溝1を検出した。北側では約70cm下で硬化面を検出した。この硬化面でトレンチを東西および北側に拡張したが、東側では旧陸軍時代のレンガ基礎で搅乱され、西側で溝を2本検出し、北側で小規模の石垣状の遺構を検出した。しかし、堀平太左衛門預櫓の遺構と見られるものは検出されなかった。

(3) 第8～第9トレンチ (8-1-5-51図)

このトレンチでは、遺構面が現地表面から約40cmと比較的浅いところで検出されたが、現地表面自体が西に向かって傾斜しており、遺構面の絶対高は他の部分と変わらない。このトレンチでは第7トレンチから続く溝1と石垣状遺構を検出した。

調査地は明治時代に熊本鎮台の兵器倉庫に使用されたため、堀の控柱や堀平太左衛門預櫓の位置は確認できなかったが、地形的には本丸の長堀と同様に堀側が一段高くなり屋敷側が下がっていたことが判った。また、溝1は堀の排水路と考えられる。

・出土遺物

コンテナ3箱分の遺物（陶磁器・瓦・鉄製品等）が出土しており、内9点の実測を行なった（8-1-5-52図）。1～5は陶磁器類である。1は18世紀初頭の肥前系の磁器染付皿である。2は17世紀中頃の肥前系の磁器染付小杯である。3は17世紀代の磁器脚付皿である。4は18世紀代の肥前系の磁器碗である。5は19世紀代の肥前系の磁器碗である。6～8は瓦類である。6は日足文軒丸瓦である。7は三巴文軒丸瓦で、巴文は右巻きで珠文は16個である。8は丸瓦で玉縁は短く、凸面に工具によるケズリ痕が複数見られ、凹面には2cm幅の縦方向のナデ痕跡が見られる。9はレンガで、表面に「SHINAGAWA」という刻印が残り、品川白煉瓦製のレンガと考えられる。



第7トレンチ（東から）



第7トレンチ溝2（南から）

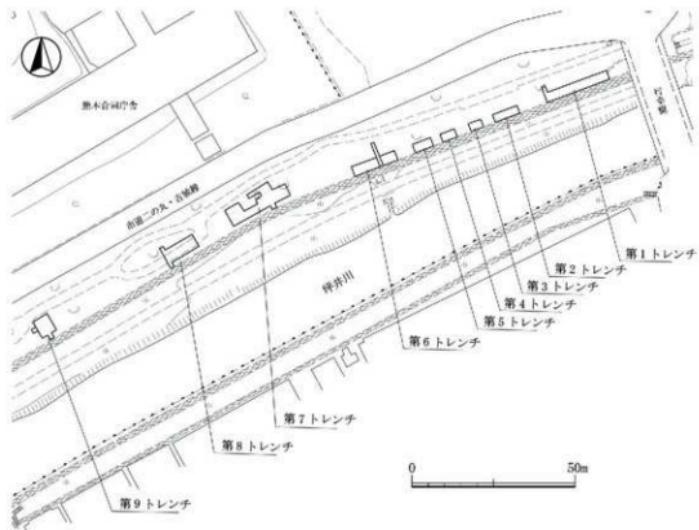


第8トレンチ（東から）



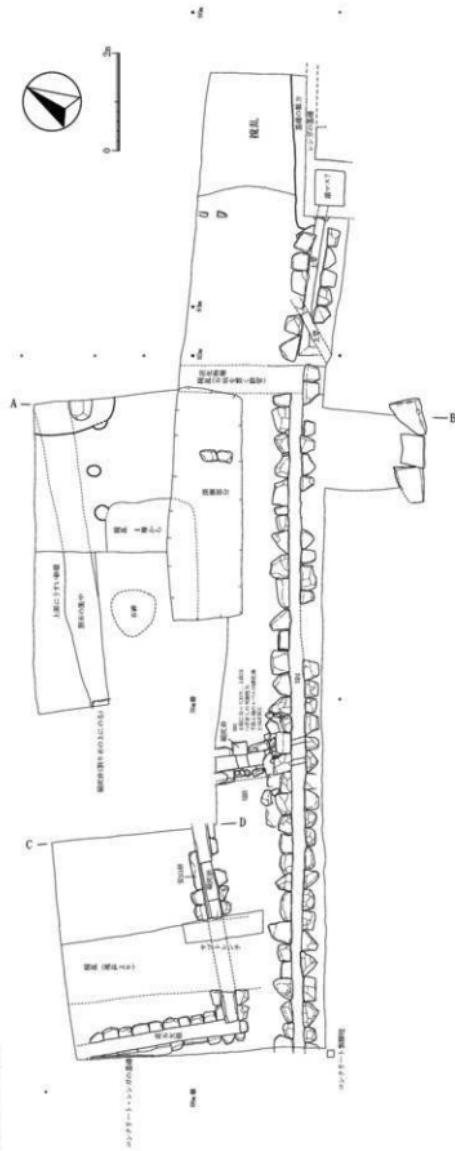
第8トレンチ石列遺構（南から）

8-1-5-48図 調査状況写真



8-1-5-49図 調査トレンチ位置図 (1/1500)

第7トレンチ平面図



第7トレンチ東面セクション図

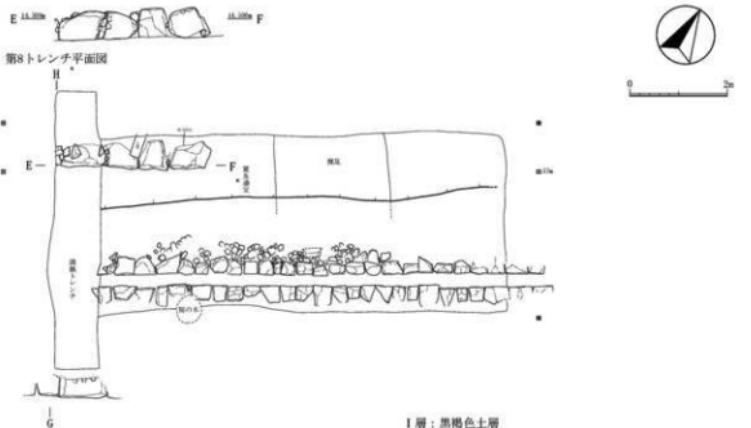


第7トレンチ東面セクション図

I層：黄褐色土層(1.5m厚)	1層：黄褐色土層(1.5m厚)
II層：黄褐色土層(1.5m厚)	II層：黄褐色土層(1.5m厚)
III層：灰褐色土層(1.5m厚)	III層：灰褐色土層(1.5m厚)
IV層：灰褐色土層(1.5m厚)	IV層：灰褐色土層(1.5m厚)
V層：明褐色土層(1.5m厚)	V層：明褐色土層(1.5m厚)
VI層：明褐色土層(1.5m厚)	VI層：明褐色土層(1.5m厚)
VII層：明褐色土層(1.5m厚)	VII層：明褐色土層(1.5m厚)
VIII層：明褐色土層(1.5m厚)	VIII層：明褐色土層(1.5m厚)
X層：明褐色土層(1.5m厚)	X層：明褐色土層(1.5m厚)
XI層：明褐色土層(1.5m厚)	XI層：明褐色土層(1.5m厚)
XII層：明褐色土層(1.5m厚)	XII層：明褐色土層(1.5m厚)

8-1-5-50 図 調査トレンチ 遺構平断面図 1 (1/100)

第8トレンチ石列造構立面図

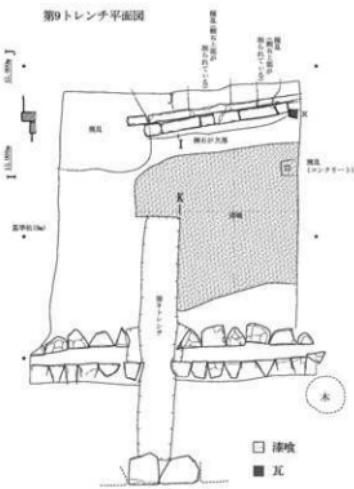


第8トレンチ西壁断面図

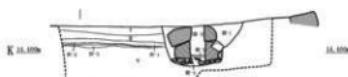


- I層：黒褐色土層
- II-1層：炭化物層
- II-2層：暗褐色土層
- III層：明褐色土層 しまり強く 灰白色土帯状に
- IV層：暗褐色土層(7.SYR3/3) 明褐色土、灰白色土ブロック混入
津吹をやぐるむ
- V層：暗褐色土層(7.SYR3/4) 津吹、炭化物、瓦、礫岩片、
安山岩片等を多量に含む
- VI層：暗褐色土層(7.SYR3/4) 明褐色土、灰白色土粒子を
やや多く含む
- VII層：暗褐色層 白灰色土。暗褐色土がまじる
瓦は、巴、光忙状の瓦当のみ 糸切り 寛永通宝出土
- VIII層：SDI瓶方
- IX層：フク土
- X層：フク土

第9トレンチ平面図

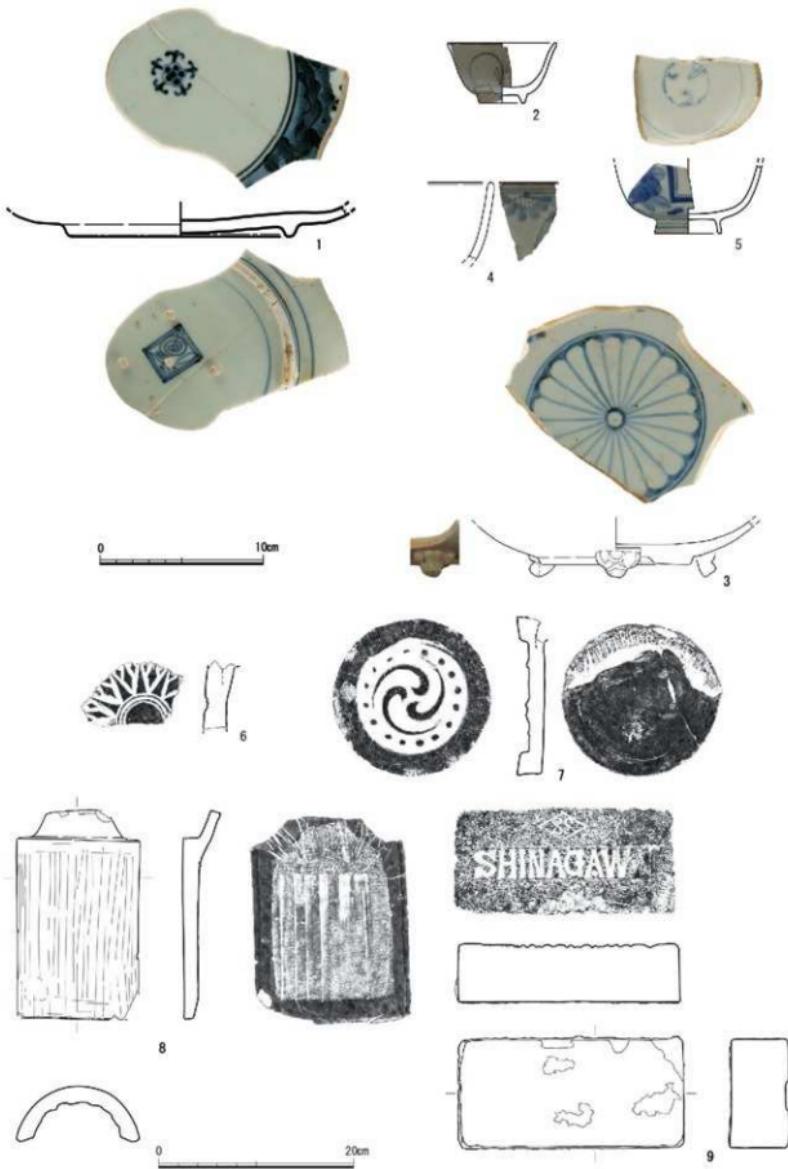


第9トレンチセクション図



- I層：黒褐色土層(7.SYR2/2) 表土
- II層：暗褐色土層(7.SYR3/4) 明褐色土、灰白色土、
炭化物、小罐等混入
- III-1層：黒褐色土層(7.SYR3/2) 近代瓦等混入 SDI瓶方
- III-2層：黒褐色土層(7.SYR2/2) SD17ク土 ガラス、レンガ、
近代瓦等混入 王砂利を含む
- III-3層：褐色土層(7.SYR3/3) SD1底 三和土?
- III-4層：V層と同じであるが、ややしまりが強く炭化物を多く含む
- IV-1層：灰白色土層(7.SYR3/2) 明褐色土ブロック混入
- IV-2層：暗褐色層
- IV-3層：灰白色土、明褐色土混合 基本的にはIV-1層と同じか?
明褐色土を含む 下の方ほど混入多し
- V層：暗褐色土層(7.SYR3/4) しまり強め 灰白色土。

8-1-5-51 図 調査トレンチ 造構平面図2 (1/100)



8-1-5-52 図 出土遺物実測図

第6項 千葉城地区

千葉城地区では、5地点の未公表発掘調査について紹介する。



74.（千葉城町 共同住宅） 75.（熊本家庭裁判所） 76.（熊本県伝統工芸館） 77.（熊本県立美術館分館） 78.（高橋公園）

8-1-6-1 図 千葉城地区調査地点位置図

< 74 (千葉城町 共同住宅) >

調査期間：平成 22 年（2010）9 月 22 日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

共同住宅建設が計画され、平成 22 年 9 月 15 日
埋蔵文化財存在状況の確認について依頼がなさ
れ、確認調査が行なわれた。

・調査の方法

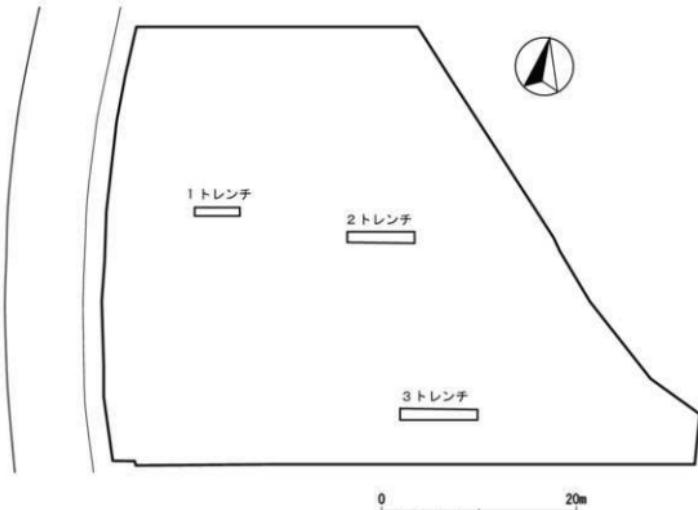
敷地内に 3 カ所のトレンチが設定された。

・調査の概要

基本層序は以下の通りとなる。1 層表土・搅乱
層、1 b 層江戸時代の整地土、2 層火碎流。
遺構は確認されていない。



8-1-6-2 図 調査地位置図 (1/2000)



8-1-6-3 図 トレンチ位置図 (1/500)

< 75 (熊本家庭裁判所) >

調査期間：平成 27 年（2015）5 月 25 ~ 28 日

調査面積：約 19 m²

調査主体：熊本市教育委員会

- ・調査に至る経緯

新庁舎の増築が予定され、平成 27 年 4 月 22 日に、埋蔵文化財存在状況確認の依頼が提出された。

- ・調査の方法

現駐車場部分の建物予定範囲に 3 カ所のトレーニングを設定し、土層の堆積状況と遺構の存在状況を確認した。

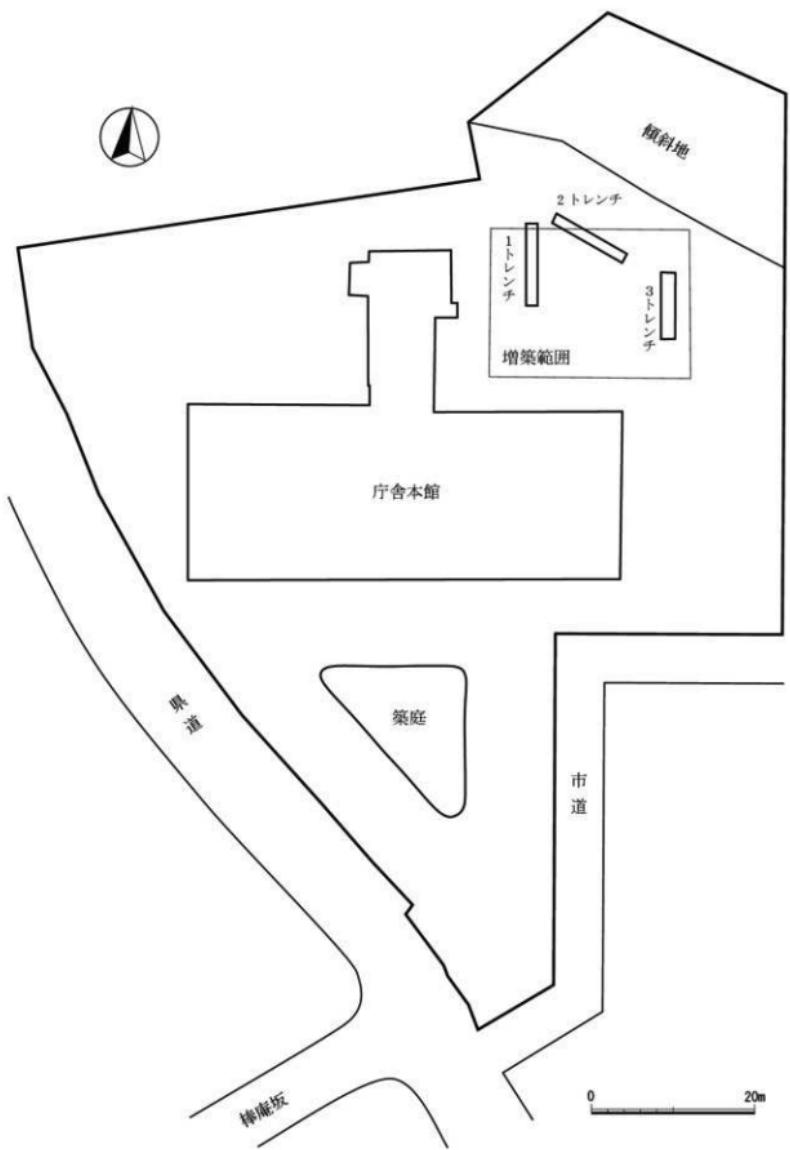
- ・調査の概要

「御土居絵図」（1818 ~ 1827）では大木弥助屋敷にあたる。

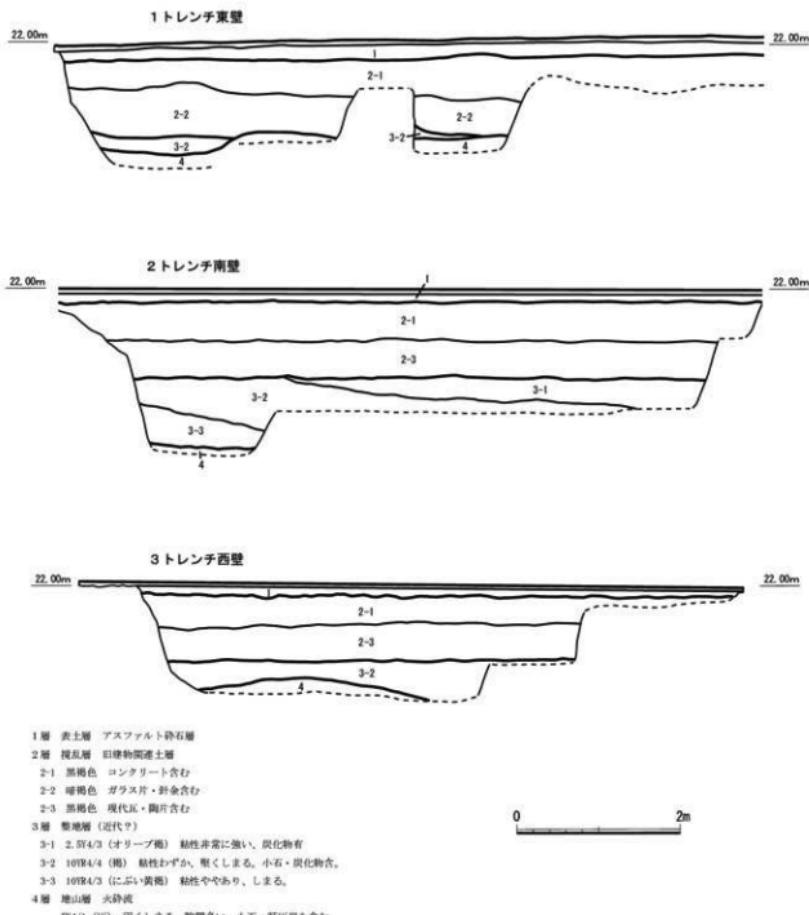
土層の堆積状況はすべてのトレーニングで同じである。1 層アスファルト・碎石層、2 層搅乱土層、3 層整地土層、4 層地山土層（火砕流）となる。遺構検出は 3 層上面・4 層上面で行なっているが確認されていない。3 層までの深さは 80 cm である。遺物は 3 トレーニング 3 層から 17 世紀の陶磁器が出土している。



8-1-6-4 図 調査地位置図 (1/2000)



8-1-6-5 図 トレンチ位置図 (1/600)



8-1-6-6 図 トレンチ土層図 (1/60)

< 76 (熊本県伝統工芸館) >

調査期間：昭和 55 年（1980）7 月～9 月

調査面積：不明

調査主体：熊本県教育委員会

・調査に至る経緯

昭和 55 年、県立の伝統工芸館の開設計画があがり、同年夏に事前の発掘調査が実施された。

・調査の方法

調査は磁北に沿って 4 m 方眼のグリッドを設定し、北から南に A～W、東から西へ 1～20 の記号を付与した。発掘作業はそのグリッドを I～IV の象限に 4 分割して、1 象限をトレンチ状に掘り下げて、土層や遺構の状況を確認しながら、遺構が検出された場合は隣接地に拡張して確認する方法を探った。各トレンチは、例えば S-16-II というように呼称される。

・調査の概要

調査地を南北に縦断して検出されている石列に交差する形で長さ延べ 8 m にわたる土層確認がされている。

1 層：黒褐色砂質土層。小石を含み堅く踏み固められている。広域に地表面を形成する表土。

2 層：褐色系の砂質土や粘質土の互層で 3 層の整地土を 60cm ほどの厚さで、全域で確認できる第 2 次造成層。S-14-1 の深さ 70cm の段差から以東に盛土されていて東に向って次第に低下する。遺構面は削平されており、後出の石列の地表が切り込まれている。盛土高は石列上面とほぼ同等の標高 20.9m。2a 層～2e 層の 5 層に細分される。

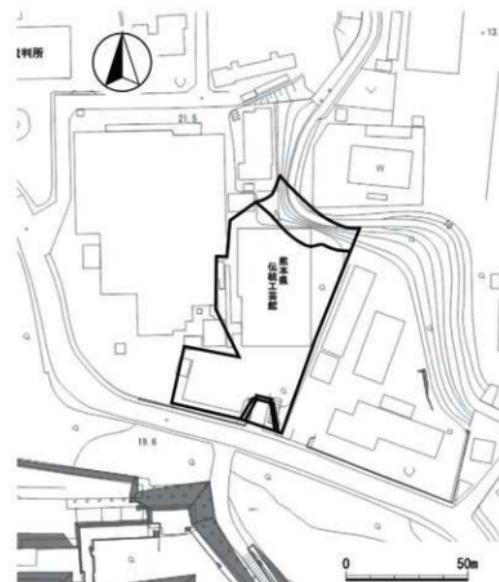
3 層：20cm から 30cm の層厚で段差から東方一面に広がる火災後の整地土〔第 1 次造成層〕。3a 層～3b 層の 2 層に細分される。享保元年（1716）の火災に特定される。

4 層：地山の灰褐色・赤褐色系の土を基本とした層厚 50cm ほど の第 1 次造成層。調査区西側では乳灰色・褐色の粘質土層として広く堆積し下層の褐色土には漆喰片を挟んでいる。4a 層～4d 層の 4 层に細分される。

5 層：火碎流の無遺物層。地山か整地による盛土層が不明。5a 層上面は遺構面となる。

5a 層～5d 層の 4 层に細分される。

以上の土層を整理すると、下層文化層となる 4d 層は、火碎流のほぼ直上に形成されていて瓦片を包含する。共伴する遺物の分析が出来ていないため形成年代を明確にできない。



8-1-6-7 図 調査地位置図 (1/2000)

が、層位関係や出土瓦からその所属年代は江戸初期の築城期まで遡る可能性がある。

第1次造成層の上位には3層の焼土層が厚く堆積する。焼土層には多くの遺物が出土するものの、遺物の詳細な分析は出来ていない。出土瓦には九曜紋使用の軒先瓦があり、当該屋敷が火元となった享保元年の大火後の片付けに伴う整地土と推定される。したがって、第1次造成層の形成年代の下限は享保元年を降らないことになる。

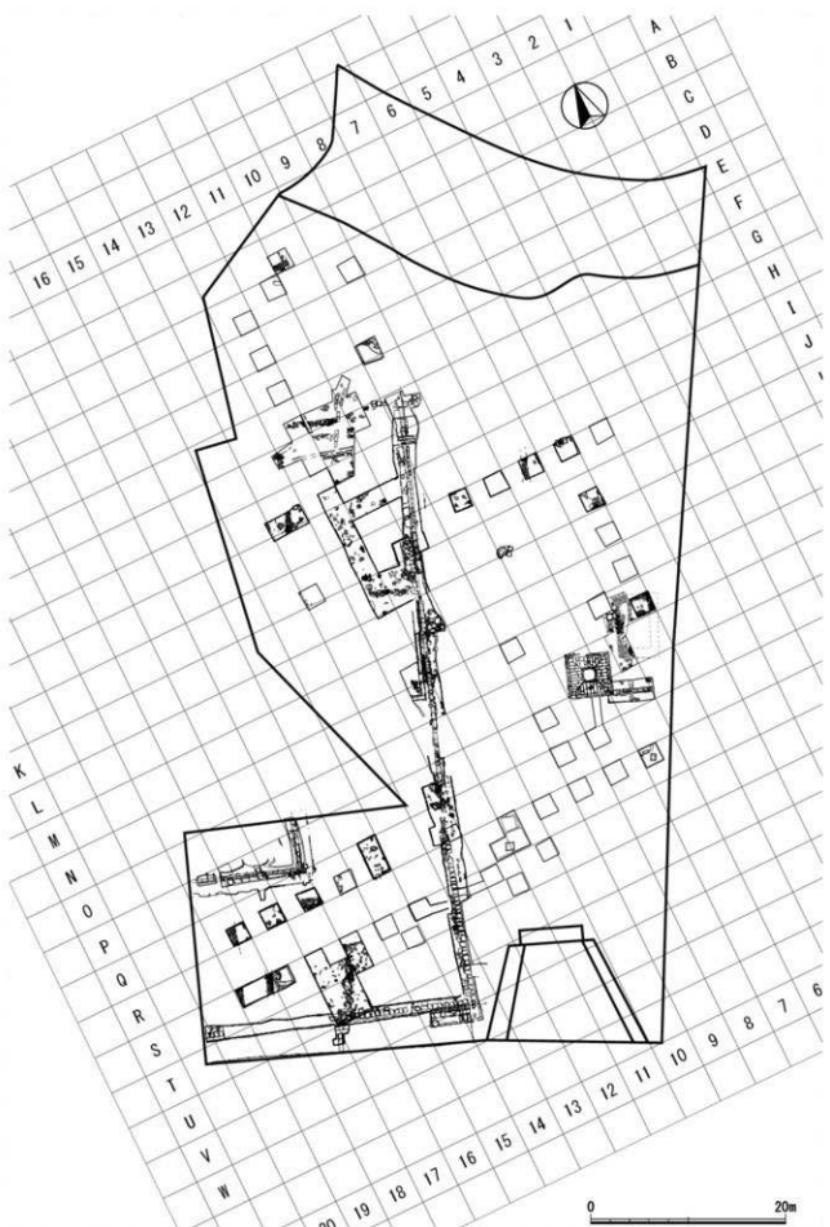
第2次造成層は、享保元年の大火後に屋敷内を盛土によって再度整地して形成されていると推定される。遺構形成最上面は近代以降の削平によってほとんど失われているとみられるが、造成層の上層から布掘りして設置されている列石の所属年代は享保元年以降から近代初期までを含むことになる。

遺構は排水溝5、列石1、雨落ち石、建物4、井戸1、溜橋のほか、北部大穴が確認されている。

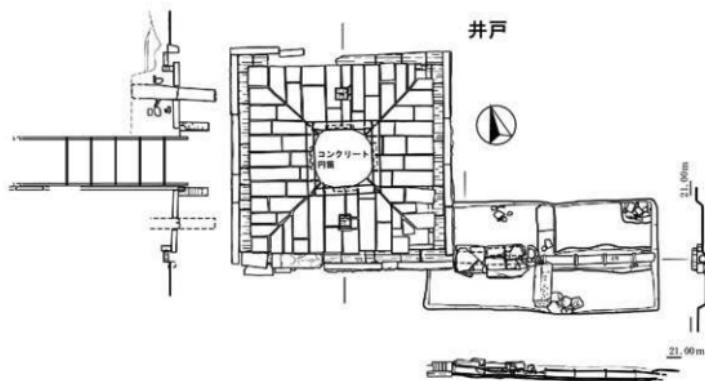
建物1と排水溝2、列石は西南戦争後の大型倉庫に該当する。列石南辺は南棟南側柱基礎、列石東辺は東棟東側柱の基礎、排水溝2は倉庫の雨落ち溝になる。雨落ち石も位置関係から倉庫の中庭に面した附属工作物とみることができる。

出土遺物は、瓦について若干の整理がされている。Q-18-Ⅲトレンチの最下層の4d相当層からは、珠紋付き三巴文軒丸瓦や無紋の剣高軒瓦、「慶長四年」銘滴水軒平瓦2点、同系の滴水軒平瓦1点、鬼瓦とみられる破片など、江戸時代初期とみられる遺物が出土している。なお、細線の飛雲紋をもつ李朝系の滴水軒平瓦や桐葉三葉紋を芯飾りとする唐草文（隅切）軒平瓦などの江戸時代初期の瓦も表採されている。第2次造成層下位にある焼土層からは九曜紋や「九つ石疊紋」の軒丸瓦などが出土している。焼土層は厚く堆積しており、火元となった享保元年火災の後の整地の可能性が指摘できるので、焼土層中の遺物はそれ以前の資料となる。

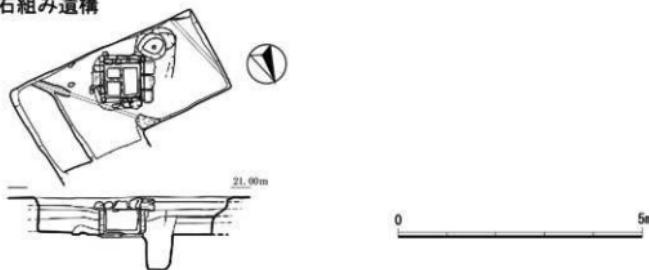
井戸跡の北側のM-6-Ⅲトレンチには瓦溜とみられる穴があり大量の瓦が出土している。通有の丸瓦・平瓦のほか、桟瓦の一種の目板瓦が出土し、九曜紋・蛇の目紋・竹輪に九枚桟紋の目板軒先瓦・九つ石疊紋軒丸瓦などが出土している。



8-1-6-8 図 遺構配置図 (1/500) (熊本県教育委員会提供)



石組み遺構



8-1-6-9 図 個別遺構図 (1/100) (熊本県教育委員会提供)

< 77 (熊本県立美術館分館) >

調査期間：平成3年（1991）10月17日～11月2日

調査面積：不明

調査主体：熊本県教育委員会

・調査に至る経緯

熊本県立美術館分館の改修工事に伴い、発掘調査が行なわれた。

・調査の方法

不明

・調査の概要

「御土居絵図」（1818～1827）では、柄本富太屋敷にあたる。遺構は集水枡状遺構1基、土坑10基以上、礎石の根石・柱穴のほか、昭和60年（1985）まで県立図書館として使われていた際泉水が見つかっている。



8-1-6-10図 調査地位置図 (1/1000)



8-1-6-11図 調査地全景
(熊本県教育委員会提供)



8-1-6-12図 集水枡状遺構
(熊本県教育委員会提供)

< 78 (高橋公園) >

調査期間：平成12年（2000）1月11日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

・調査に至る経緯

公園内施設工事（銅像建設）に伴い、平成11年12月24日文化財保護法第57条の3（当時）に基づく通知がなされ、確認調査が行なわれた。



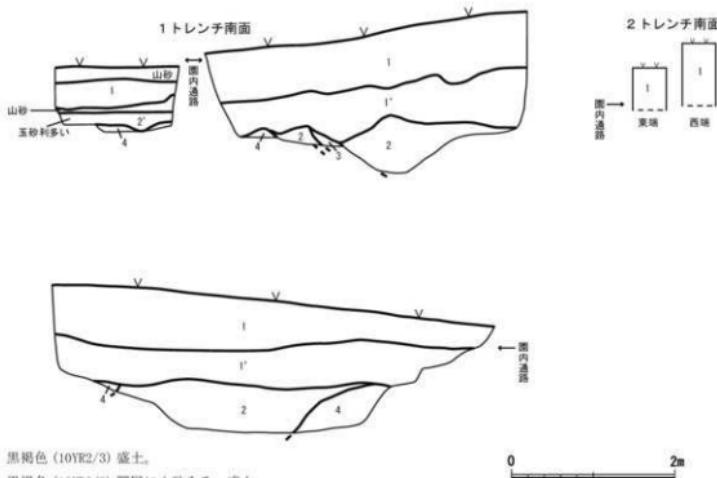
8-1-6-13 図 トレンチ位置図 (1/500)

・調査の方法

銅像が設置される築山周辺に3カ所のトレンチが設定された。

・調査の概要

層序は1層盛土、2・3層は河川の氾濫による堆積土。4層は地山と判断されている。遺物は2層から近世の瓦・陶磁器が出土している。トレンチから遺構は確認されていない。



8-1-6-14 図 トレンチ土層図 (1/60)

未公表調査出土資料観察表

報告	遺構・位置	種類	器種	器高	口径	底径	調整・文様など		備考	コンテナ
							(内)	(外)		
1	3号土坑	磁器染付	広東碗	6.1	11.2	6.3	施釉、見込み花文	施釉、獅子文+花文	ロクロ成形	3
2	3号土坑	青磁	皿	2.4	—	5.6	施釉、片彫り草花文	施釉	ロクロ成形、青磁釉	5
3	3号土坑	青磁	仏花器	10.1	6.0	—	施釉、シボリ底	施釉、耳貼付け	ロクロ成形、青磁釉	5
4	3号土坑	陶器	蓋	4.5	17.2	—	施釉	施釉	ロクロ成形、黒釉	3
5	3号土坑	陶器	蓋	1.3	—	—	施釉	施釉	ロクロ成形、釉掛け分け	4
6	3号土坑	陶器	小碗	4.0	6.6	3.9	施釉	施釉	ロクロ成形、褐色	4
7	3号土坑	陶器	瓶(施利)	17.3	3.8	—	シボリ底	白土刷毛目後施釉	外施釉	5
8	3号土坑	陶器	鉢	10.1	—	—	施釉(鉄釉)、	施釉	ロクロ成形、象嵌	3
9	3号土坑	陶器	鉢	26.5	44.3	13.9	施釉(鉄釉・白土)、目跡	施釉(鉄釉・白土)、松文	ロクロ成形、底部穿孔(植木鉢転用)	1
10	3号土坑	陶器	すり鉢	14.2	39.1	12.2	施釉、搔目、重ね焼き痕	施釉	ロクロ成形、(鉄釉	6
11	3号土坑	土人形	恵比寿	高3.6	幅2.4	厚1.8			型押し成形	7
12	3号土坑	石製品	石硯	翠1.0	長9.8	幅4.3				4
13	3号土坑	石製品	石硯	翠0.6	長3.9	幅2.6			小型	4
14	3号土坑	鉄製品	棒状鉄片	長10.8	幅1.2	厚0.6			鉄製	8
15	3号土坑	刀装具	様	長3.5	幅2.3	厚0.9			銅製	8
16	3号土坑	銅製品	飾金具か	長9.2	幅8.8	高1.7			銅製	8
17	3号土坑	銅製品	キセル(吸口)	長6.5	幅0.8	厚0.8			銅製	8
18	21号土坑	縄文土器	深鉢	2.8	—	—	ナデ	ナデ、ミガキ、口唇部削み		4
19	21号土坑	土師器	坏	2.8	11.5	6.6	回転ナデ	回転ナデ、底糸切り	回転台成形	7
20	21号土坑	土師器	坏	2.9	10.0	4.4	回転ナデ	回転ナデ、底糸切り	回転台成形、油煙	3
21	21号土坑	土師器	坏	3.1	11.0	5.3	回転ナデ	回転ナデ、底糸切り	回転台成形、煤付着か	7
22	21号土坑	土師器	小坏	2.9	6.7	4.1	回転ナデ	回転ナデ、底糸切り	回転台成形	7
23	21号土坑	陶器	皿が向付	2.3	—	5.6	施釉、見込み鉄筋(草花)	施釉	ロクロ成形、灰釉	3
24	21号土坑	青花	椀	1.7	—	5.1	施釉、見込み魚文	施釉	ロクロ成形	3
25	21・28号土坑	土師器	坏	3.5	11.7	5.5	回転ナデ	回転ナデ、底糸切り	回転台成形	7
26	28号土坑	土師器	坏	2.7	10.2	4.9	回転ナデ	回転ナデ、底糸切り	回転台成形、油煙	3
27	28号土坑	土師器	小皿	1.5	5.7	4.6	回転ナデ	回転ナデ、底糸切り	回転台成形、油煙	3

報告	遺構・位置	種類	器種	器高	口径	底径	調整・文様など		備考	コンテナ
							(内)	(外)		
28	28号土坑	陶器	碗	3.1	—	3.9	施釉	施釉	ロクロ成形、灰釉	4
29	28号土坑	陶器	向付	1.4	—	—	施釉	施釉	型打ち成形、青磁部	7
30	28号土坑	青花	皿	1.5	—	5.5	施釉、文様印刻	施釉	ロクロ成形、基筒底	4
31	28号土坑	青花	大皿	4.1	—	—	施釉、文様芙蓉手?	施釉	ロクロ成形	4
32	24・25・27号土坑	陶器	鉢	17.9	34.0	10.5	施釉(鉄釉)、 鐵釉後白化粧 土、松文	施釉	ロクロ成形、 重ね底底	2
33	E-3Ⅱ層	土師器	坪	2.2	10.9	6.3	回転ナデ	回転ナデ、 底糸切り	回転台成形、梵字は か墨書(ア祐藏界大 日如来)	4
34	不明	土師器	坪	2.2	10.8	6.0	回転ナデ	回転ナデ、 底糸切り	回転台成形、梵字は か墨書(ア祐藏界大 日如来)	4
35	一括	土師器	小皿	1.9	9.0	5.5	回転ナデ	回転ナデ、 底糸切り	回転台成形、油煙	3
36	一括	土師器	小皿	1.6	8.2	5.1	回転ナデ	回転ナデ、 底糸切り	回転台成形、油煙	3
37	不明	土師器	小皿	2.0	8.5	5.6	回転ナデ	回転ナデ、 底糸切り	回転台成形、油煙	7
38	E-3Ⅱ層	土師器	小皿	1.2	6.0	3.9	回転ナデ	回転ナデ、 底糸切り	回転台成形、油煙	7
39	E-3Ⅲ層	陶器	碗	6.8	12.0	4.6	施釉	施釉	ロクロ成形、鋼緑釉	3
40	G-2Ⅱ層	陶器	皿	3.8	13.6	4.6	施釉、蛇の目軸 剥ぎ、砂目跡	施釉	ロクロ成形、鋼緑釉	4
41	B-4Ⅱ層	陶器	皿か小碗	3.3	7.0	—	施釉、押圧輪花	施釉、刻み輪花	ロクロ成形、透明釉	5
42	D-4Ⅱ層	陶器	皿	2.8	—	7.2	施釉、寿字文か	施釉	ロクロ成形、透明釉	4
43	E-3Ⅲ層	陶器	盤?	3.8	—	—	施釉(灰釉+鉄 釉)、象嵌	施釉、目跡?	灰釉	4
44	E-3Ⅲ層	陶器	灯火具	4.3	6.0	5.8	施釉	施釉、底糸切り	ロクロ成形、鉄釉	7
45	D-2、 E-4Ⅰ層	陶器	片口	9.1	14.4	5.8	施釉	施釉(鉄釉)、 飛び跡	ロクロ成形	3
46	一括	陶器	鉢	20.8	—	13.5	回転ナデ後施 釉、目跡	二彩欄目、 貼付け文	ロクロ成形	2
47	E-3	磁器染付	広東碗蓋	2.7	10.6	—	施釉、天井文様 不明	施釉、唐草文	ロクロ成形	5
48	D-2Ⅰ層	磁器染付	端反碗蓋	3.0	9.1	—	施釉、綠雷文、 天井松竹梅文	施釉、樹木+花	ロクロ成形、 コバルト	5
49	D-2Ⅰ・Ⅱ層	磁器染付	端反碗蓋	2.7	9.4	—	施釉、綠雷文、 天井松竹梅文	施釉、 蜘蛛草+山水	ロクロ成形、 コバルト	5
50	K-2Ⅰ層	磁器染付	広東碗	6.6	11.9	5.8	施釉、見込み宝 船?	施釉、山水文	ロクロ成形	5
51	B-4Ⅰ・Ⅱ層	磁器染付	広東碗	7.6	13.4	7.0	施釉、見込み岩 波文	施釉、山水文	ロクロ成形	3
52	G-2Ⅰ・Ⅱ層	磁器染付	碗	5.9	10.8	4.6	施釉	施釉、山水文	ロクロ成形	3
53	不明	磁器染付	端反碗	6.0	9.7	3.5	施釉、綠雷文、 見込み松竹梅文	施釉、楓文、 高台丁字文	ロクロ成形	4
54	D-2Ⅰ層	磁器染付	端反碗	6.2	9.9	3.7	施釉、綠雷文、 見込み松竹梅文	施釉、楓文、 高台丁字文	ロクロ成形	3

報告	遺構・位置	種類	器種	器高	口径	底径	調整・文様など		備考	コンテナ
							(内)	(外)		
55	不明	磁器	碗	4.3	10.9	4.1	施釉	施釉	ロクロ成形、環瑠軸	5
56	不明	磁器染付	蓋付鉢	7.6	10.1	6.0	施釉	施釉、唐草文	ロクロ成形	7
57	不明	磁器染付	大皿	4.6	30.8	18.6	施釉、蛸唐草文 +梅文?	施釉、唐草文	ロクロ成形	5
58	D-2 I層	磁器染付	皿	2.9	10.6	6.1	施釉、綠雷文、 見込み丸文内に 草花	施釉、唐草文、 高台丁字文	ロクロ成形	5
59	F-3 I層	白磁	紅皿	1.8	4.8	1.8	施釉	施釉、貝殻状	型押し成形	4
60	D-4 II層	同安窯系青磁	椀	2.9	—	—	施釉	施釉、柳樹文	ロクロ成形、 青磁軸、椀I類	4
61	I-3	青磁	椀	4.1	—	—	施釉、印花文	施釉	ロクロ成形、透明軸	5
62	H-21 I層	青花	皿	4.0	—	—	施釉	施釉、草花文	ロクロ成形	4
63	不明	青花	碗	4.0	—	—	施釉	施釉、草花文	ロクロ成形	7
64	A-3 I層	青花	皿	1.0	—	5.7	施釉、花文	施釉	ロクロ成形	4
65	不明	青花	皿	2.0	—	7.2	施釉、草花文	施釉、文様不明	ロクロ成形	7
66	B-3 I層	白磁	蓋	4.5	10.7	—	施釉	施釉	ロクロ成形	4
67	G-2 I層	土人形	布袋	高4.0	幅3.0	厚1.8		胡粉	型押し成形	7
68	D-4 I層	土人形	天神	高3.0	幅2.6	厚1.3			型押し成形	7
69	F-2 I層	土人形	犬	高3.3	幅2.2	長5.8			手づくね	7
70	不明	銅製品	髪飾りか	長4.3	幅1.9	厚0.3			銅製	8
71	K-2 I層	瓦	丸瓦	長20.6	幅13.4	厚1.6	布目痕	ナデ		11
72	E-3 II層	瓦	目板模瓦	長28.9	幅18.4	厚1.8	ナデ	ナデ		11
73	不明	瓦	鱗瓦か	長9.9	幅14.6	厚3.6	ヨコナデ	ミガキ	カキヤブリ	11
74	E-3 II層	瓦	目板模瓦	長26.4	幅24.2	厚2.1	ナデ	ナデ	カキヤブリ	10
75	C-2 I層	瓦	目板瓦	長31.6	幅28.6	厚3.6	ナデ	ナデ		10
76	D-4 I層	瓦	道具瓦	長18.9	幅11.1	厚2.1	ナデ	ナデ		10
77	E-4 I層	瓦	道具瓦	長7.1	幅15.7	高7.4	ナデ	丁寧なナデ		11

J3 桜馬場・堀平太左衛門預櫓

報告	遺構・位置	種類	器種	器高	口径	底径	調整・文様など		備考	コンテナ
							(内)	(外)		
1	7T IX層	磁器染付	皿	—	13.1	—	施釉、山水文、 見込五瓣花	施釉、高台溝福文	ロクロ成形、ハリ支え痕、ハリ4個残存	1
2	—	磁器染付	小杯	6.8	2.8	—	施釉貫入	施釉貫入、草文	ロクロ成形	1
3	6T VII層	磁器染付か	脚付皿	—	9.1	—	施釉、 見込み菊文	施釉、脚貼付け	ロクロ成形、 焼き甘い、釉厚め	1
4	—	陶器	碗	—	—	—	施釉	施釉、草花文	ロクロ成形	1
5	7T	磁器染付	碗	—	4.1	—	施釉、 見込み松竹梅文	施釉、花文(椿) +窓	ロクロ成形、 底部回転ケズリ	1
6	8T ガレキ層	瓦	軒丸瓦	—	—	—	ナデ	瓦当日足文	長石・石英含む	1
7	VII層	瓦	軒丸瓦	—	直径 16.2	—	ナデ	瓦当三巴文	丸瓦部欠落	1
8	7T IX層上面	瓦	丸瓦	長21.5	幅12.6	—	布目・工具痕	ナデ	玉縁にも工具痕	1
9	8T VII層	レンガ		長23.3	幅11.6	—	(表) SHINAGAWA		灰白色、漆喰付着	1

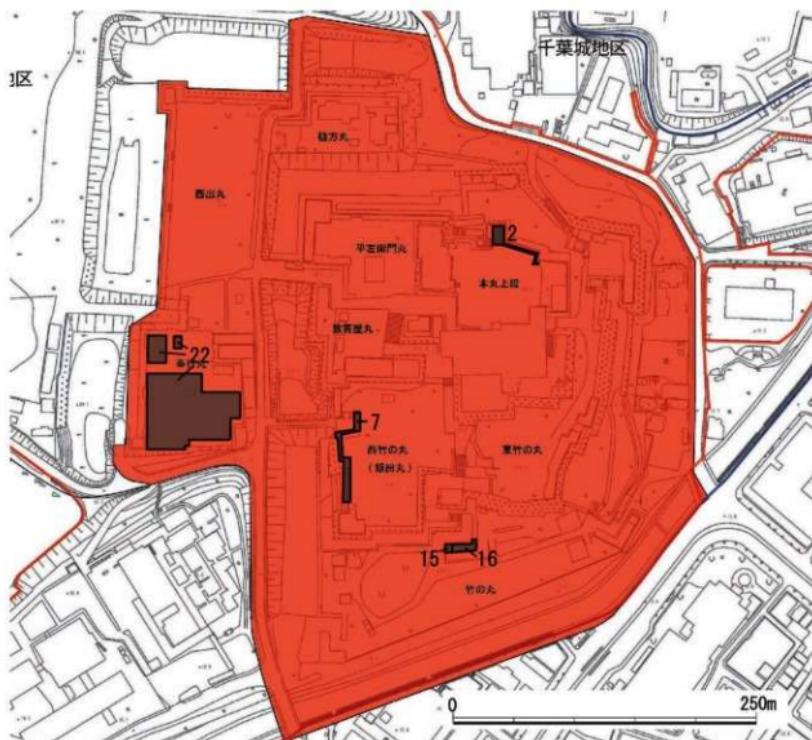
第2節 既報告未公表資料の概要

既報告未公表資料一覧

地区区分	番号	項目	調査年	報告書
本丸地区	2	御裏五階櫓跡	2008～2009	熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書3-石垣修理工事と工事に伴う調査- 第2分冊』2016
	7	百間櫓跡	1998～2001	熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書1-瓶田丸の調査-』2014
	15	元札櫓跡	2003	熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書3-石垣修理工事と工事に伴う調査- 第1分冊』2016
	16	茶櫓跡		
二の丸地区	22	奉行所跡	1993～1996	熊本市教育委員会『特別史跡 熊本城跡 石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999
	30	侍屋敷 (二の丸芝生広場)	1975	熊本城調査委員会『熊本城三の丸・二の丸跡調査報告書』1980
	33	二の丸御門跡	1975	熊本城調査委員会『特別史跡熊本城跡 二の丸調査報告書』1976
三の丸地区	34	藤崎台	1959～1960	熊本県教育委員会『藤崎台』1961
	35	二の丸御庭形跡 (熊本博物館)	1973 1974	熊本博物館建設準備室『熊本市古町二の丸跡調査報告書-熊本博物館建設予定地-』
	37	二の丸御庭形跡	1979	熊本市教育委員会『熊本城三の丸森木櫓跡塗畠遺跡調査報告書』1979

第1項 本丸地区

本丸地区では、5地点の未公表資料について報告する。



2. 御裏五階櫓跡 7. 百間櫓跡 15. 元札櫓跡 16. 茶櫓跡 22. 奉行所跡

8-2-1-1 図 調査地点位置図

<2 御裏五階櫓跡>

報告書：熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書3—石垣修理工事と工事に伴う調査

—第2分冊』2016

調査期間：平成20年（2008）10月23日～平成21年（2009）2月13日

調査面積：約140 m²

調査主体：熊本市教育委員会

その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、総括報告書調査研究編第1分冊137頁を参照。

・遺物の経緯

平成20年度（2000）に調査を実施し、瓦・金属製品等が出土した。この成果は平成28年に報告書として刊行したが、この中で出土した陶磁器類及び基石の報告が漏れていた。本稿をもって、これを補うものとする。

・未公表遺物の報告

詳細は観察表による。コンテナ10箱の陶磁器から8点を実測した。陶磁器は幕末から明治のものが主体である。1・2は在地産の土師器坏である。3は薩摩産の土瓶の落し蓋である。4は19世紀代の肥前産器染付小丸碗である。5は18世紀後半から19世紀前半頃の肥前産器染付端反碗蓋である。6は19世紀代の磁器製パレットである。7は19世紀前半頃の肥前系磁器染付の菓盒蓋で、上面に「肥後」「渡辺」「鳥屋園」「半廻入」と記す。8は昭和41年（1966）正月に熊本城で配布・使用されたと考えられる磁器製かわらけである。9は貝製の白基石である。



8-2-1-2 図 御裏五階櫓出土遺物実測図

<7 百間櫓跡>

報告書：熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書1－飯田丸の調査－』2014

調査期間：平成10年（1998）10月～平成13年3月

調査面積：約1500m²

調査主体：熊本市教育委員会

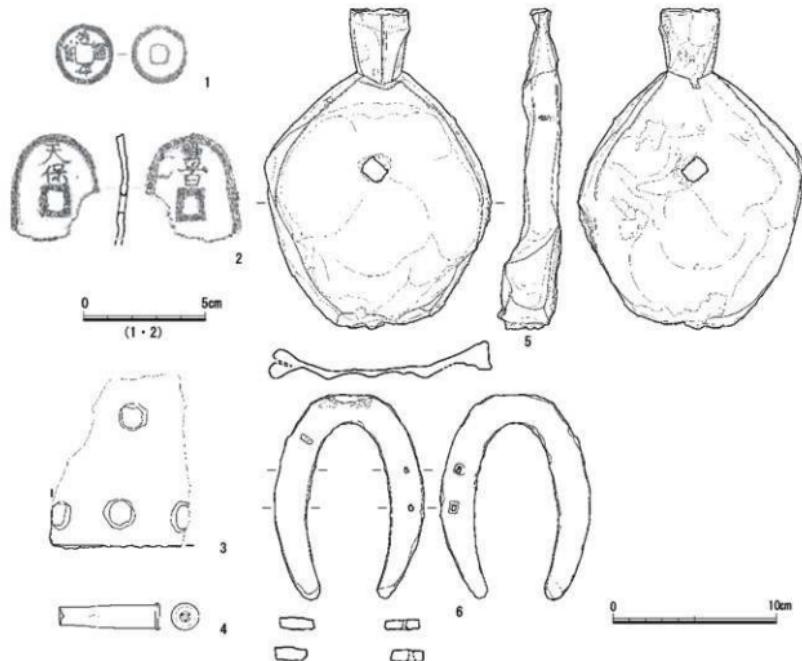
その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、総括報告書調査研究編第1分冊160頁を参照。

・遺物の経緯

熊本市教育委員会が平成10年から13年にかけて調査を実施し、瓦・陶磁器等が出土した。この成果は2014年に報告書として刊行したが、この中で出土した金属製品の報告が漏れていた。本稿をもって、これを補うものとする。

・未公表遺物の報告

詳細は観察表による。コンテナ8箱分の出土金属遺物から6点の金属製品が実測できた。内訳は江戸時代以前の貨幣が2点（1・2）、明治時代の金属製品が4点（3～6）である。1は招平通宝である。2は天保通宝で、下位が欠失している。3は四斤山砲の砲弾片で、側面に4ヶ所リベットが残る。4は30式銃あるいは38式銃の薬莢である。5は水筒（提瓶）で、ほぼ中央に穴が開き、潰れている。6は馬蹄で、形状から後蹄鉄と考えられる。



8-2-1-3 図 飯田丸百間櫓出土遺物実測図

<15 元札櫓門跡・16 茶櫓跡>

報告書：熊本市熊本城調査研究センター『熊本城跡発掘調査報告書3—石垣修理工事と工事に伴う調査

—第1分冊』2016

調査期間：平成15年（2003）11月28日～同年12月16日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、総括報告書調査研究編第1分冊214・217頁を参照。

・遺物の経緯

平成15年（2003）に調査を実施し、瓦等が出土した。この成果は平成28年に報告書として刊行したが、この中で出土した金属製品の報告が漏れていた。本稿をもって、これを補うものとする。

・未公表遺物の報告

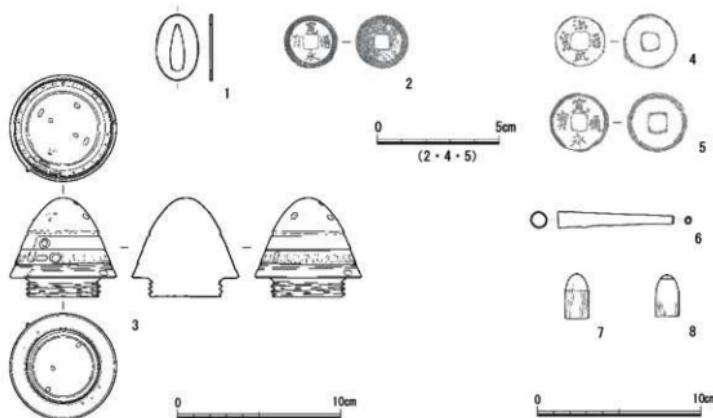
詳細は観察表による。コンテナ2箱分の出土金属遺物から5点の金属製品が実測できた。1～3は元札櫓門跡出土、4～8は茶櫓跡出土の遺物である。

1) 元札櫓門跡

1は刀の切羽である。2は寛永通宝で、新寛永と考えられる。3は三年式複動信管で、大阪砲兵工廠の刻印が入る。

2) 茶櫓跡

4は洪武通宝であるが、やや薄い作りで鋳上がりも悪く、文字も細かい場所がつぶれている。5は寛永通宝で、新寛永と考えられる。6はキセルの吸口である。7・8はエンフィールド銃の銃弾である。



8-2-1-4 図 元札櫓門跡・茶櫓跡出土遺物実測図

< 22 奉行所跡 >

報告書：熊本市教育委員会『特別史跡熊本城跡石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999

調査期間：平成7年（1995）9月12日～同年9月14日

平成7年10月25日～平成8年3月末日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

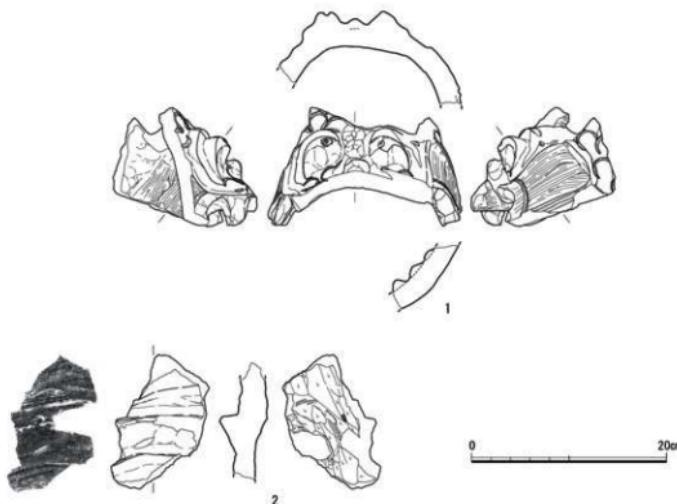
その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、総括報告書調査研究編第1分冊242頁を参照。

・遺物の経緯

平成7年（1995）から翌8年にかけて調査を実施し、瓦・陶磁器・金属製品等が出土した。この成果は1999年に報告書として刊行したが、この中で出土した道具瓦の実測図が漏れていた。本稿をもって、これを補うものとする。

・未公表遺物の報告

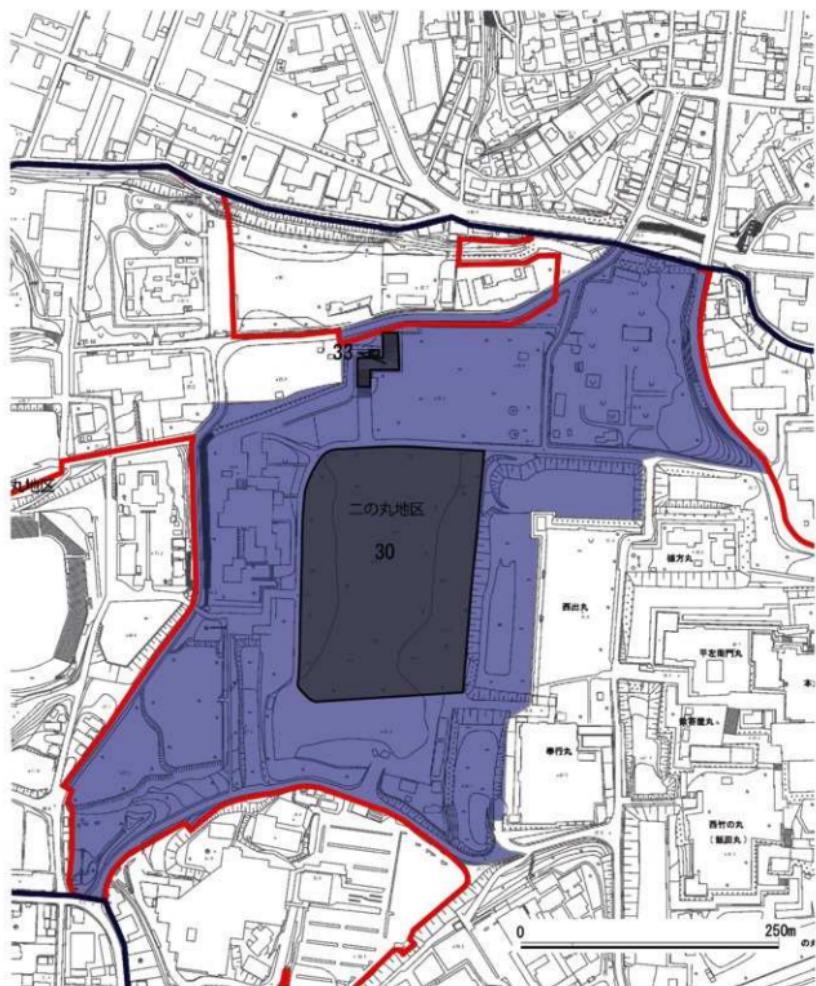
詳細は観察表による。1・2ともに瓦である。1は目から胸鰭の部分の破片である。ヘラ描きによるウロコの表現が見られる。2は鰭の部分の破片で、内側にヘラによる成形痕が多く残る。



8-2-1-5 図 奉行所跡出土遺物実測図

第2項 二の丸地区

二の丸地区では、2地点の未公表資料について報告する。



30. 侍屋敷（二の丸芝生広場） 33. 二の丸御門跡

8-2-2-1 図 二の丸地区調査地点位置図

< 30 侍屋敷（二の丸芝生広場）>

報告書：熊本城調査委員会『熊本城二の丸・三の丸遺跡調査報告』1979

調査期間：昭和 50 年（1975）1 月 17 日～3 月 5 日

調査面積：不明

調査主体：熊本城調査委員会

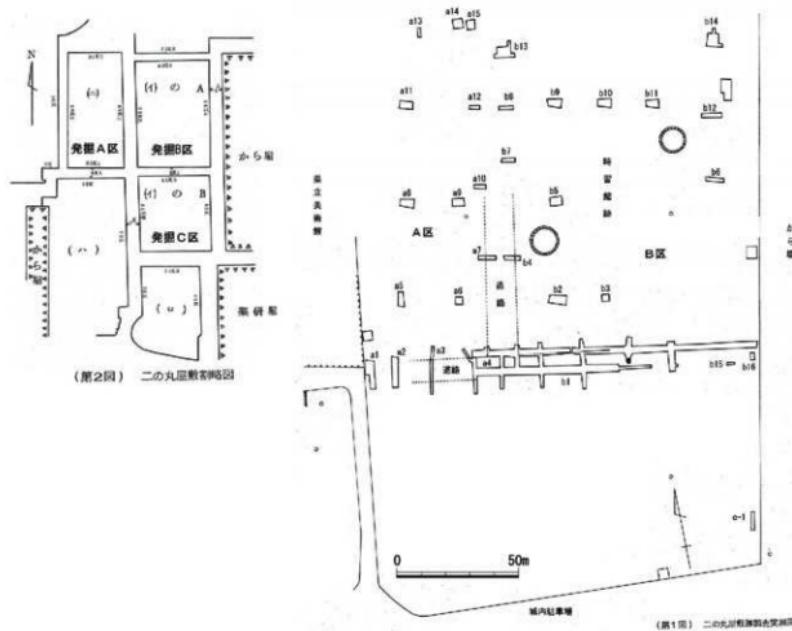
その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、第 2 分冊 9 頁を参照。

・遺物の経緯

今回掲載する出土遺物は、昭和 50 年の発掘調査で出土したもので、熊本博物館に収蔵されている。

・未公表遺物の報告

コンテナ 16 箱のうち、200 点を図示した。遺物の詳細は観察表による。発掘調査では二の丸広場を A・B・C の三つに区分し、A 区に 15 カ所、B 区に 16 カ所、C 区に 1 カ所のトレンチが設定された。出土遺物に添えられたラベルの注記内容は「二の丸時習館ゴミ穴」・「二の丸時習館炊事場ゴミ穴」・「二の丸時習館横」・「二の丸（武家屋敷址）」の 4 種があり、報告書掲載の写真や調査のメモ写真をもとに、出土遺物の照合を行なった。照合の過程で別ラベルの遺物も二の丸芝生広場の調査で出土したことが判明し、今回合わせて掲載している。以下、注記内容ごとに資料を紹介する。なお報告によれば遺物のほとんどが a 6 トレンチから出土している。



8-2-2-2 図 二の丸屋敷跡調査実測図

1) 二の丸時習館ゴミ穴・二の丸時習館炊事馬ゴミ穴 (53点掲載 1~53)

ともに「時習館ゴミ穴」の情報が記されたものである。a 6 トレンチから A 区 (二) の炊事場に付随する塵芥捨て場が検出されているため、注記のゴミ穴とはこの塵芥捨て場を示していると判断できる。時習館ゴミ穴と時習館炊事場ゴミ穴は同一の内容と理解した。しかし a 6 トレンチは詳細図が掲載されていないため、遺構の規模などは不明である。

1~8 は土師器で壺と小皿がある。1 は底部が他に比べて厚く、色調・形態も異なる。2 は底部にヘラケズリを施すなど、丁寧なつくりである。4~8 は内底端部がつまみ上げ稜をもつ特徴を有する。底部の調整方法は糸切りである。9~15 は陶器である。11 は 18 世紀代の溝削皿、12 は 17 世紀代と考えられる捕鉢で他と年代が異なる。9・10 は 19 世紀の小丸碗で二の丸芝生広場から多量に出土している。16~50 は磁器染付で、ゴミ穴出土遺物の主体を占める。磁器染付は碗・皿の比率が高い。碗では端反碗がもっとも多く 9 点が出土している。碗でもっとも古いのは 17 の広東碗で、1780~1810 年代に位置づけられる。特筆事項として、27~29 の外器面に描かれた米田家の家紋である釘抜紋を挙げる。同様に 36~38 の皿見込みにも釘抜紋が描かれている。皿の裏には「二丸」と記され、二の丸を指していると判断できる。また皿の内面には足ハマの痕跡が認められ、複数個体が焼成されている。ほか、48 の蓮華や 49 の合子蓋、50 の瓶なども出土している。50 は外器面にとびかんなが施されている。51~53 は陶器の捕鉢である。平底の 51 や高台をもつ 52・53 のように、異なる時期の個体が出土している。17 世紀から 18 世紀まで 100 年近い年代差がある。

2) 二の丸時習館横 (27 点掲載 54~80)

報告に「時習館横」と示した記述は認められないが、時習館は B 区に位置していたため A 区のことを示している可能性が高い。A 区で遺構が検出されたのは a 1・a 3・a 4・a 6・a 7 トレンチであり、a 8~a 15 トレンチは搅乱のため遺構が検出できなかつたとの記述がある。したがって a 8~a 15 トレンチから遺物が出土した可能性は低い。B 区で遺構が確認されたのは b 1・b 4 トレンチである。他のトレンチはほとんど搅乱を受けていると記述されているため、遺物が出土した候補は b 1・b 4 トレンチとなる。

54~57 は陶器である。54 は 16 世紀末に位置づけられる肥前産の皿で見込みに胎土目を 4 カ所認める。55 は高台に満巻きを認めかつ「田川内」の刻印があるため八代焼である。一方 56 は小代焼と考えられる。57 は薄グリーンの灰釉を掛けることから瀬戸産と考えられる。

58~75 は磁器染付で、すべて肥前産と考えられる。端反碗が主体をなし、19 世紀前半~中頃に位置づけられる。64・65 は碗用の蓋である。64 は 59 の端反碗、65 は広東碗とセットになる。66~75 は皿である。66~68 は蛇の目凹形高台を有し、19 世紀前半~19 世紀中頃を主体とする。68 は先述の内面釘抜紋、外面「二丸」を有する皿である。釘抜紋の皿は 68~74 と 7 点を図示することができた。68 のみ法量が大きく、かつ形態も異なる。釘抜紋の皿には足ハマの痕跡が多く認められるが、71・73 には足ハマの痕跡がないことから一番上位に積まれた個体である。75 は青磁染付の皿である。見込みを釉剥ぎし、高台には重ね焼の砂が残る。肥前産で 19 世紀の製品である。

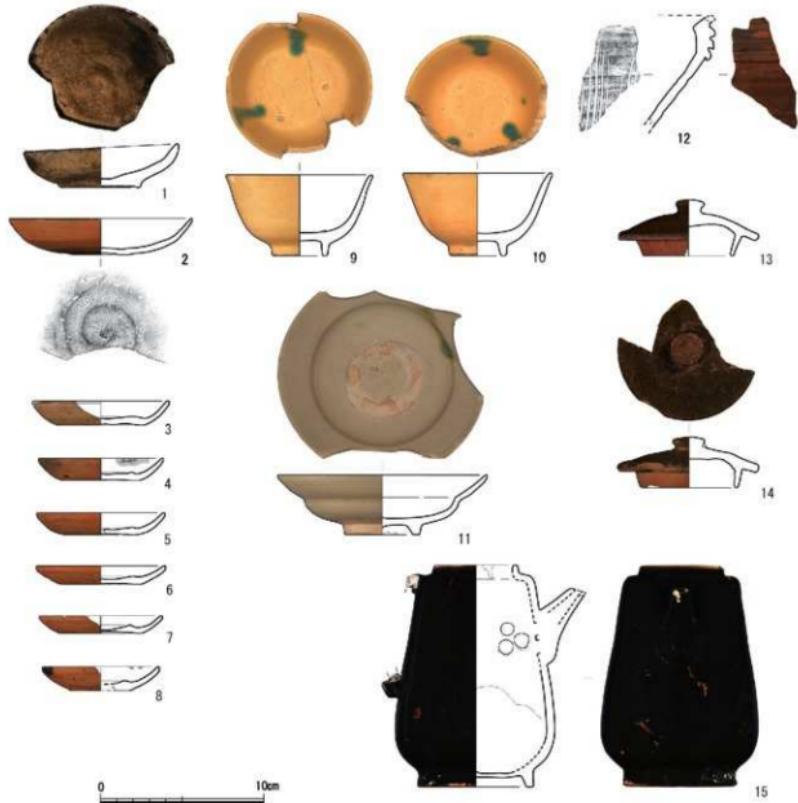
76 は磁器色絵の香炉、77 は青磁碗、78 は磁器染付小壺でこれらも肥前産である。

3) 二の丸 (武家屋敷址) (114 点掲載 81~194)

注記内容は二の丸もしくは二の丸武家屋敷址であった。報告書掲載写真と調査時の写真から特定できる遺物を多数認めることができたため、すべて二の丸芝生広場の調査で出土したものと判断した。今回掲示の二の丸で掲載する資料としては、もっとも数が多い。

81 は弥生土器の壺である。弥生時代中期に位置づけられ、中型の甕棺として使用された可能性が高い。

82~85 は土師器壺もしくは小皿である。82 は先述した 1 に近い形態をなす。85 は内底端部をつまみ上げ稜をなしている。86~89 は焼塩壺の蓋、90~93 は焼塩壺の身である。90 は底部に板状圧痕を認め



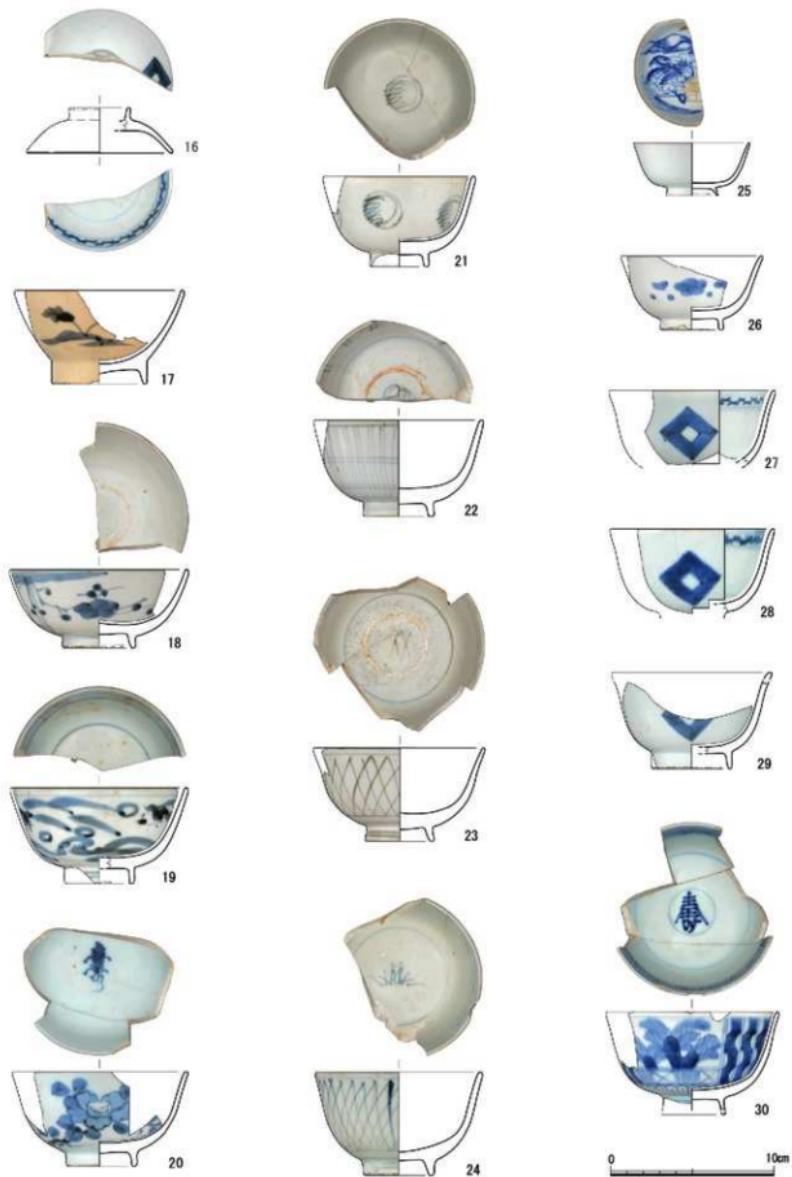
8-2-2-3 図 ニの丸広場出土遺物実測図 1 (時習館ゴミ穴)

る。91は粘土帯が剥がれた資料である。この状況から粘土帯を貼り合わせ成形した様子が伺える。なお、身の壁面に刻印等は認められなかった。

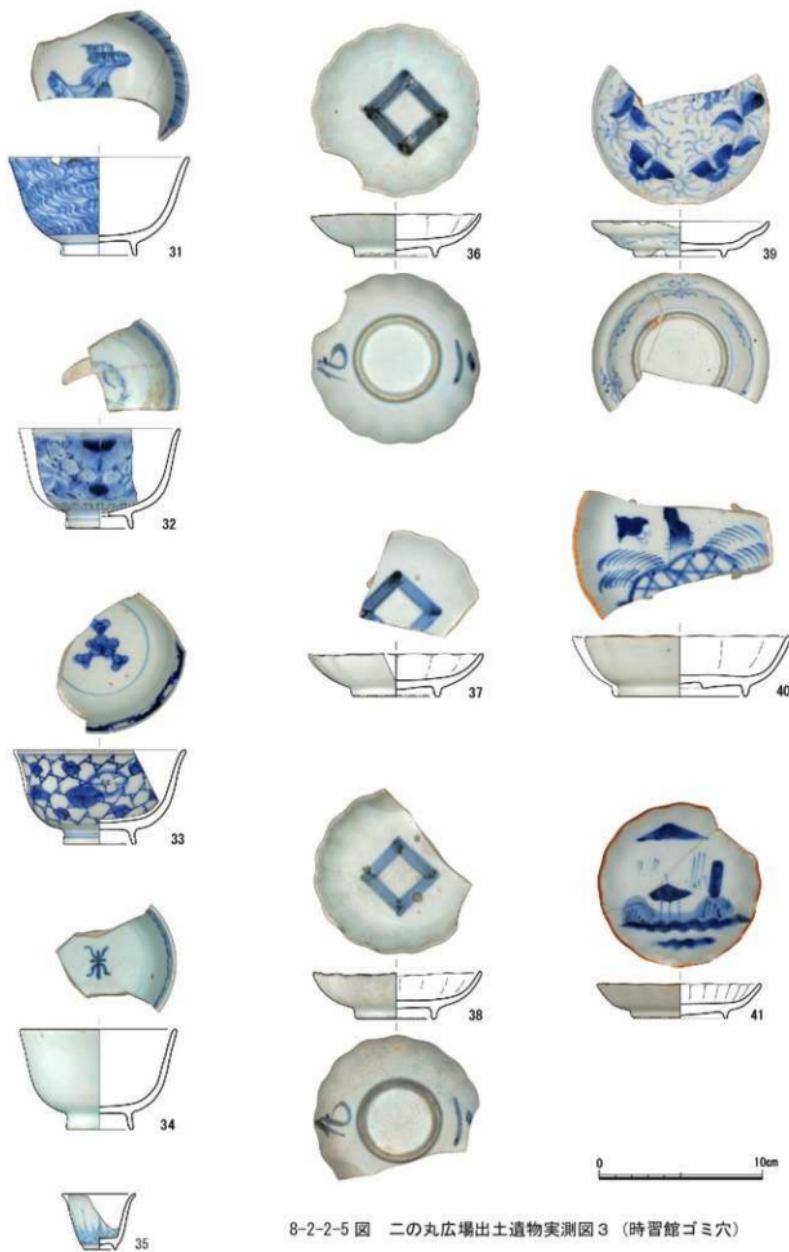
94～142は陶器である。うち、94～125は九州産の小丸碗。出土量が多く、32点を図示している。内面上位の3ヵ所に透明釉に銅緑釉を上掛けした個体が多いものの、銅緑釉の上掛けが認められない個体も少数存在する。法量は近似しているものの、一定ではない。128～133も小丸碗である。産地は九州もしくは熊本市松尾と考えられる。内面や外面に象嵌を施し、足ハマの痕跡が認められることから重ね焼されている。時期は19世紀に位置づけられる。

134は鉄釉と銅緑釉を掛け分けた皿で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎを行なう。時期は1690～1780年代に位置づけられる。135は火入れである。136は壺蓋で、どちらか区別がつかない。

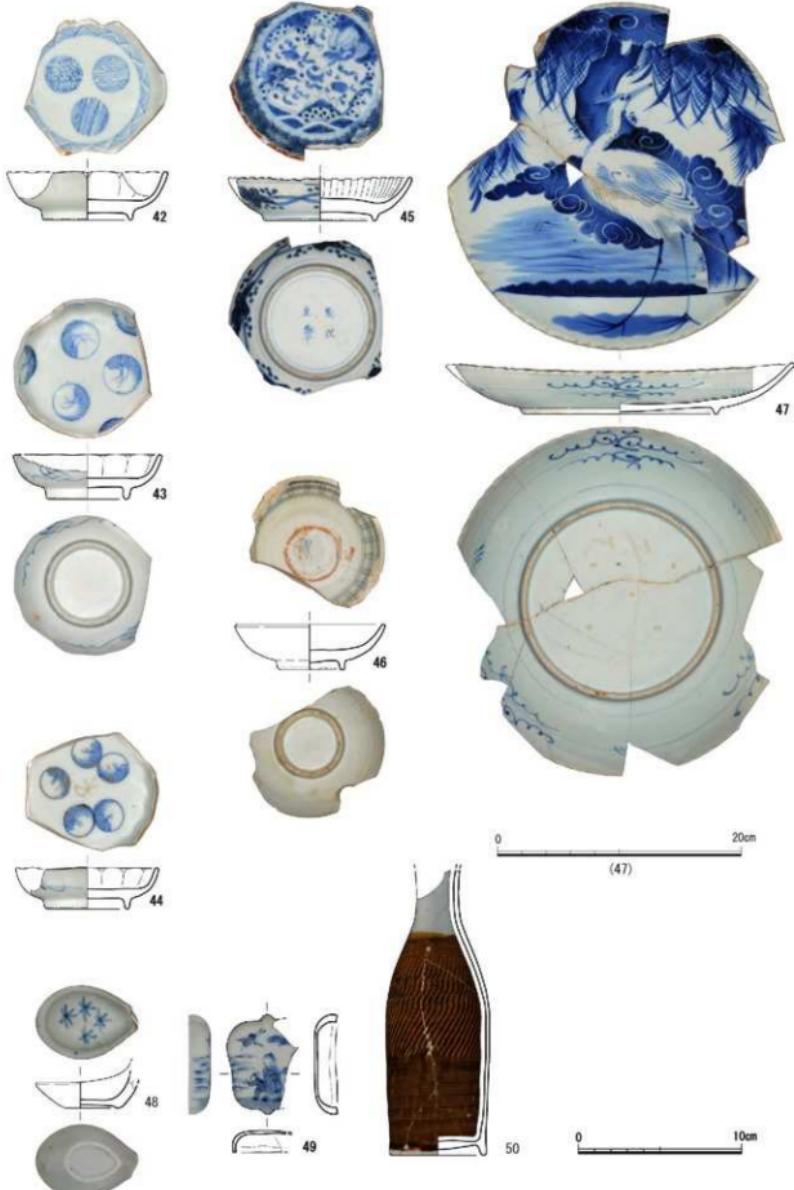
137～142は土瓶であり、うち137～139の3点は蓋。産地はさまざまであり、138・139は薩摩産、140は象嵌を施すことから八代産もしくは松尾産と考えた。141・141・142は関西系と考えられる。



8-2-2-4 図 ニの丸広場出土遺物実測図2 (時習館ゴミ穴)



8-2-2-5 図 二の丸広場出土遺物実測図3 (時習館ゴミ穴)



8-2-2-6 図 ニの丸広場出土遺物実測図4 (時習館ゴミ穴)

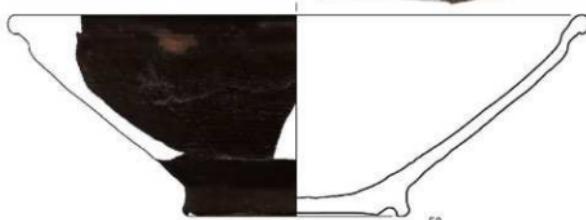


8-2-2-7 図 ニの丸広場出土遺物実測図5（時習館ゴミ穴）

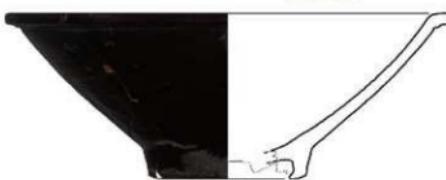
143～189は磁器染付もしくは色絵であり、うち143～161は碗である。143は青磁染付で、高台に銘をもち、「蔚山町茨木」と朱書されている。また焼継ぎの痕跡も認められる。145～157は端反碗である。145～147の見込みは釉剥ぎ後、アルミナが塗布されている。156は外器面に釘抜紋が描かれている。形態は27～29と同一で法量も近似している。また内器面に縁文様をもつ。165～187は皿である。165～167は千鳥と籠を描き、40と同じく蛇の目回形高台をなす。168・169も同じく蛇の目回形高台を有し、66と同じ形態・文様である。170～178は内面に釘抜紋を描く皿。裏面にも同じく「二丸」の文字が認められる。187は色絵皿であり、見込みには鶴丸が描かれる。

188は鉢用の蓋で、つまみの痕跡が残る。

190は明代の赤絵皿である。高台には重ね焼きの際の砂が付着している。



52



53

0 20cm

8-2-2-8 図 二の丸広場出土遺物実測図 6 (時習館ゴミ穴)



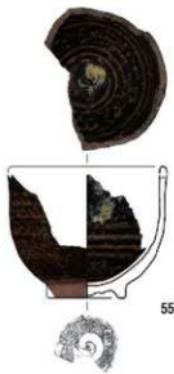
54



57



61



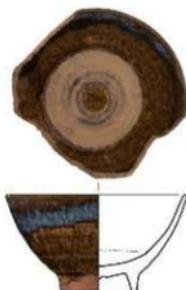
55



58



62



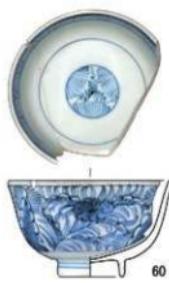
56



59



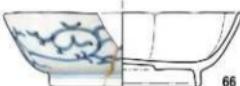
63



60

0 10cm

8-2-2-9 図 ニの丸広場出土遺物実測図7 (時習館横)

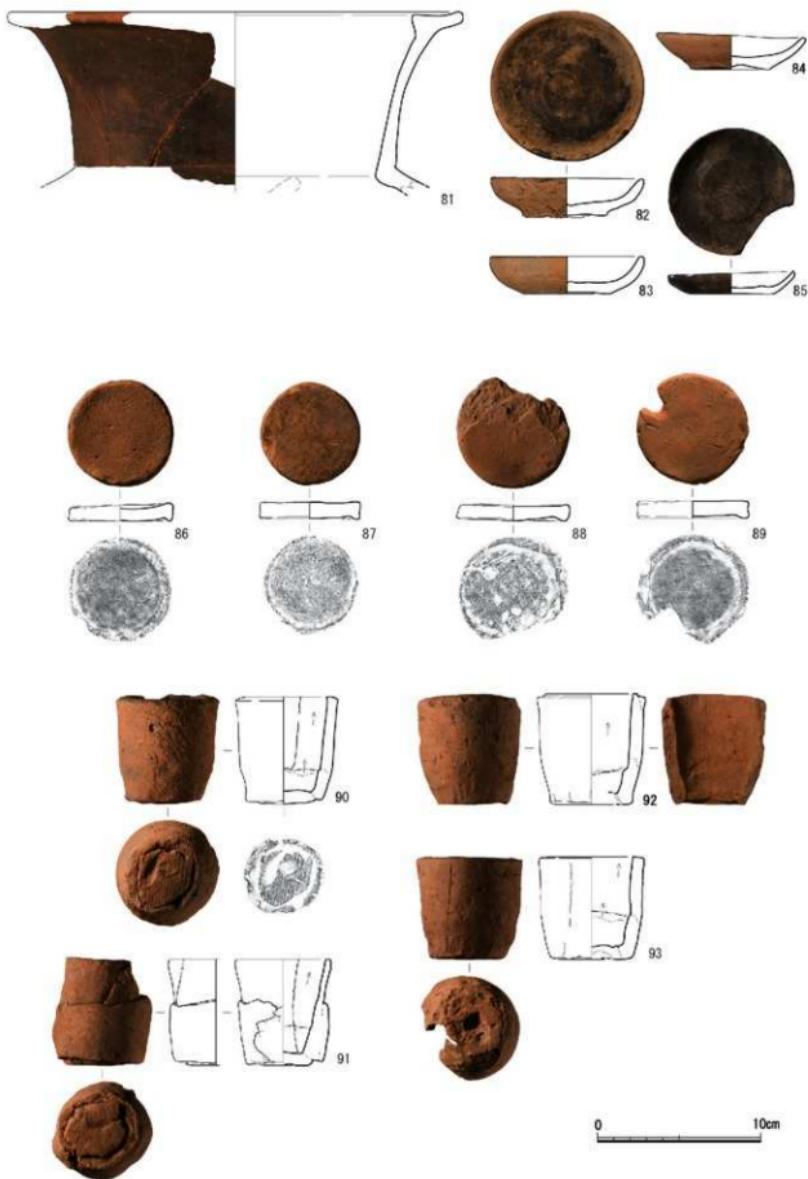


0 10cm

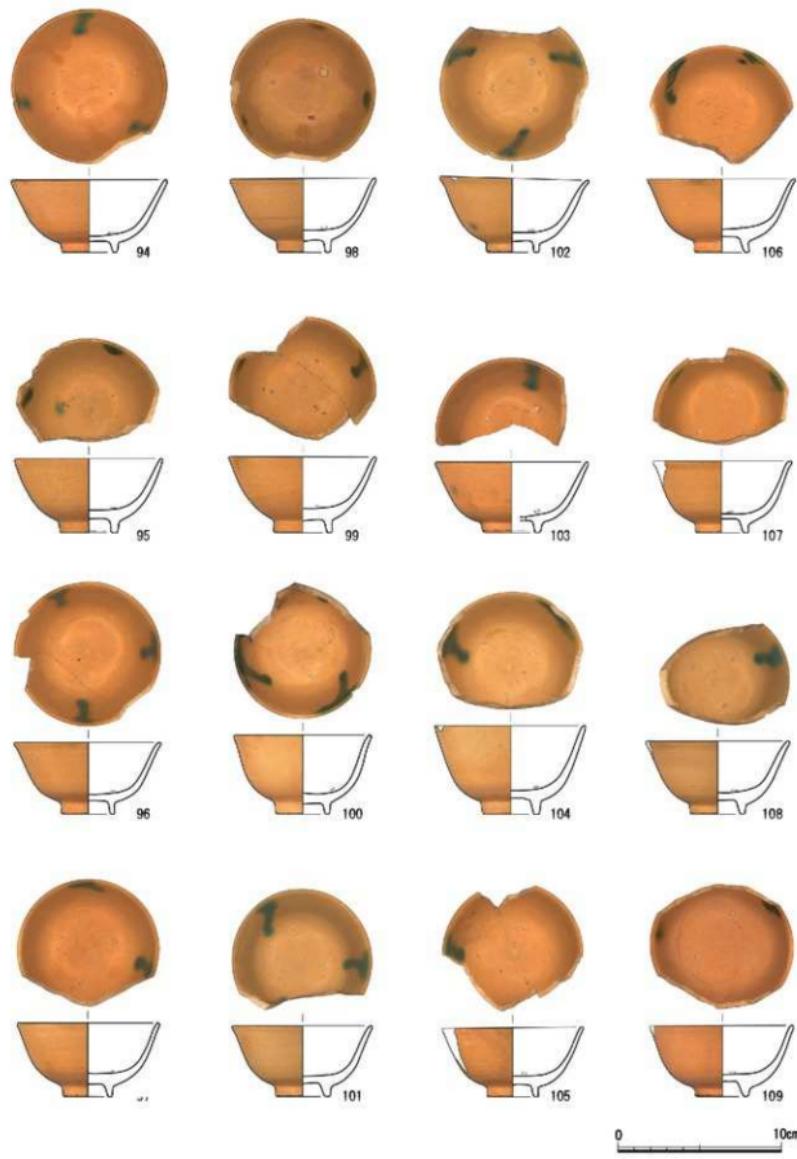
8-2-2-10 図 二の丸広場出土遺物実測図 8 (時習館横)



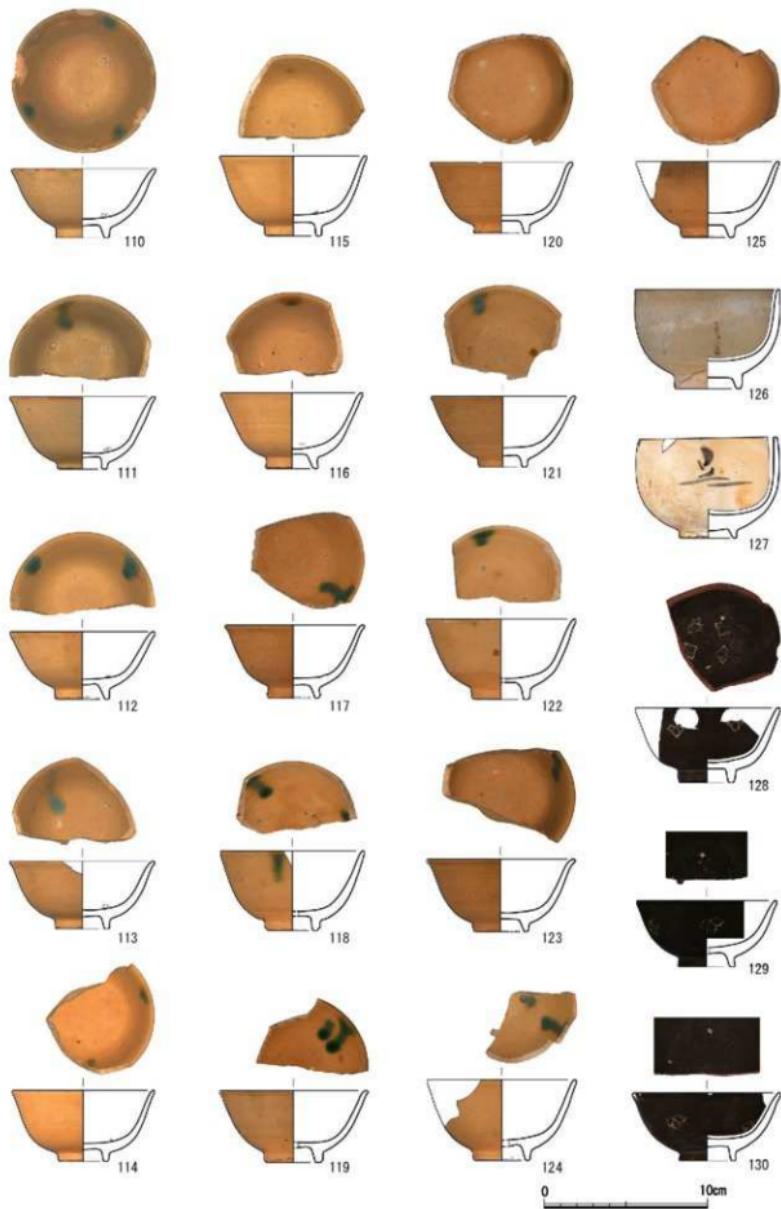
8-2-2-11 図 二の丸広場出土遺物実測図 9 (時習館横)



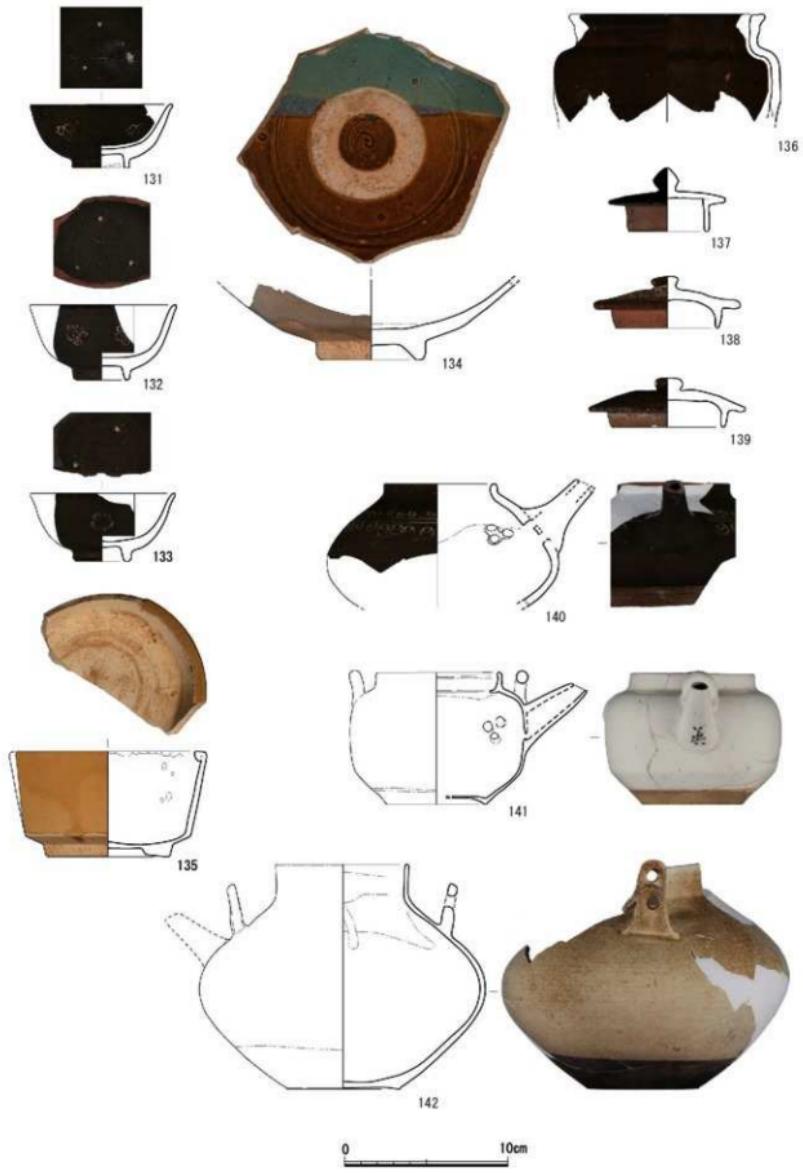
8-2-2-12 図 二の丸広場出土遺物実測図 10 (二の丸)



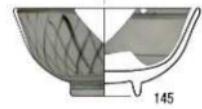
8-2-2-13 図 二の丸広場出土遺物実測図 11 (二の丸)



8-2-2-14 図 ニの丸広場出土遺物実測図 12 (ニの丸)



8-2-2-15 図 ニの丸広場出土遺物実測図 13 (ニの丸)



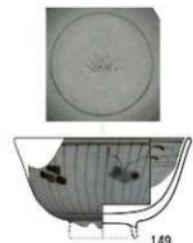
146



147



151



153



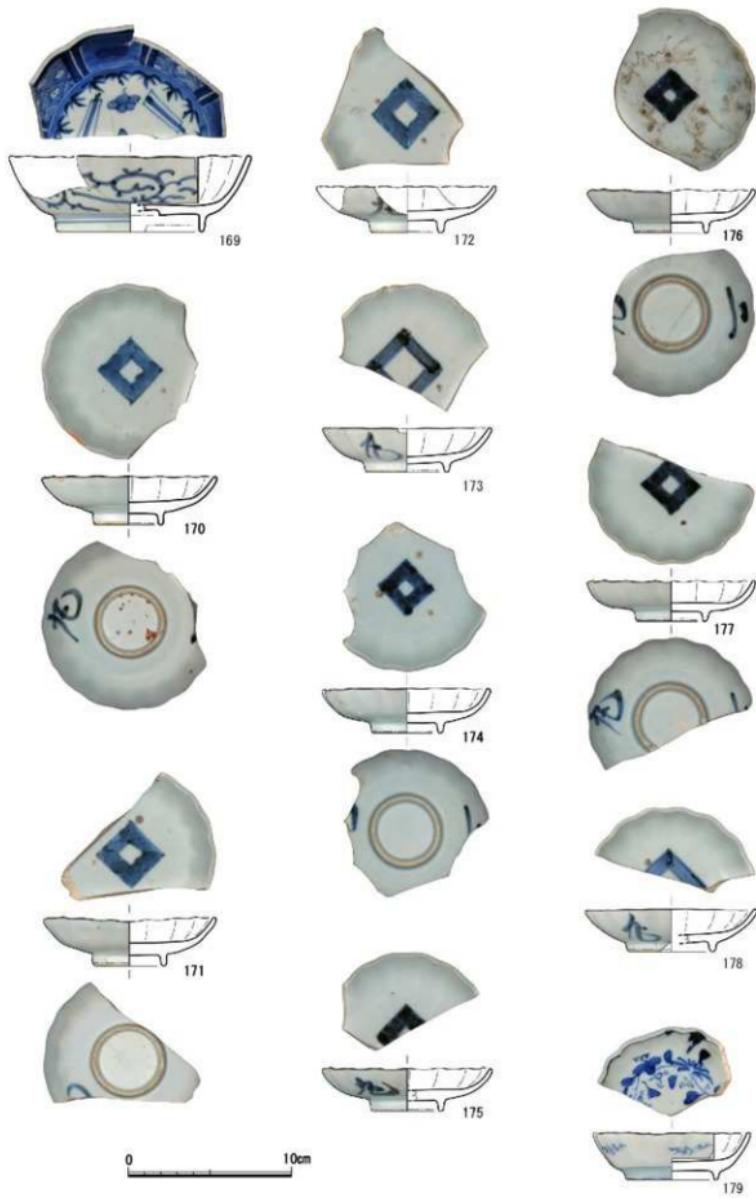
154

0 10cm

8-2-2-16 図 ニの丸広場出土遺物実測図 14 (ニの丸)



8-2-2-17 図 ニの丸広場出土遺物実測図 15 (ニの丸)



8-2-2-18 図 二の丸広場出土遺物実測図 16 (二の丸)



8-2-2-19 図 二の丸広場出土遺物実測図 17 (二の丸)



8-2-2-20 図 ニの丸広場出土遺物実測図 18

191～194はいわゆる軍用食器である。191は大碗で内面に「砲一」と記されている。「砲一」の砲とは砲兵を指している。また見込みに足ハマの痕跡が認められる。192は見込みに「歩二三」と記されている。「歩二三」とは歩兵第23連隊のことを指している。歩兵第23連隊が編成されたのは明治17年（1884）であるため、明治17年以降に製造された食器である。193は蓋である。194は湯呑碗である。外面に「高等官食堂」と記されている。上級官吏である高等官専用の食堂で使用された食器である。

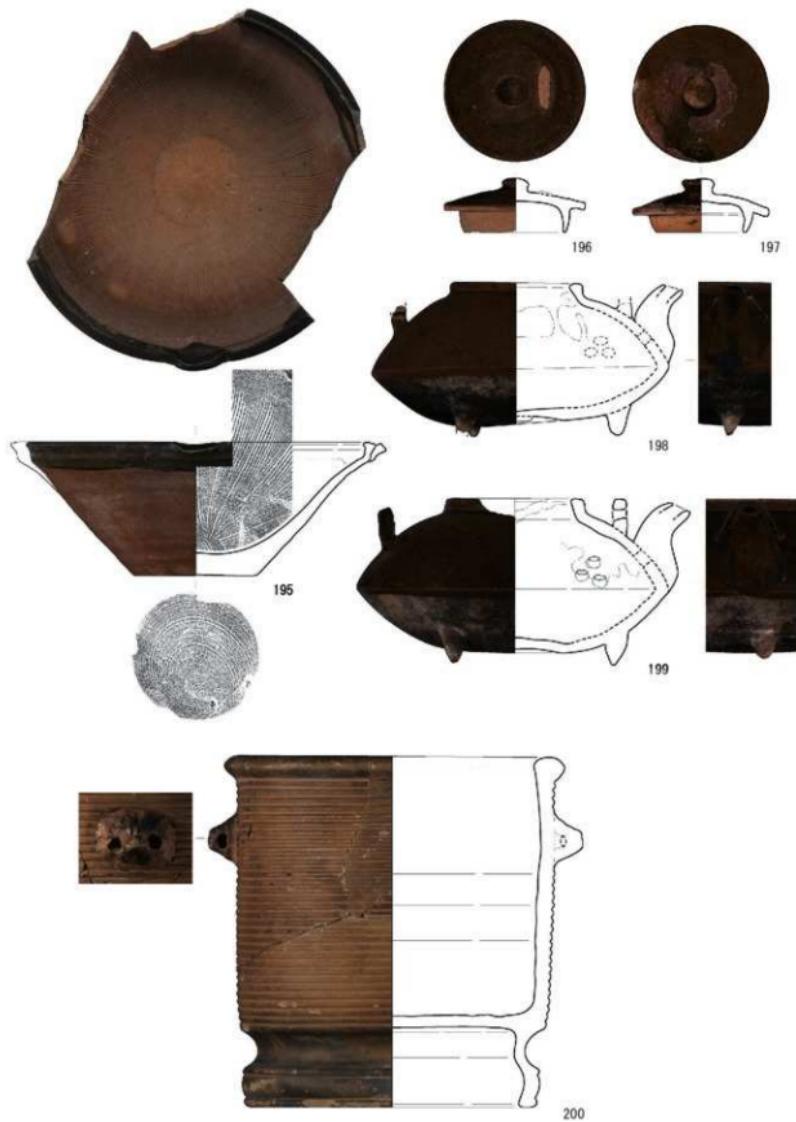
4) 熊本城 1989.9.1 (6点掲載 195～200)

熊本博物館が収蔵する出土地点不明の遺物のうち、1989年9月1日の日付が入る遺物は報告および調査時の写真からニの丸広場の調査出土と判明した。併せてこれらも掲載する。

185は肥前産の捕鉢である。口縁部のみ鉄軸を掛け、以下は露胎である。端部は肥厚させている。擦目は1方向のみである。底部は平底で糸切りである。17世紀後半に位置づけられる。

196～199は土瓶で196・197は蓋である。釉の色調から196は199と、197は198とセットになる可能性が高い。19世紀の製品で薩摩産と考えられる。

200は瓦質土器で、手培りであろうか。つまみには水平方向に孔が穿たれている。



0 10cm

8-2-2-21 図 二の丸広場出土遺物実測図 19 (熊本城)

< 33 二の丸御門跡 >

報告書：熊本城調査委員会『特別史跡熊本城跡 二の丸調査報告書』1976

熊本市教育委員会『熊本城二の丸御門虎口環境整備工事報告書』1977

調査期間：昭和 50 年（1975）8 月 11 日～同年 10 月末日

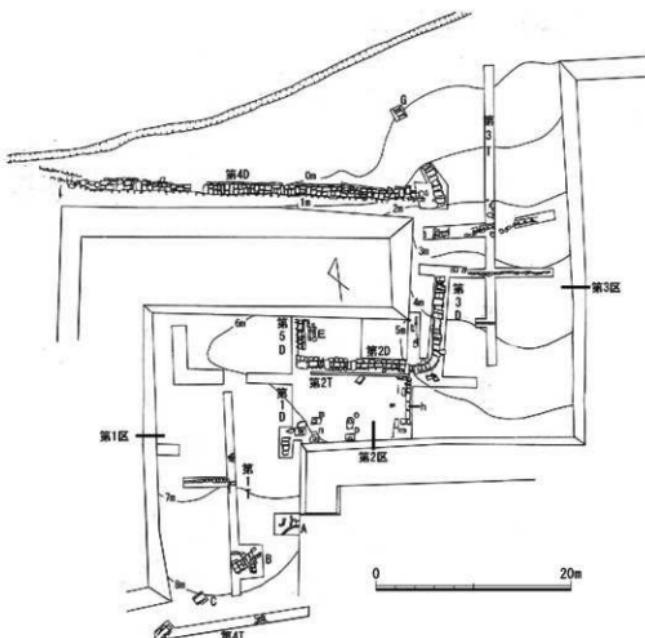
調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、第 2 分冊 26 頁を参照。

・遺物の経緯

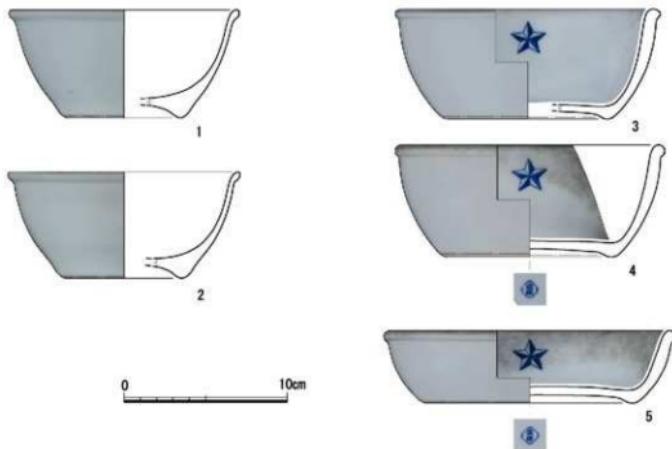
今回掲載する出土遺物は昭和 50 年の発掘調柶で出土したもので、熊本博物館に収蔵されている。遺物の由来を記したラベルには、「二の丸御門址西側第六師団 1980.8.12.」と記してあった。日付からみて、



第1T、第2T・・・Tはトレンチの略
第1D、第2D・・・Dは排水溝の略

850.8月～9月 片岡英治測量室

8-2-2-22 図 二の丸御門造構全体図



8-2-2-23 図 ニの丸御門出土遺物実測図

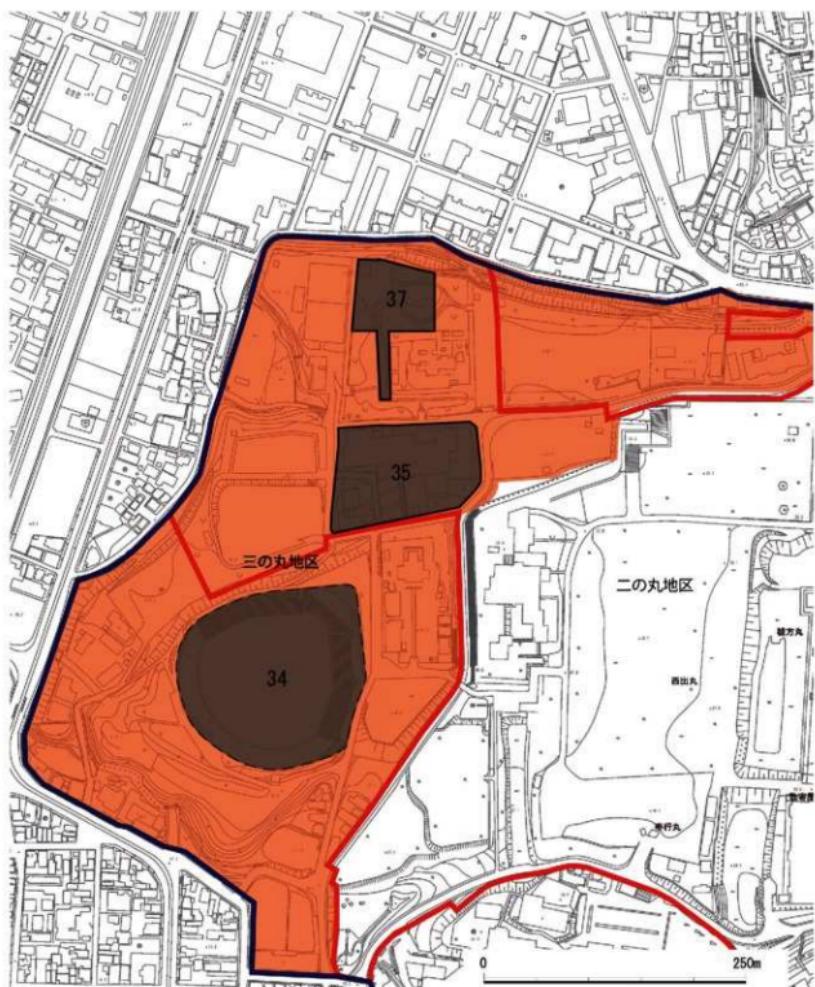
調査を開始した二日目に出土したものと考えられる。調査報告書に御門北側虎口・南側虎口の名称が確認でき、第1区となる南側虎口に西側石垣と記載されるため、ラベル記載の御門址西側とは第1トレンチを指している可能性が高い。第六師団の文言については参考となる記述がなく、出土状況等について明らかにすることはできなかった。

・未公表遺物の報告

1～5は、いわゆる軍用食器で、1～2は白磁、3～5は磁器染付である。すべて泥漿流し込み成形による。1・2は口径・底径・器高すべての法量が同一であり、規格品として生産されている。3～5は外器面に陸軍の「五芒星」を記し、底部に「名陶」とプリントする。「名陶」とは名古屋製陶所のことと、これは昭和初期の1938年から1943年にかけて稼働し、内面には「五芒星」が認められる。3・4も同一法量の食器であり、5は3・4よりも口径が大きく器高が低い。5点の食器から3種類の法量が確認でき、食事の内容による使い分けが伺える。

第3項 三の丸地区

三の丸地区では、3地点の未公表資料について報告する。



34. (藤崎台) 35. 二の丸御屋形跡 (熊本博物館) 37. 二の丸御屋形跡

8-2-3-1 図 調査地点位置図

< 34 (藤崎台) >

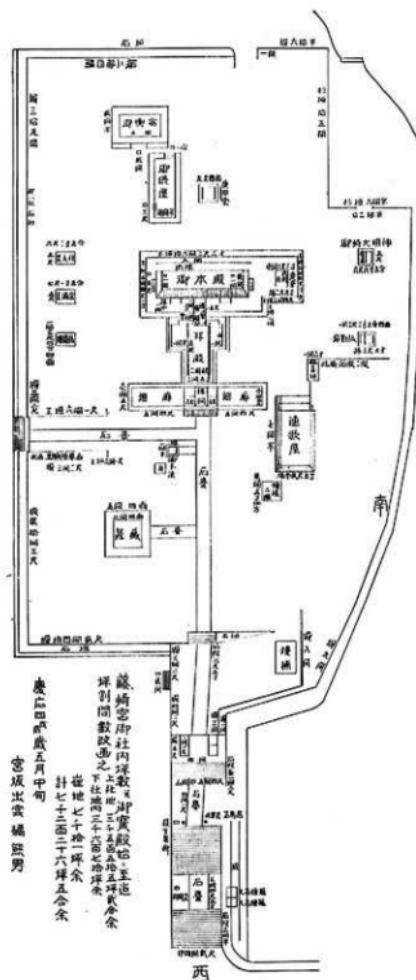
報告書：熊本県教育委員会『藤崎台』1961

調査期間：昭和34年（1959）から昭和35年頃

調査面積：不明

調査主体：熊本県教育委員会

その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、第2分冊37頁を参照。



8-2-3-2 図 「藤崎八幡宮社地面図」 慶応四年（報告書より転載）

・遺物の経緯

今回掲載する出土遺物は、昭和35年の藤崎台県営野球場建設に伴って出土したものである。調査後は熊本県文化財専門委員会より熊本博物館へ寄託され、現在も熊本博物館に収蔵されている。

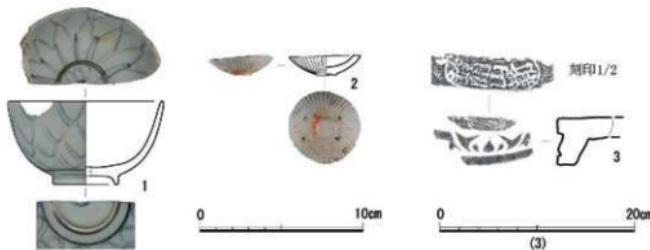
・未公表遺物の報告

コンテナ6箱のうち、105点を図示した。遺物の詳細は観察表による。発掘報告書には遺構配置図の掲載はないが、境内の配置は8-2-3-2図のとおり。出土遺物の注記内容からおおよそ以下の出土地点に分類することができるので、これら出土地点ごとに資料を掲載・紹介する。

- 1) 神殿址 磐石列
- 2) 神殿跡 南の井戸
- 3) 神殿跡北の井戸
- 4) 神殿跡井戸N
- 5) 井戸周辺
- 6) 神殿跡P
- 7) 北東区
- 8) 西北辺
- 9) 経藏址
- 10) その他（藤崎台遺跡神殿址、神殿址、藤崎台宮址埋土、藤崎宮址押土瓦などの注記）

1) 神殿跡磐石列（3点掲載 1・2・3）

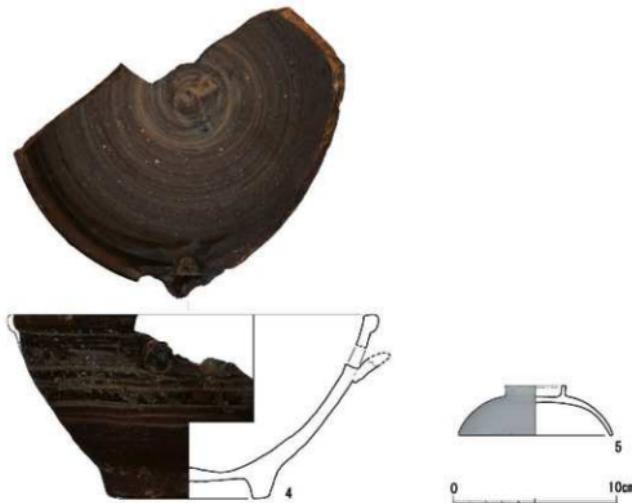
「藤崎台神殿址磐石列」「神殿址ソ列区」などの注記・情報が記されたものである（1・2）。1は肥前産の磁器染付碗で1700～1750年代の所産である。2は肥前系の白磁紅皿で1820～1860年代の所産である。3は軒平瓦である。瓦当部の中央周縁上に「○間山新」の刻印がある。平瓦部は欠損している。



8-2-3-3 図 神殿跡磐石列 出土遺物実測図

2) 神殿跡南の井戸（2点掲載 4・5）

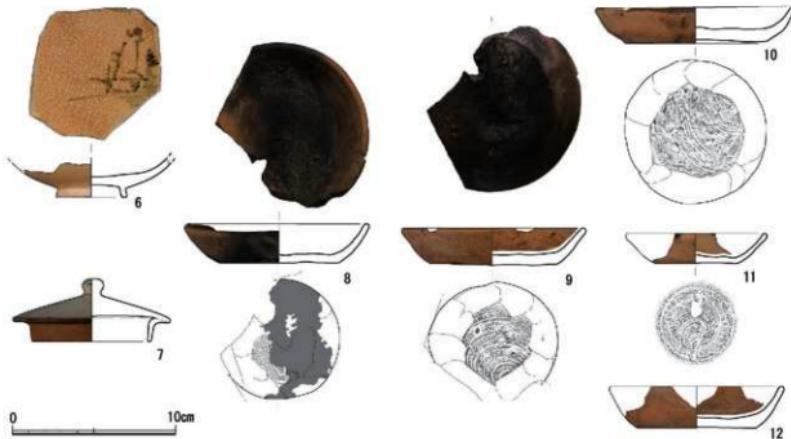
「藤崎台遺跡神殿址 南の井戸（井・S）」などの注記・情報が記されたものである（4・5）。4は肥前産の陶器片口鉢で、17世紀後半～18世紀初めの所産である。5は白磁の碗蓋で18世紀の所産である。



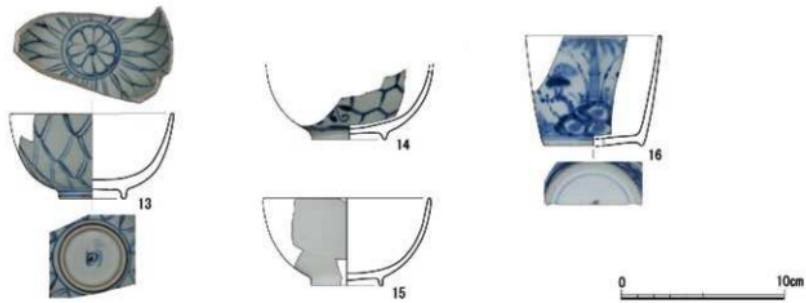
8-2-3-4 図 神殿跡南の井戸 出土遺物実測図

3) 神殿跡北の井戸 (11 点掲載 6 ~ 16)

「藤崎台神殿址 北の井戸」などの注記・情報が記されたものである (6 ~ 16)。6 は肥前産の陶器碗または深皿で京焼風陶器で 18 世紀初めの所産である。7 は肥前産の陶器土瓶蓋で 1680 ~ 1750 年代の所産である。8・9・10 は在地産の土師器壺である。8 は内外面に油煙が顕著であることから灯火具とみられる。11 も在地産の土師器壺で煤の付着から灯火具とみられる。12 も在地産の土師器壺である。13 は 1 に同じ。14 は肥前産の磁器染付碗で 1700 ~ 1750 年代の所産である。15 は肥前産の白磁碗で 1700 ~ 1750 年代の所産である。16 は肥前産の磁器染付猪口で 17 世紀末～18 世紀前半の所産である。



8-2-3-5 図 神殿跡北の井戸 出土遺物実測図 1



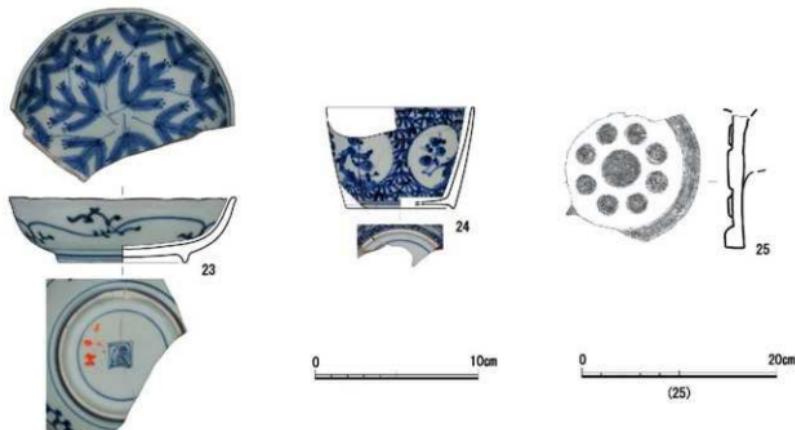
8-2-3-6 図 神殿跡北の井戸 出土遺物実測図 2

4) 神殿址井戸N（9点掲載 17～25）

「神殿址神井N」などの注記・情報が記されたもの（17～25）。17は肥前産の磁器染付碗で1690～1730年代の所産である。後述する94とセットである可能性が高い。18は関西産陶器で18世紀の所産である。19は肥前産の染付皿で18世紀前半の所産である。20は肥前産の磁器染付皿で18世紀前半の所産である。21は現川産の陶器輪花皿で1690～1740年代の所産である。22は肥前産の白磁輪花皿で17世紀後半～18世紀前半の所産である。23は19に同じ。24は肥前産の陶器猪口で1680～1780年代の所産である。25は九曜紋軒丸瓦である。瓦当部のみで丸瓦部分は欠損している。



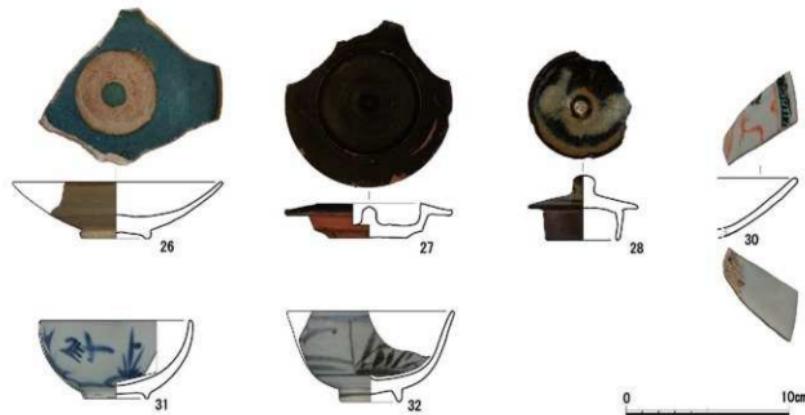
8-2-3-7 図 神殿址北の井戸 N 出土遺物実測図 1



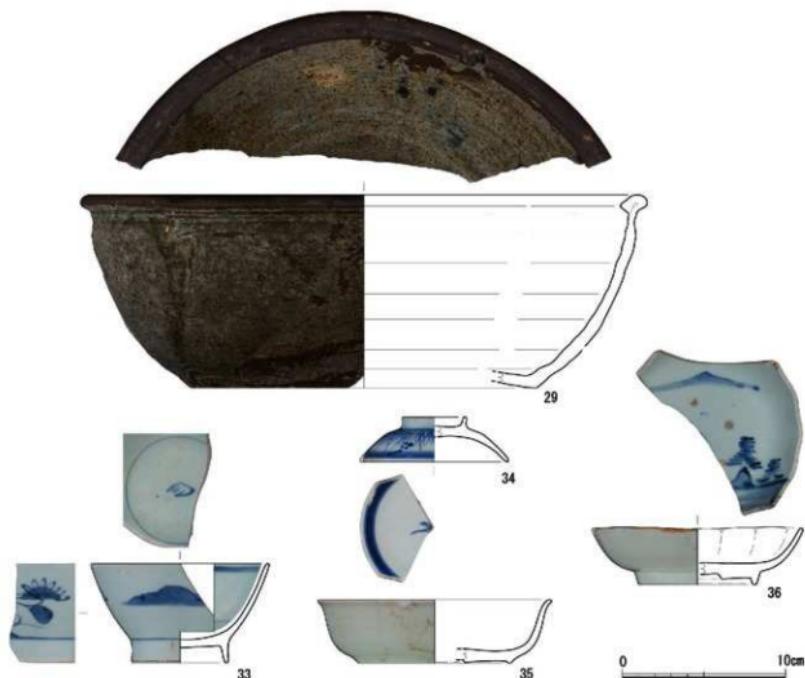
8-2-3-8 図 神殿址井戸N 出土遺物実測図 2

5) 井戸周辺 (11点掲載 26 ~ 36)

「井戸周辺N o. 3 P」などの注記・情報が記されたもの (26 ~ 36)。26は内野山(肥前)産の陶器皿である。27は九州産の陶器土瓶蓋で、18世紀末~19世紀中頃の所産である。28は小代産または福岡産の陶器蓋で、18世紀後半~19世紀中頃の所産である。29は肥前産と考えられる陶器鉢で、17世紀前半~中頃の所産である。30は漳州窯系(中国産)の磁器赤絵皿で、16世紀末~17世紀初めの所産である。31は波佐見産の磁器染付碗で18世紀後半の所産である。32は肥前系の磁器碗で染付の端反碗で19世紀初め~中頃の所産である。33は肥前系の磁器染付碗で広東碗、1780~1840年代の所産である。34は肥前系の磁器染付碗で端反瓶蓋、19世紀初め~中頃の所産である。35は肥前系の白磁皿で、18世紀末~19世紀前半の所産である。36は肥前系の磁器染付で輪花皿、19世紀初めから中頃の所産である。



8-2-3-9 図 井戸周辺 出土遺物実測図 1



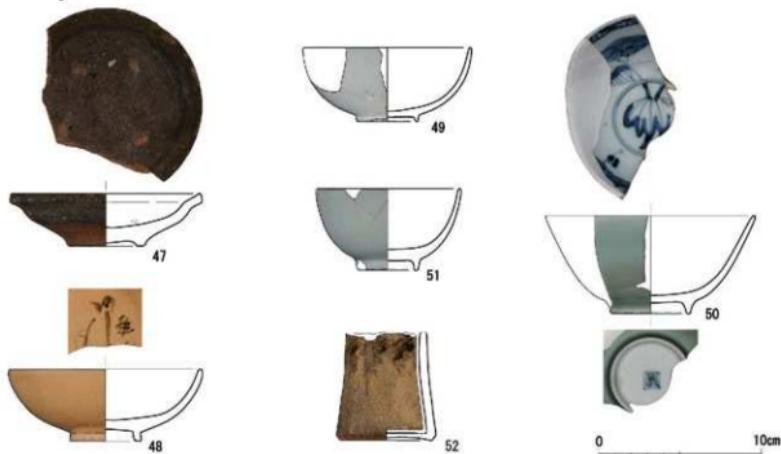
8-2-3-10 図 井戸周辺 出土遺物実測図 2

6) 神殿址 P (16点掲載 37 ~ 52)

「藤崎台神殿址 P 11号」「藤崎台神殿址 Pる」などの注記・情報が記されたもの(37~52)。37は福建省(中国)産の白磁椀、大宰府分類の椀IV類にあたり、11世紀後半~12世紀前半の所産である。38は在地産の土師器小皿で、口縁の内外面に油煙がみられる。39は肥前系の白磁碗で18世紀末~19世紀中頃の所産である。40は肥前系の染付碗で19世紀後半(1870年代以降)~20世紀初めの所産である。41は内野山産の陶器皿で、17世紀末~18世紀初めの所産である。42は波佐見産の白磁碗で18世紀前半の所産である。43は肥前産の磁器染付皿で18世紀後半の所産である。44は肥前系の磁器染付輪花皿で、19世紀初め~中頃の所産である。45は肥前産の磁器染付輪花皿で、17世紀後半から18世紀前半の所産である。46は肥前系の磁器染付鉢で18世紀末~19世紀中頃の所産である。47は肥前産の陶器皿で1590~1610年代の所産である。48は肥前産の陶器碗または深皿で、京焼風の陶器である。49は肥前産の白磁碗で18世紀前半の所産である。50は肥前産の磁器染付青磁漱碗で、18世紀後半の所産である。51は肥前産の白磁碗で17世紀末~18世紀前半の所産である。52は関西系の陶器灰落しで、18世紀後半~19世紀初めの所産である。



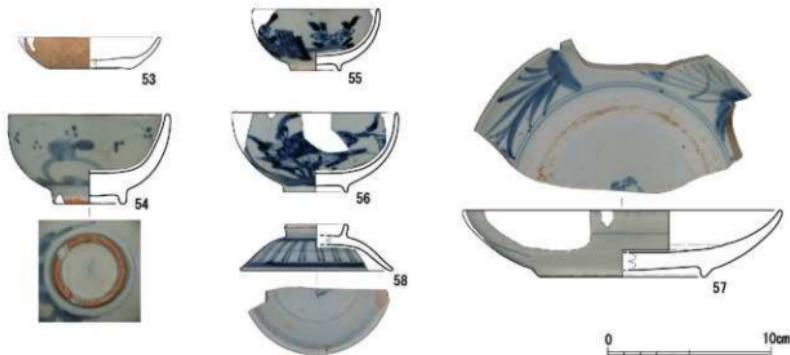
8-2-3-11 図 神殿址P 出土遺物実測図 1



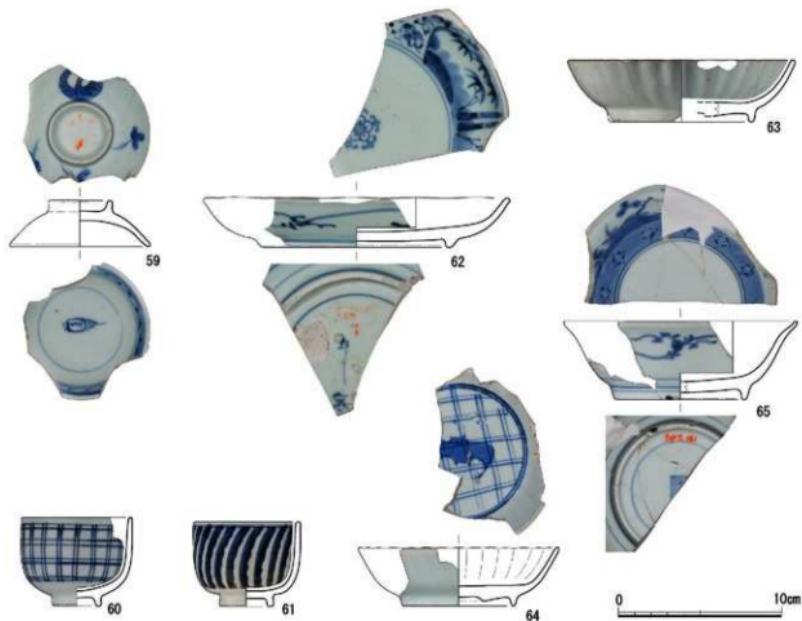
8-2-3-12 図 神殿址P 出土遺物実測図 2

7) 北東区（13点掲載 53～65）

「藤崎台遺跡神殿址北東区1号」「藤崎台遺跡神殿址北東P4」などの注記・情報が記されたもの（53～65）。53は在地産の土師器杯である。54は波佐見産の磁器染付碗で、18世紀後半の所産である。55は肥前産の磁器染付小碗で、1710～1750年代の所産である。56も肥前産の磁器染付碗で、1710～1750年代の所産である。57は波佐見産の磁器染付皿で18世紀後半である。58は肥前系の磁器染付端反碗蓋で、19世紀初め～中頃の所産である。59は肥前系の磁器染付端反碗蓋で、19世紀初め～中頃の所産である。60・61は肥前系の磁器染付小丸碗で、19世紀初め～中頃の所産である。62は肥前産の磁器染付皿で、17世紀末～18世紀前半の所産である。63は肥前系の白磁菊形皿で、19世紀初め～中頃の所産である。64は肥前系の磁器染付輪花皿で、19世紀初め～中頃の所産である。65は肥前産の磁器染付鉢で、17世紀末～18世紀初めの所産である。



8-2-3-13 図 北東区 出土遺物実測図 1



8-2-3-14 図 北東区 出土遺物実測図 2

8) 西北辺 (4点掲載 66～69)

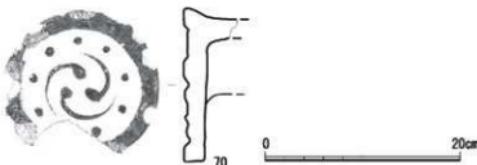
「藤崎台西北辺 1960. 3. 5」などの注記・情報が記されたもの (66～69)。66は小代または福岡産の陶器土瓶蓋（落とし蓋）で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。67は産地不明の青磁小碗で19世紀～20世紀初めの所産である。68は肥前系の磁器染付端反碗で19世紀初め～中頃の所産である。69も肥前系の磁器染付端反碗で19世紀初め～中頃の所産である。



8-2-3-15 図 西北辺 出土遺物実測図

9) 経藏址 (1点掲載 70)

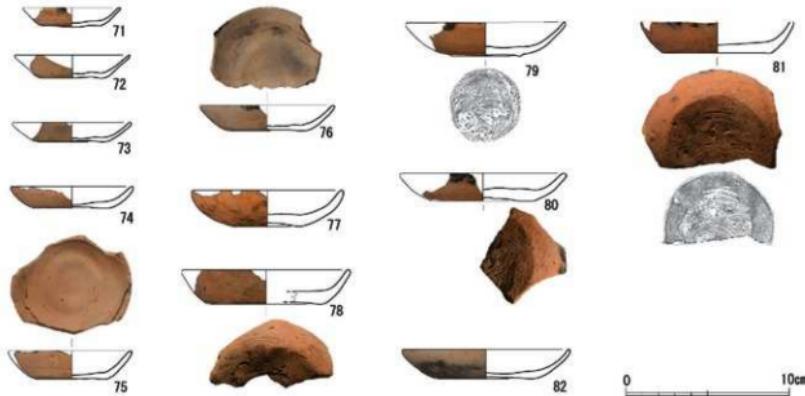
「藤崎台藤崎宮経藏址 1960. 3月」との注記・情報が記されたもの (70)。70は三巴文軒丸瓦である。巴文は左巻きで珠文は一部失われているが本来9個 (L 9) とみられる。



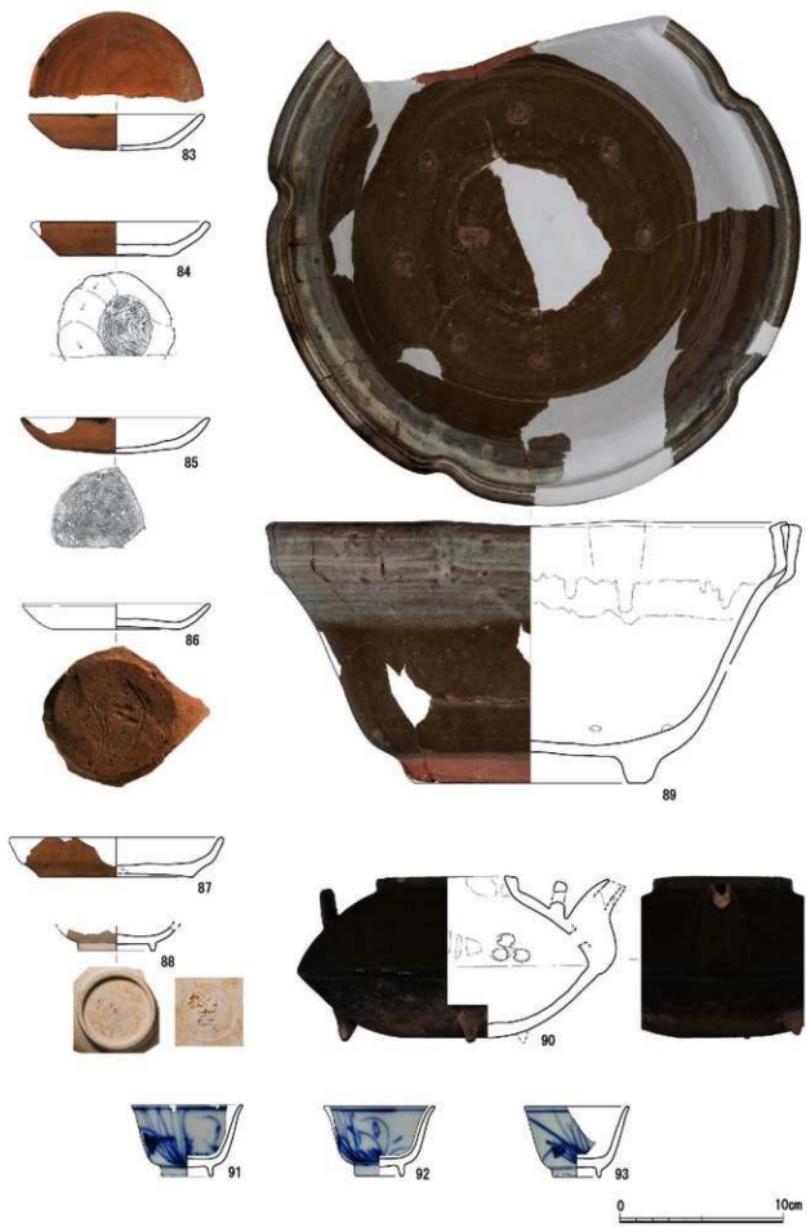
8-2-3-16 図 経藏址 出土遺物実測図

10) その他 (36点掲載 71 ~ 106)

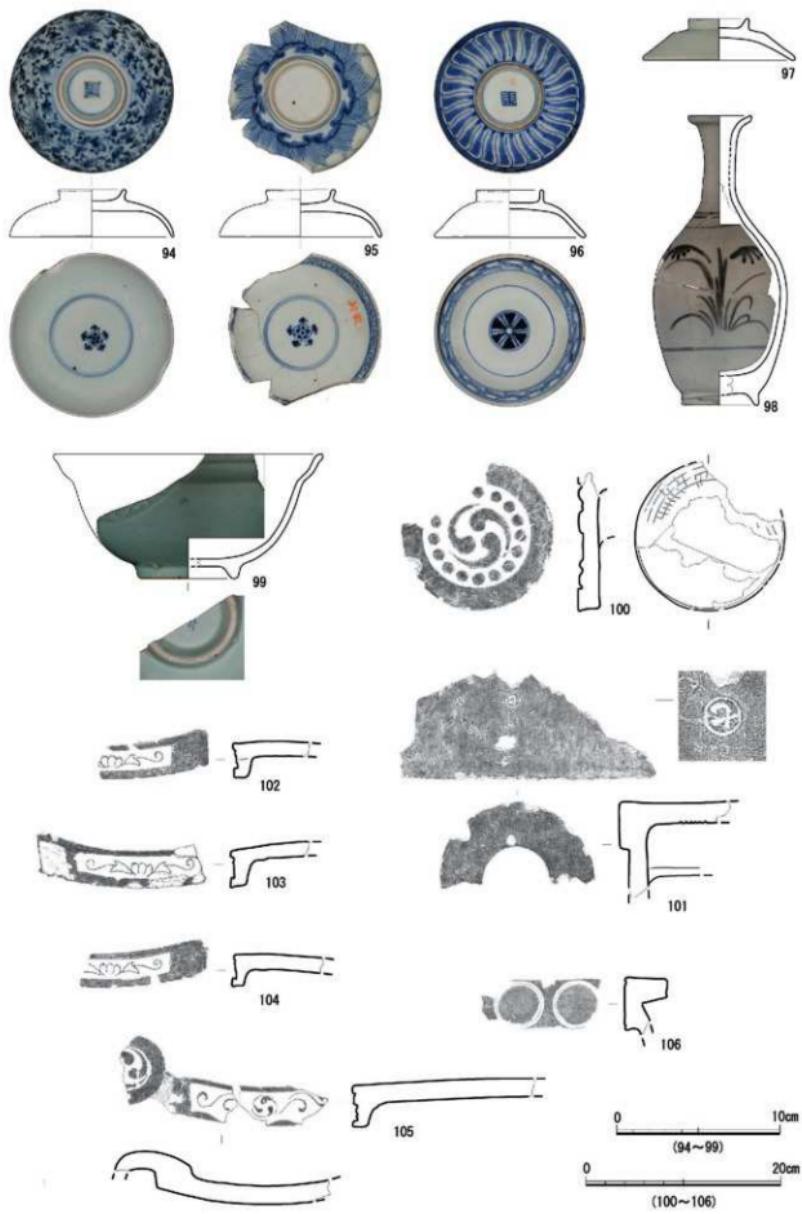
「藤崎台遺跡神殿址」「神殿址」「藤崎台宮址 1960. 3月埋土」「藤崎宮址押土瓦 1960. 3月」などの注記・情報が記されたもの (71 ~ 106)。71 ~ 87は全て在地産の土師器である。71 ~ 74は小皿で、71は油煙の付着から灯火具とみられる。75・76は壺で、76は油煙の付着から灯火具とみられる。75・76とも内底に静止ナデが施されないことが明瞭なので、掲載図に内面の写真を付けた。77 ~ 87も壺で、79・80・81・83・85は油煙の付着から灯火具とみられる。88は肥前産の京焼風陶器碗で、17世紀後半の所産である。89は肥前産の陶器輪花大鉢で、18世紀前半の所産である。90は肥前産の陶器土瓶で、1780 ~ 1860年代の所産である。91 ~ 93は磁器染付小壺である。94は肥前産の磁器染付碗蓋で1680 ~ 1730年代の所産、17とセットとなる可能性が高い。95は肥前産の磁器染付碗蓋で、1690 ~ 1730年代の所産である。96は肥前系の磁器染付端反碗蓋で、19世紀初め～中頃の所産である。97は肥前産の青磁碗蓋で、18世紀後半～19世紀初めの所産である。98は肥前産の磁器染付瓶で、17世紀後半の所産である。99は有田産の青磁鉢で、1941 ~ 1945年の所産である。100 ~ 106は瓦である。100は三巴文軒丸瓦で、巴文は右巻きで珠文は一部失われているが本来16個 (R 16) とみられる。101は蛇ノ目紋軒丸瓦、102 ~ 104は蓮華文軒平瓦、105は三巴文軒棟瓦、106は不明瓦である。



8-2-3-17 図 その他 出土遺物実測図 1



8-2-3-18 図 その他 出土遺物実測図2



8-2-3-19 図 その他 出土遺物実測図 3

・出土遺物の傾向

昭和 34 年の発掘調査で出土した遺物について、当時の報告書では陶磁器類の集合写真（白黒）や一部の軒瓦について拓本・実測図が掲載された程度であった。今回あらためて出土遺物を再整理した結果、以下のようない傾向を捉えることができた。

1) 中世の輸入陶磁器について

藤崎八幡宮の創建年代は古く、承平 5 年（935）に朱雀天皇が平将門追討を祈って石清水八幡宮を勧請し鎮座して以来、肥後國司造営の社となつた、と伝わる。しかし昭和 36 年刊行の『藤崎台』報告書でも、また再整理を経た今回の報告書でも、掲載遺物は近世以降の陶磁器が大半を占めており、古代～中世の出土遺物は大変少ない。そのような中にあって、37 の福建省産白磁碗は貴重な例であり、大宰府分類の椀 IV 類に該当し、11 世紀後半～12 世紀前半の所産である。これは中世の藤崎宮に関連する出土遺物である可能性がある。

2) 近世の土師器坏について

土師器 8・9・10 については、古町遺跡 1 次調査の A - 2 区 195 号遺構出土資料（18 世紀前半）が参考になる。A - 2 区 195 号遺構では 17 世紀後半～18 世紀前半の陶磁器類が出土し、これに土師器坏・小皿が共存している。うち、坏をみると 8・9・10 と同様、外底を切り離し後、静止ヘラケズリを外底全面に施している特殊なものである（古町遺跡 P111、71 図 170・171）。8・9・10 は、これとは胎土・器厚が異なるものの、また全面ではないものの、外底面に静止ヘラケズリが施されるという特徴の共通性から、近い時期の所産と予想される。このことから、「北の井戸」という同じ出土地点の表記から、6・7・13～16 が 18 世紀前半にはほぼ収まることは、古町 A - 2 区 195 号遺構の年代観と矛盾しない。但し、外底静止ヘラケズリの土師器坏はこの時期に限定されるものではなく、17 世紀前半から出土しており、おそらく 18 世紀前半までの所産と考えられる。

3) 出土遺物からみた遺構の時期について

注記内容に従って遺構ごとに出土遺物の時期を検討してみると、ある程度の時期を推察できる例もあつた。例えば「井戸周辺 No.3 P」（26～36）の場合は、27・29・30 はやや古く、他の 28・31～36 は概ね江戸後期の所産である。このことから、遺構の時期は 19 世紀初め～中頃であると推察される。

< 35 二の丸御屋形跡（熊本博物館）>

報告書：熊本博物館建設準備室『熊本市古京町二の丸跡調査報告書—熊本博物館建設予定地一』1974

調査期間：昭和48年（1973）8月1日～8月31日

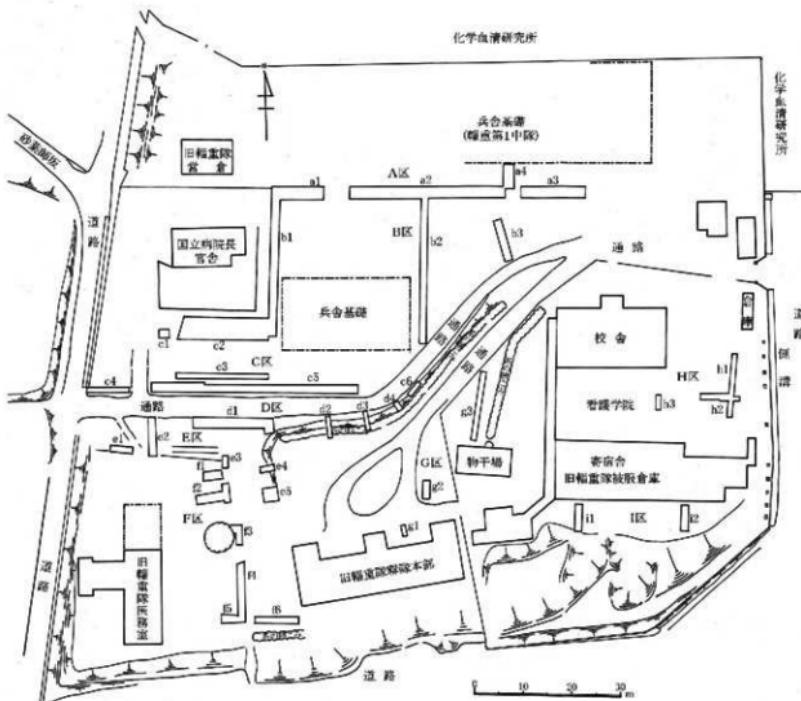
調査面積：不明

調査主体：熊本博物館古京町二の丸跡文化財調査団、肥後考古学会

その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、第2分冊40頁を参照。

・遺物の経緒

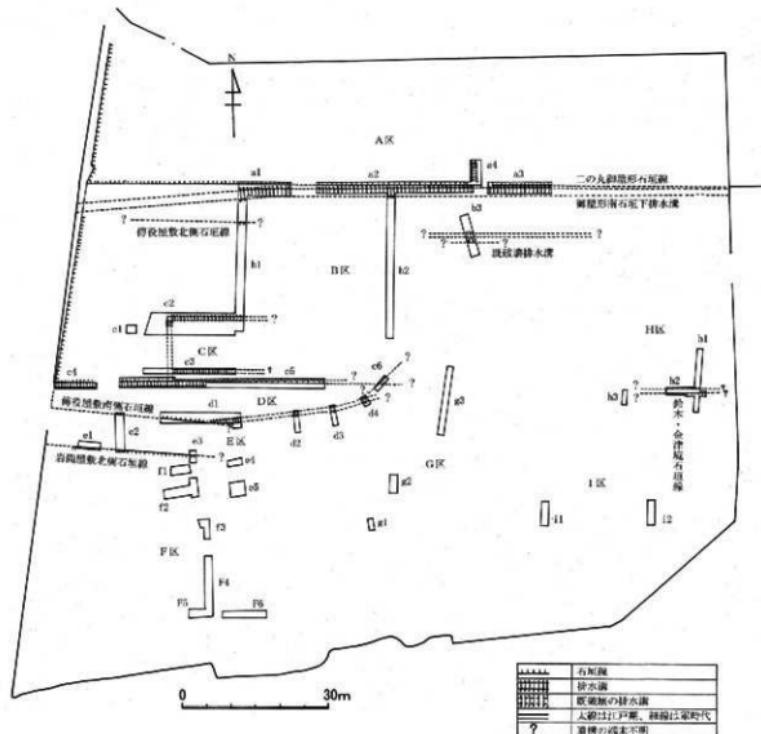
今回掲載する出土遺物は、昭和48年に熊本博物館建設に先立つ発掘調査で出土したもので、熊本博物館に収蔵されている。



8-2-3-20 図 昭和48年発掘調査区分図（報告書より転載）

・未公表遺物の報告

コンテナ5箱のうち、66点を図示した。遺物の詳細は観察表による。遺構分布図は8-2-3-21図のとおり。当時の発掘調査は、北から順にA・B・C・・・H・Iまで大文字で調査区を設定し、さらにトレンチをa1・a2・a3・・・と設定していることから(8-2-3-20図)、本書でもこれに準じて北から南の順番に遺物を紹介・掲載する。なお注記の年月日など遺物データを見ると、発掘調査の着手順も北から南の順番だったことがわかる。



8-2-3-21図 昭和48年発掘調査 遺構分布図（報告書より転載）

側溝付近（1973年8月7日など）

1) A区一帯

2) B区一帯

三の丸連隊本部（注記は、C-2 1973年8月26日など）

3) C区一帯

4) G区一帯

看護学校運動場（校舎と寄宿舎に挟まれた一帯が運動場か）

5) H区一帯

以下では、上記の出土地点ごとに遺物を掲載する。

1) A区・B区：「側溝付近」の注記（1～17）

「側溝付近 I - 1 (1973. 8. 7)」などの注記・情報が記されたものである（1～17）。1は瀬戸美濃産の灰釉陶器徳利で、18世紀中頃～後半の所産である。胴部最大径が12.5cmと大きいことから、八合徳利と考えられる。2は肥前産の磁器染付碗で、1770～1780年代の所産である。3は肥前産の磁器染付小壺で、17世紀後半の所産である。4は肥前系の磁器染付小丸碗で、19世紀初め～中頃の所産である。5は肥前産磁器染付蓋付鉢で、18世紀の所産である。6は波佐見産の磁器染付碗で1941～1945年の所産である。7は肥前産の磁器染付碗蓋で、18世紀後半の所産である。8は肥前系の磁器染付端反碗蓋で、19世紀初め～中頃の所産である。9は肥前系の磁器染付端反碗蓋で、19世紀初め～中頃の所産である。10は肥前系（網田産の可能性が高い）磁器染付皿で19世紀後半（1870年代以降）の所産である。11は肥前産の磁器染付皿で、18世紀末～19世紀初めの所産である。12は肥前系の磁器染付皿で、19世紀後半（1870年代以降）～20世紀初めの所産である。13は肥前系の磁器染付蓋物の蓋で、19世紀後半（1870年代以降）～20世紀初めの所産である。14は肥前産の磁器色絵小壺で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。15は肥前系の磁器染付合子蓋で、19世紀後半（1870年代以降）の所産である。16は肥前系の磁器白磁合子身で、19世紀の所産である。17は石製の鋳型である。鐘（かん）、すなわち机・箪笥などの引出につける金属製の取っ手を製作するためのもので、「元治元年」の銘が陰刻されていることから1864年製と考えられる。



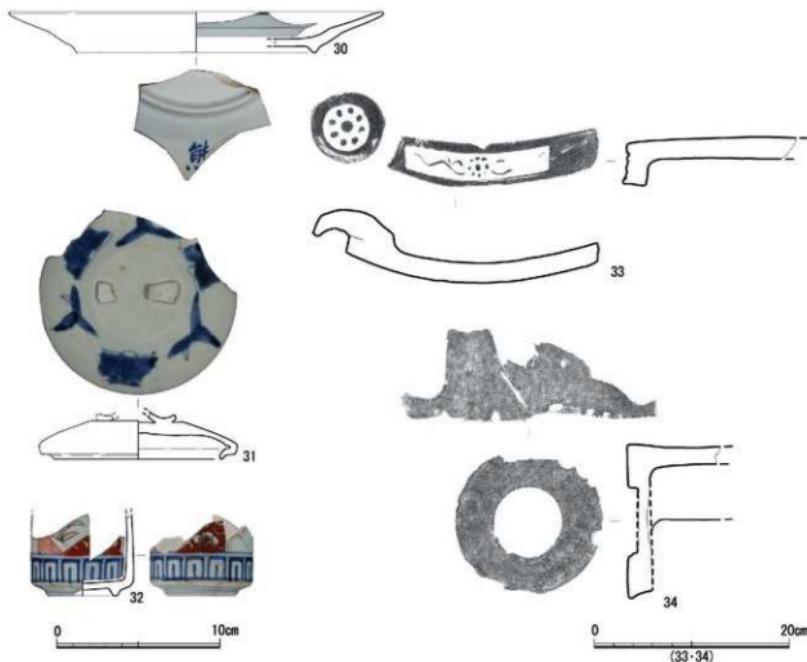
8-2-3-22 図 A区・B区出土遺物実測図 (1 ~ 17)

2) C区:「伝役屋敷」の注記(18~34)

18は松尾焼の陶器端反碗で、19世紀初め～中頃の所産である。19は肥前産の陶器擂鉢で鳥の餌入れと考えられ、18世紀の所産である。20は江戸時代の陶器で壺または甕の破片である。灰釉で長石が多いことから信楽焼の可能性が高い。21は瀬戸美濃産の陶器で、18世紀後半～19世紀前半の所産である。手水鉢と考えられる。22は中国漳州窯系の白磁碗で、16世紀末～17世紀初めの所産である。23も中国漳州窯系の磁器青花皿で、16世紀末～17世紀初めの所産である。24は肥前系の磁器染付端反碗で、19世紀初め～中頃の所産である。25は磁器染付碗で、20世紀前半の所産である。26は肥前系の磁器染付小丸碗で、19世紀初め～中頃の所産である。27は肥前系の磁器染付輪花皿で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。なお27には焼継がみられる。28は肥前系(網田焼の可能性が高い)の磁器染付皿で、19世紀後半(1870年代以降)の所産である。29は網田焼の白磁皿で、19世紀中頃～後半の所産である。30は磁器染付皿で、19世紀末～20世紀前半の軍用食器である。31は肥前系の磁器染付蓋物の蓋で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。32は肥前系の磁器色絵筒形碗(湯呑碗)で、19世紀中頃の所産である。33と34は軒瓦で、いずれも江戸時代の所産である。33は軒目板桟瓦で、軒丸部に九曜紋を、軒平部には唐草文を施している。34は蛇ノ目紋軒丸瓦である。



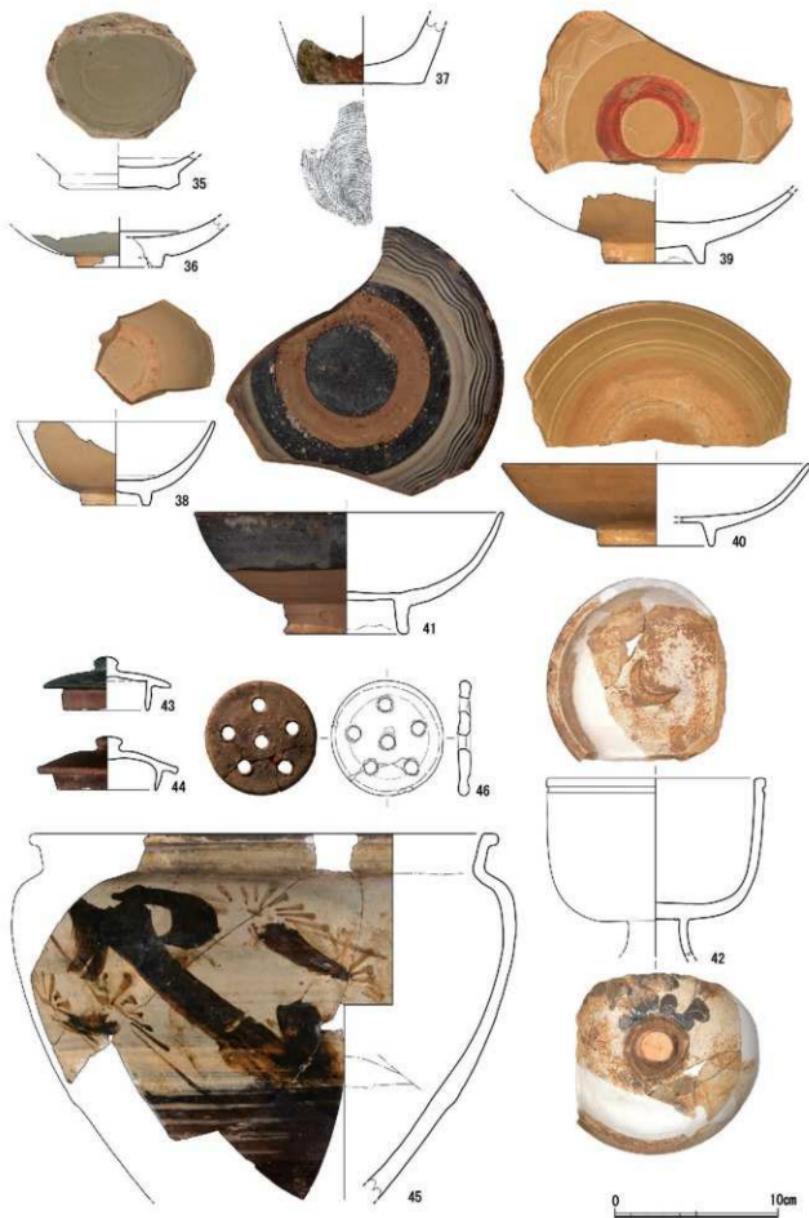
8-2-3-23図 C区出土遺物実測図1 (18~29)



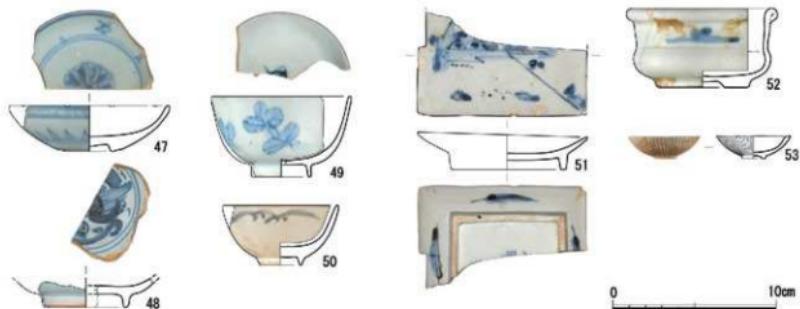
8-2-3-24 図 C区出土遺物実測図2 (30 ~ 34)

3) G区:「三の丸連隊本部」の注記 (35 ~ 53)

35は中国福建省産の白磁碗である。大宰府分類碗IV類で、11世紀後半～12世紀前半の所産である。36は中国南部産の白磁皿で、14世紀の所産である。37は福岡産の陶器小壺で、17世紀前半～中頃の所産である。38は肥前産の陶器碗で、18世紀後半の所産である。39は肥前産の陶器皿で、1650～1690年代の所産である。40は肥前産の陶器皿で、18世紀の所産である。41は内野山窯（肥前）産の陶器皿で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。42は関西産の軟質陶器脚付鉢で、18世紀の所産と考えられる。43は肥前産の陶器土瓶蓋で、1780～1860年代の所産である。44は肥前産の陶器土瓶蓋で、1780～1860年代の所産である。45は弓野焼（肥前）または二川焼（筑後）の陶器半銅甌で、19世紀の所産である。46は在地産の土師質焜爐の目皿で、19世紀前半～中頃の所産である。47は景德鎮窯系の磁器青花皿で、15世紀後半～16世紀中頃の所産である。48は景德鎮窯系の磁器青花碗で、16世紀中頃～後半の所産である。49は肥前系の磁器染付小碗で19世紀初め～中頃の所産である。50は肥前系の磁器染付小杯で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。51は肥前産の磁器染付皿で、1660～1680年代の所産である。52は肥前系の磁器染付香炉で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。53は肥前系の白磁紅皿で、1820～1860年代の所産である。



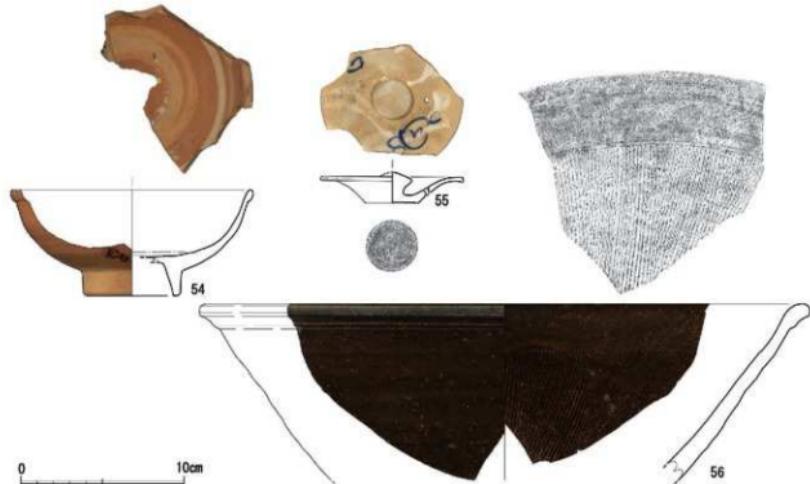
8-2-3-25 図 G区出土遺物実測図 1 (35 ~ 42まで)



8-2-3-26 図 G区出土遺物実測図2 (47 ~ 53)

4) H区:「看護学校運動場」の注記 (54 ~ 66)

54は肥前産の陶器皿で、18世紀前半の所産である。55は関西系の陶器土瓶蓋で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。56は肥前産の陶器捕鉢で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。57は肥前系の白磁小坏で、18世紀末～19世紀初めの所産である。58は肥前系の磁器染付小坏で、18世紀末～19世紀中頃の所産である。59は肥前系の磁器染付端反碗で、19世紀後半（1870年代以降）～20世紀初頭の所産である。60は肥前系の磁器染付碗蓋で、19世紀初め～中頃の所産である。61は肥前系の磁器染付大皿で、19世紀初め～中頃の所産である。62は肥前産の白磁小坏で、1630～1650年代の所産とみられる。63は肥前産の磁器染付小坏で、1710～1750年代の所産である。64は肥前系の磁器染付角鉢で、19世紀前半～中頃の所産である。65は有田産の磁器色絵大形壺蓋で、17世紀末～18世紀前半の所産である。66は基石で、粘板岩製で黒色を呈する。



8-2-3-27 図 H区出土遺物実測図1 (54 ~ 56)



8-2-3-28 図 H区出土遺物実測図2 (57 ~ 66)

・出土遺物の傾向

昭和 48 年の発掘調査で出土した遺物について、当時の報告書では軒瓦 7 点の拓本が掲載されたのみで、陶磁器類については本文で簡単に触れた程度で写真・実測図とともに掲載がなかった。今回あらためて出土遺物を再整理した結果、以下のような傾向を捉えることができた。

1) 古代～中世の輸入陶磁器について

博物館敷地の発掘調査においても、前出の「藤崎台」と同様に、古代～中世の輸入陶磁器の出土数は少ない。しかし今回新たに掲載・紹介したように、11 世紀後半～12 世紀前半の中国福建省産の白磁碗（35）や 14 世紀の中国南部産の白磁皿（36）が出土している。一方で「藤崎台」調査区でも同様に、11 世紀後半～12 世紀前半の中国福建省産の白磁碗（35）が出土している。これらは古代～中世における藤崎八幡宮の土地利用を考える上で、貴重な資料である。

2) 熊本城築城以前の輸入陶磁器について

博物館敷地においては、15 世紀後半～16 世紀中頃の景德鎮窯系の磁器青花皿（47）や 16 世紀中頃～後半の景德鎮窯系の磁器青花碗（48）、さらに 16 世紀末～17 世紀初めの中国漳州窯系の白磁碗（22）や同じく中国漳州窯系の磁器青花皿（23）が出土している。一方で「藤崎台」調査区においては、16 世紀末～17 世紀初めの漳州窯系（中国産）の磁器赤絵皿（30）が出土している。「藤崎台」と博物館敷地、隣接する 2 つの調査区において熊本城築城以前（15 世紀～16 世紀）の所産である輸入陶磁器が散見される点は、藤崎八幡宮及び熊本城の当該地における歴史的変遷を考える上で、大変興味深い。

3) 近世の陶磁器について

博物館敷地では近年の発掘事例もあり（熊本市熊本城調査研究センター 2017『熊本城跡発掘調査報告書 4—熊本博物館増改築工事に伴う三の丸地区の発掘調査—』、肥前系の白磁紅皿や（鳥の餌入れの可能性がある）小型擂鉢など生活に潤いを与える器種の出土がみられることから、武家屋敷における生活の一端を示す資料として報告されている。今回の遺物紹介によって、昭和 48 年の発掘調査でも同様に、肥前系の白磁紅皿（53）や（鳥の餌入れの可能性がある）小型擂鉢（19）が出土していたことが確認できた。

4) 近代の陶磁器、特に網田焼について

肥前系の磁器の中には、19 世紀後半（1870 年代以降）の磁器染付皿（10・28）や、19 世紀中頃～後半の白磁皿（29）など、特に網田焼とみられる製品がある。寛政 4 年（1792 年）頃の操業開始当初は、藩の保護のもとで織細かつ上質な磁器を生産していた網田焼だったが、約 30 年で藩の保護が打ち切られた。その後は皿・鉢・碗などの日用雑器を大量に生産するようになり、製品の質も次第に低下した。今回掲載・紹介した磁器皿も、このような日用雑器として生産された網田焼の製品が、熊本城内で消費されたものとみられる。

<37 二の丸御屋形跡>

報告書：熊本市教育委員会『熊本城三の丸森本格塗畠遺跡調査報告書』1979

熊本城研究会『熊本城三の丸・二の丸遺跡調査報告書』1980

調査期間：昭和54年（1979）3月15日～6月30日

調査面積：不明

調査主体：熊本市教育委員会

その他、「調査に至る経緯」・「調査の方法」・「調査の概要」については、総括報告書調査研究編第1分冊137頁を参照。

・遺物出土の経緯

昭和54年に調査を実施し、瓦・陶磁器等が出土した。この成果は昭和54・55年に報告書として刊行したが、この中で出土した陶磁器の報告に実測図等の掲載がされていなかった。本稿をもって、これを補うものとする。

・未公表遺物の報告

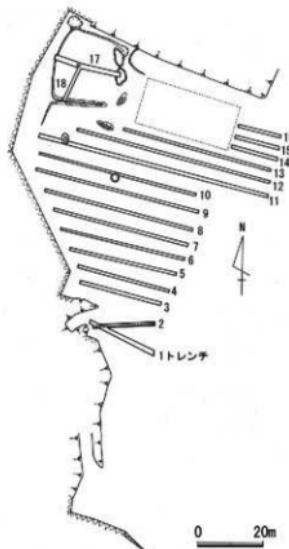
詳細は観察表による。コンテナ7箱の遺物から79点を実測した。10点を除いて、「二の丸・三の丸（昭和54.3.15～6.30調査分）」とのみ記載があり、詳細な出土調査区・出土層序は明らかではない。また、残りの10点も詳細な位置は明らかではない。

幕末から明治時代の遺物が主体で、18世紀代の遺物も多い。一方で12～13世紀の白磁も出土している。肥前系の磁器染付を中心として、白磁や赤絵、小代焼や八代焼と思われる在地の陶器も見られる。器種としては碗・鉢・皿・小杯が主体であるが、他の日用雑器も出土している。

1・2はどちらも12～13世紀代の中国南部産の白磁碗である。

3～22はすべて陶器で、3～7は碗、8～11は皿、12～15は蓋である。3は1610年～50年代の肥前産の陶器碗である。4・5は19世紀代の小代焼の陶器碗である。6は八代焼の陶器碗である。7は九州産の陶器の小丸碗である。8は志野焼の角皿である。9は1650年～1780年代の肥前産の陶器皿である。10・11は19世紀代の松尾焼の陶器皿である。12は18世紀代の肥前系の陶器の土瓶蓋である。13は19世紀代の陶器の土瓶蓋である。14は八代焼の陶器急須蓋である。15は万古焼と考えられる関西系の陶器蓋で、動物と思われる飾りが取り付けられている。16は備前産と考えられる焼締陶器の擂鉢である。17は1750年代の肥前産の擂鉢である。18は1690年～1750年代の肥前産の陶器片口鉢である。19は関西系の陶製杓子である。20は陶製の植木鉢である。21は肥前系の壺である。22は18世紀から19世紀代の関西系陶器の行平鍋である。

23～79は、江戸時代以降の磁器で、23～26は碗蓋、27～49は碗、50～54は小杯、55～68は皿、69・70は猪口、71・72は鉢用蓋、73～75は蓋付鉢、76・77は仮飯器である。23は1780年～1810年代の肥前産の磁器染付碗蓋である。24は1820年～1860年代の肥前産の磁器染付碗蓋である。25は19世紀代後半の肥前産の磁器染付の碗蓋である。



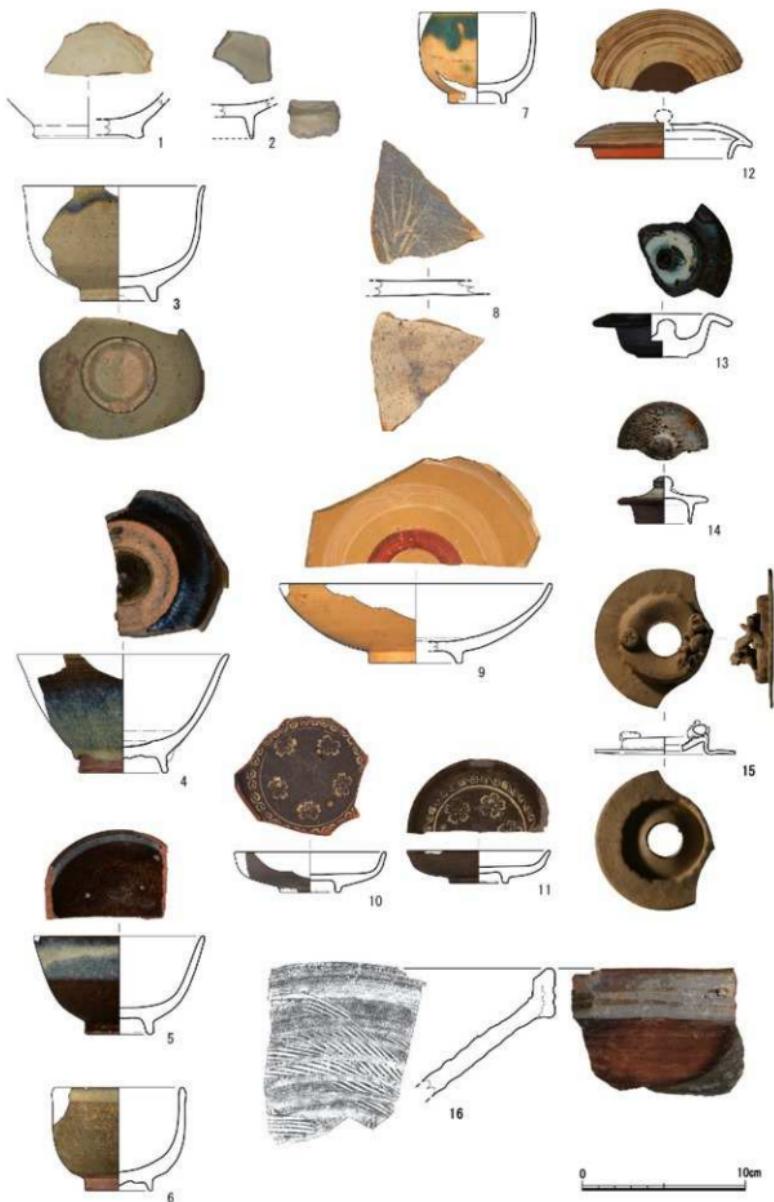
8-2-3-29 図 II区トレンチ配置図
(1/1500)

26は19世紀後半の肥前産の白磁の碗蓋である。27～32は端反碗である。27は1820年～60年代の志田焼と思われる磁器染付の端反碗である。28・29・30は1820年～60年代の肥前産の磁器染付の端反碗である。31は19世紀代の白磁の端反碗である。32は19世紀後半の肥前産の磁器色絵の端反碗である。33～35は広東碗である。33・34は1780年～1810年代の肥前産の磁器染付広東碗である。35は1820～1860年代の波佐見焼の磁器染付広東碗である。36～38は丸形碗である。36は1710年～50年代の肥前産の磁器染付の丸形碗である。37は1820年～1860年代の波佐見焼と思われる磁器染付の丸碗である。38は1820年～1860年代の肥前産の磁器染付の丸形碗である。39～42は小丸碗である。39は1770年～1810年代の肥前産の磁器染付小丸碗である。40は1820年～1860年代の肥前産の磁器染付小丸碗である。41・42は19世紀代の肥前産の磁器染付小丸碗である。43～45は筒形碗である。43・44は1750～70年代の肥前産の磁器染付筒形碗である。45は1780年～1810年代の波佐見焼と思われる磁器染付筒形碗である。46は1820年～1860年代の肥前産の磁器染付筒丸碗である。47は1820年～60年代の肥前産の白磁碗である。48は19世紀代の肥前産の磁器染付碗である。49は19世紀後半頃の肥前産の白磁碗である。50～53はいずれも1820年～60年代の肥前産の磁器染付の小杯である。54は19世紀代の肥前産の白磁小杯である。55は1750年～1810年代の波佐見焼の磁器染付皿である。56は1780年～1860年代の肥前産の磁器染付皿である。57は1780年～1860年代の肥前産の磁器染付皿である。58は1780年～1860年代の肥前産の磁器染付小皿である。59は18世紀代の肥前産の磁器染付皿である。60は1810年～1860年代の肥前産の磁器染付皿である。61は1820年～1860年代の肥前産の磁器染付皿である。62は1820年～1860年代の波佐見焼の磁器染付皿である。63は19世紀前半の肥前産の磁器染付小皿である。64は19世紀後半の肥前産の磁器染付皿である。65は肥前産の磁器染付皿である。66は19世紀後半の肥前産の磁器染付皿である。67は19世紀後半の肥前産の磁器染付皿である。68は19世紀、ヨーロッパ産の硬質磁器皿で、銅版転写でバラが描かれている。69は1700年～80年代の肥前産白磁猪口である。70は1750年～80年代の肥前産の磁器染付猪口である。71・72は、どちらも19世紀代の肥前産の磁器染付鉢用蓋である。73・74は19世紀代の肥前産の磁器染付蓋付鉢である。75も、肥前産の磁器染付蓋付鉢である。76は1690年から1780年代の肥前産の白磁の仏飯器である。77は1690年～1780年代の肥前産の赤絵の仏飯器である。78の磁器染付のレンゲ、79は磁器赤絵の用途不明製品である。

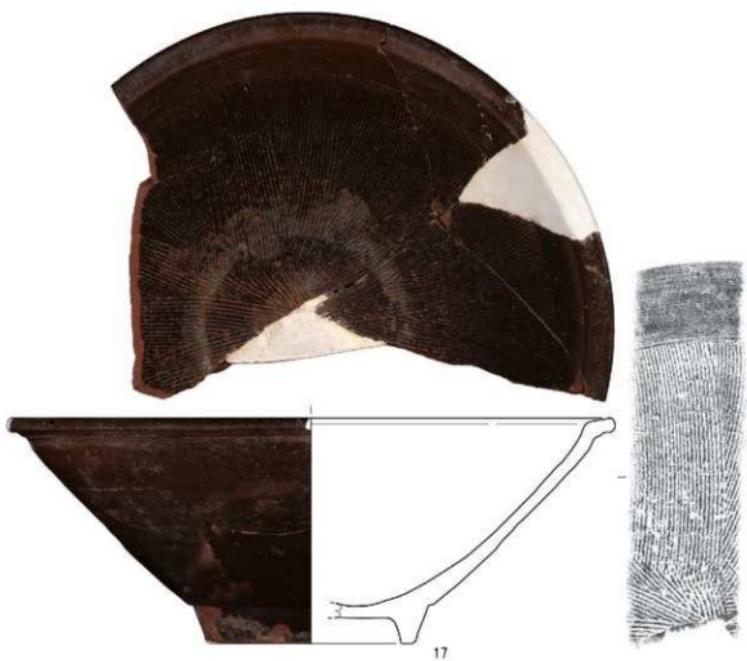
www.ohmara.com/トヨタ車の電子制御部品



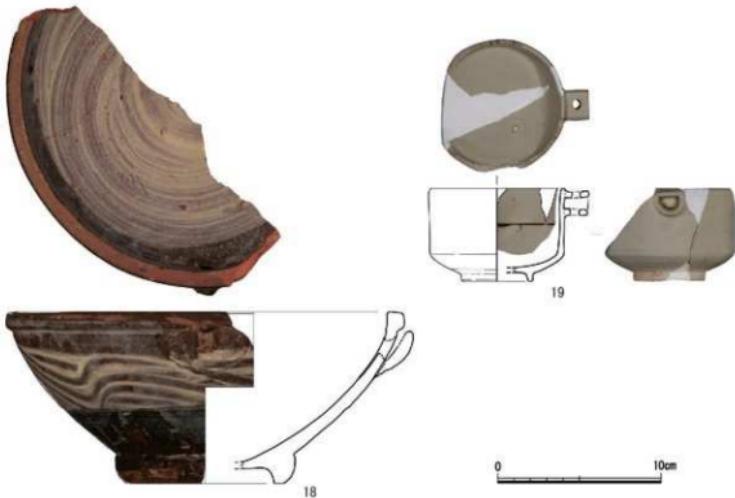
8-2-3-30 図 二の丸御屋形・御腰掛・森本櫓調査位置図
(1/4000)



8-2-3-31 図 二の丸御屋形・御腰掛・森本橿跡出土遺物実測図 1

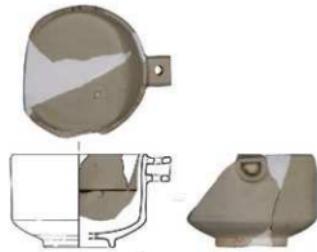


17



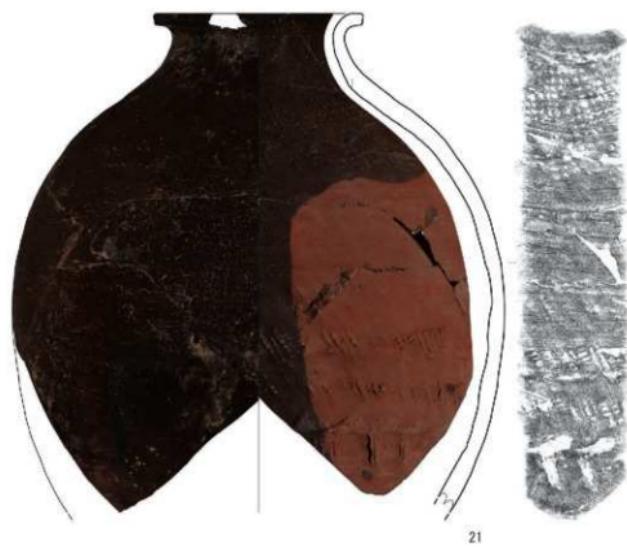
18

0 10cm



19

8-2-3-32 図 二の丸御屋形・御腰掛・森本櫓跡出土遺物実測図2



0 10cm

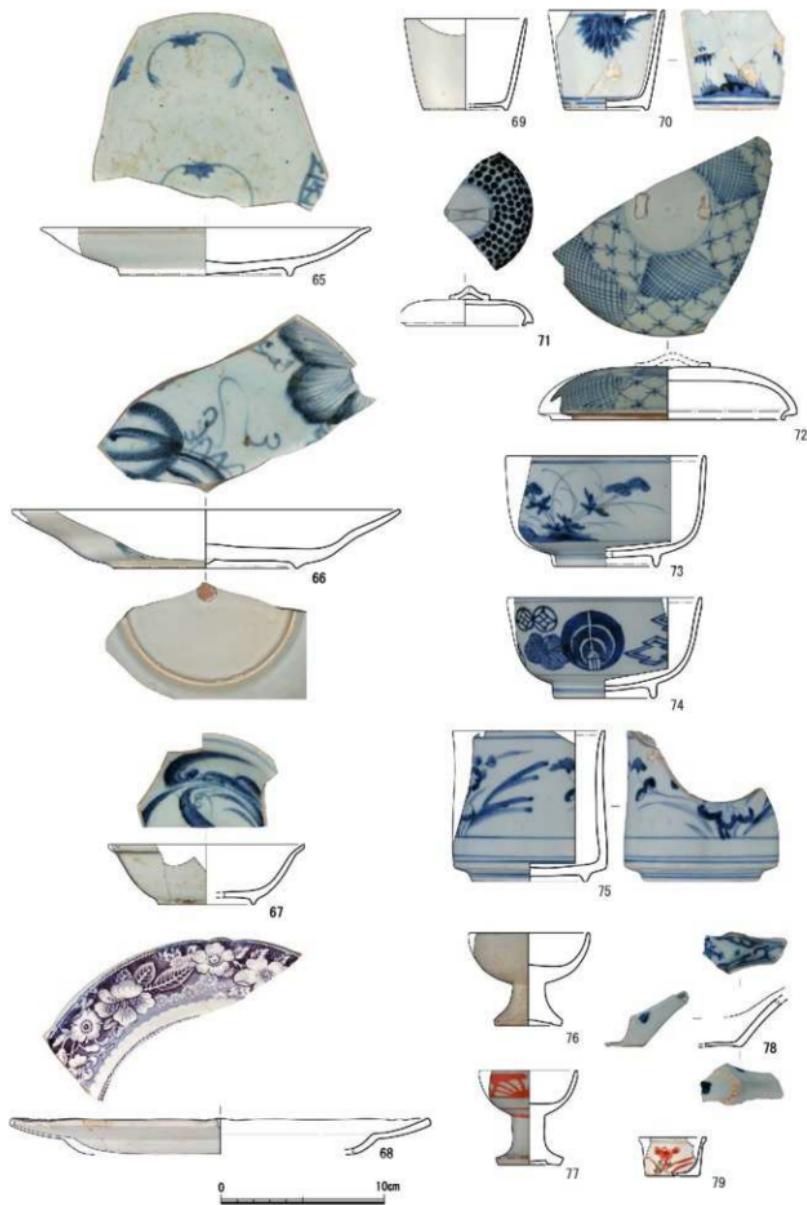
8-2-3-33 図 二の丸御屋形・御腰掛・森本櫻跡出土遺物実測図 3



8-2-3-34 図 二の丸御屋形・御腰掛・森本櫛跡出土遺物実測図 4



8-2-3-35 図 二の丸御屋形・御腰掛・森本櫻跡出土遺物実測図 5



8-2-3-36 図 二の丸御屋形・御腰掛・森本櫛跡出土遺物実測図 6

既報告未公表資料観察表

本丸地区

2 御裏五階櫓跡

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
1	裏五階櫓東側 F65-53根石トレンチ	土師器	壺	(11.9)	9.0	2.6	回転ナデ	回転ナデ、 底部回転糸切り		28
2	裏五階櫓東側 F66-54根石トレンチ	土師器	壺	(12.7)	(7.6)	2.5	回転ナデ	回転ナデ、 底部ハケズリ		28
3	裏五階櫓東側 F66-50 I層	陶器	土瓶蓋	9.7	5.2	2.0	回転糸切り、 工具ナデ	回転ナデ、 蓋輪(灰輪)、沈線		28
4	裏五階櫓東側 F64-54 I層	磁器染付	小丸碗	(6.2)	3.2	5.4	施釉	染付、施釉、砂目、 草花文		28
5	裏五階櫓東側 F66-49 I層	磁器染付	蓋(碗用)	9.1	(3.9)	3.0	染付、施釉、 見込み松竹梅文	染付、施釉、 輪ハギ、草花文		28
6	裏五階櫓東側 F65-50 I層	磁器	パレット	—	4.3	1	施釉	施釉、底部無釉、 墨書きあり		28
7	裏五階櫓東側 F61-55 I層	磁器染付	かわらけ	(8.5)	4.6	1.7	回転ナデ後スタン プ	回転ナデ後削り出し 高台	新春配布用、 見込に「賀正昭和 四一年熊本城」の記載有り	28
8	裏五階櫓東側 F65-51 I層	磁器染付	薬盒蓋	4.5	—	0.9	施釉、輪ハギ	染付、施釉、 商品名	表に「肥後 渡辺 半蔵入 鳥居園」の記載有り	28
9	裏五階櫓東側 F65-54 I層	貝製品	白基石	5.0	—	2.1	—	—	材料ハマグリ	28

7 百間櫓跡

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
1	飯田丸梅園表採	銭貨	招平通宝	孔径0.7	直徑2.3	—	「招平通宝」			21
2	飯田丸F96-90 I層	銭貨	天保通宝	—	—	3.7	正面「天保…」	裏面「舊…」	被熱痕跡有り	21
3	飯田丸F95-81上 I層	武器	四斤砲弾	—	(6.0)	(8.7)		リベット4か所残存		7
4	飯田丸F95-79 I層	銅製品	薬莢	6.0	—	1.1				21
5	飯田丸F95-79 I層	鐵製品	水筒(堤桶)	3.9	—	14.0			全体に錆び、 板状にへこむ	21
6	数寄屋丸二階広間 下	銅製品	馬蹄(後蹄)	1.5	—	6.2			正面右に釘穴2ヶ 所あり	21

15 元札櫻門跡

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
1	元札 I 層	銅製品	切羽	—	0.1	2.6			つぼ？	61
2	元札 I 层	銭貨	寛永通宝	孔径0.6	直徑2.4	—	正面「寛永通宝」		新寛永	61
3	元札 I 层	銅製品	三年式復動 信管	—	6.6	6.6			10穴?の刻印(正 面)、政之井、?二の刻印(下面)	61

16 茶櫓跡

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
4	茶櫓II層	銭貨	洪武通宝	孔径0.7	直徑2	—	正面「洪武通宝」			61
5	茶櫓I層	銭貨	寛永通宝	孔径0.5	直徑2.1	—	正面「寛永通宝」		新寛永	61
6	茶櫓I層	銅製品	煙管吸口	—	1.0	1.0				61
7	茶櫓I層	銃弾	エンフィー ルド	—	1.4	1.4				61
8	茶櫓I層	銃弾	エンフィー ルド	—	1.4	1.4				61

22 奉行所跡										
報告	遺構・位置(注記)	種類	器種	法量(推定)		調整・文様など		備考	コンテナ	
				口径	底径	器高	(内)			
1	KC西1土	瓦	鐵瓦	残存厚 14.7	残存幅 19.85	残存高 11・9	工具ナデ、ナデ	ナデ、ヘラによる 施文、ハケ目	鐵・輔部破片	7
2	KC西7土	瓦	鐵瓦	残存厚 4.9	残存幅 10.0	残存高 16.75	鐵錐压痕あり	ケズリ、 工具ケズリ		7

二の丸地区										
報告	遺構・位置(注記)	種類	器種	法量(推定)		調整・文様など		備考	コンテナ	
				口径	底径	器高	(内)			
1	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	坏	9.6	5.1	2.7	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り	油煙	60
2	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	坏	11.4	—	2.3	回転ナデ	回転ナデ、ケズリ		60
3	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	小皿	4.3	5.4	1.5	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り		60
4	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	小皿	(7.6)	(4.8)	1.4	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り	油煙	60
5	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	小皿	7.8	4.6	1.5	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り		60
6	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	小皿	(7.8)	5.0	1.2	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り		60
7	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	小皿	(7.6)	(5.0)	1.1	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り		60
8	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	小皿	7.2	(3.1)	1.5	回転ナデ	回転ナデ、底部糸切り	油煙	60
9	二の丸時習館跡 ゴミ穴	陶器	小丸輪	9.0	3.3	5.1	施釉、 鋼線軸上掛け	施釉	ロクロ成形、 透明軸、足ハマ底	58
10	二の丸時習館跡 ゴミ穴	陶器	小丸輪	(9.2)	3.3	5.2	施釉、 鋼線軸上掛け	施釉	ロクロ成形、 透明軸、足ハマ底	58
11	二の丸時習館跡 ゴミ穴	陶器	廣縁皿	(13.0)	4.6	3.7	施釉(鋼線軸)、 蛇の目釉剥ぎ	施釉	ロクロ成形、 透明軸	59
12	二の丸時習館跡 ゴミ穴	陶器	擂鉢	—	—	(6.9)	擂目	—	ロクロ成形か	60
13	二の丸時習館跡 ゴミ穴	陶器	土瓶蓋	5.4	—	3.5	—	施釉(掲軸)	ロクロ成形	60
14	二の丸時習館跡 ゴミ穴	陶器	土瓶蓋	(5.7)	—	3.1	—	施釉(掲軸)?	ロクロ成形	60
15	二の丸時習館跡 ゴミ穴	陶器	油差し	4.9	7.0	13.7	施釉	施釉	ロクロ成形、鉄軸	60
16	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	碗蓋	(9.0)	—	2.8	施釉、綠四方襷か	施釉、虹貫紋	ロクロ成形、 端反碗29とセット	58
17	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	広東碗	(10.3)	(5.1)	5.8	施釉	施釉、草文	ロクロ成形	58
18	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	丸形碗	(11.0)	(4.2)	4.9	施釉、蛇の目釉剥 ぎアルミニウム塗布	施釉、梅文	ロクロ成形	58
19	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	碗	(10.8)	(4.0)	6.0	施釉、綠波文	施釉、波文+千鳥	ロクロ成形	58
20	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	端反碗	(10.8)	4.0	5.9	施釉、見込寿字文	施釉、椿文	ロクロ成形	58
21	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	碗	9.2	—	5.6	施釉、見込丸文	施釉、丸文	ロクロ成形	58
22	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	端反碗	(10.3)	(4.2)	6.0	施釉、綠二重格子 文、見込波文?	施釉、二重格子文	ロクロ成形	58
23	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	端反碗	(10.5)	4.2	5.8	施釉、見込格子文、 蛇の目釉剥ぎ	施釉、格子文	ロクロ成形	58
24	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	端反碗	(10.2)	4.1	6.4	施釉、綠斜格子、 見込格子文か?	施釉、格子文	ロクロ成形	58
25	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器色絵?	小皿 (紅猪口)	(7.2)	(3.2)	3.3	施釉、金彩	施釉	ロクロ成形、金鏡	58

報告	造構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
26	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	(8.8)	3.8	4.6	施釉	施釉、梅文か	ロクロ成形	58
27	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	(10.2)	—	4.6	施釉、線四方捺か	施釉、釘貫紋	ロクロ成形	58
28	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	(10.1)	—	5.2	施釉、線四方捺か	施釉、釘貫紋	ロクロ成形	58
29	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	(4.8)	—	5.5	施釉	施釉、釘貫紋	ロクロ成形	58
30	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	10.1	—	—	施釉、線雷文、見込寿文	施釉、蘇鉄・よろけ織文	ロクロ成形	58
31	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	(11.1)	(4.5)	6.1	施釉、線織籠、見込波?	施釉、波文?	ロクロ成形	58
32	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	(9.8)	(4.1)	6.2	施釉、線雷文、見込松竹梅文	施釉、清朝瓶植物、幾何学文	ロクロ成形	58
33	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	(10.5)	(5.1)	5.9	施釉、線文様? 見込花	施釉、幾何学文に花	ロクロ成形	58
34	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	壺反碗	(9.6)	4.0	6.2	線波、見込文字?	施釉	ロクロ成形	58
35	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	小碗(猪口)	(4.6)	2.0	3.5	施釉	施釉、満に草文	ロクロ成形	58
36	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	10.4	4.9	2.7	施釉、ハリ目痕4ヶ所、釘貫紋	施釉、文字「二丸」 3足ハマ底	ロクロ成形、3足ハマ底	59
37	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	(10.7)	(5.3)	2.7	施釉、ハリ目底、釘貫紋	施釉	ロクロ成形、足ハマ底	59
38	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	10.2	4.7	2.9	施釉、ハリ目痕3ヶ所、釘貫紋	施釉、文字「二丸」 3足ハマ底	ロクロ成形、3足ハマ底	59
39	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	10.9	5.4	2.2	施釉、草花文?	施釉、花唐草文?	ロクロ成形	59
40	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	(13.5)	8.1	3.75	施釉、? + 千鳥	施釉	ロクロ成形、蛇の目彫高台、口紅	59
41	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	10.0	5.6	2.2	施釉、山水文	施釉	ロクロ成形、口紅	59
42	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	(10.0)	5.4	3.0	施釉、丸文	施釉	ロクロ成形	59
43	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	(9.0)	4.9	2.8	施釉、丸文	施釉、唐草文?	ロクロ成形	59
44	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	(8.6)	(5.0)	2.6	施釉、丸文、見込螺、金影	施釉、唐草文?	ロクロ成形、金螺	59
45	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	(11.1)	6.8	2.7	施釉、龍文	施釉、草花文?	ロクロ成形、口緑輪花型、底部外面成化半製、口紅	59
46	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	(9.1)	3.8	2.8	施釉、絞格子、見込格子文、蛇の目輪刺ぎ、重ね焼痕	施釉	ロクロ成形	58
47	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	皿	28.5	15.8	4.2	施釉、白鷺に樹木	施釉、ハリ底5ヶ所、花唐草文?	ロクロ成形	59
48	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	レング	—	—	1.6	施釉、花文	施釉	—	60
49	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器染付	合子蓋	(5)	—	1.4	施釉	施釉、人物に鳥	ロクロ成形、清朝風	60
50	二の丸時習館跡 ゴミ穴	磁器	瓶	—	5.7	(17.7)	—	施釉、とびかんな、施釉か	ロクロ成形	60
51	二の丸 炊事場 ゴミ穴	陶器	擂鉢				擂目	—	叩き成形?、鉄軸	61b
52	二の丸 炊事場 ゴミ穴	陶器	擂鉢				擂目	格子叩き	叩き成形、鉄軸	61a
53	二の丸 炊事場 ゴミ穴	陶器	擂鉢	(36.0)	(11.1)	13.7	擂目	施釉	叩き成形、鉄軸	61b
54	二の丸時習館横 1975.2.11	陶器	皿	(13.5)	4.0	4.2	鉄繪(草花)、祐土目	—	ロクロ成形、灰釉	56
55	二の丸時習館横 1975.2.11	陶器	碗	—	(4.8)	—	施釉、薺灰釉上掛け	施釉、底溝巻	ロクロ成形、灰釉、高台「田川内」	57
56	二の丸時習館横 1975.2.11	陶器	碗	(11.1)	4.3	6.1	施釉、蛇の目輪刺ぎ	施釉	ロクロ成形、鉄軸に薺灰釉上掛け	57

報告	造営・位置 (注記)	種類	器種	法 番(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口 径	底 径	器 高	(内)	(外)		
57	二の丸時習館横 1975.2.11	青磁	筒形碗	(8.6)	5.9	8.3	施釉	施釉	ロクロ成形、青磁 釉	57
68	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	碗	9.5	3.3	4.2	施釉	染付文字・施釉	ロクロ成形	57
59	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	端反碗	(10.2)	4.4	6.0	施釉、様四方押か、 中央溝文に松竹梅	施釉、六弁(青海 波二種) + 花・唐 草	ロクロ成形、64蓋とセット	57
60	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	端反碗	10.0	3.9	6.0	施釉、縁文、 見込丸文	施釉、花文	ロクロ成形	57
61	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	碗	10.5	4.0	6.3	施釉、縁格子、 見込草花文	施釉、格子文	ロクロ成形	57
62	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	端反碗	11.0	4.0	5.4	施釉、圓錐、見込 格子、蛇の目剥削 後アルミナ塗布	施釉、格子文	ロクロ成形	57
63	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	鉢	12.0	4.3	5.8	施釉、縁溝文、 中央竹文	施釉、源氏香	ロクロ成形、 3足ハマ瓶	57
64	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	碗蓋	9.6	—	3.2	施釉、縁四方押、 中央溝文に松竹梅	施釉、六弁(青海 波二種) + 花・唐 草	ロクロ成形、 59端反碗とセット	57
65	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	碗蓋	8.7	—	2.9	施釉、縁七宝文、 天井波文	施釉、花文(朝顔)、 見込?	ロクロ成形、 広東碗とセット	57
66	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	14.4	—	4.6	施釉、縁四方押、 朝顔、中央松竹梅	施釉、唐草文	ロクロ成形、 蛇目圓高台	56
67	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	(15.0)	8.8	4.9	施釉、縁文、 中央梅文か	施釉	ロクロ成形、 蛇ノ目圓高台	56
68	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	14.6	14.5	4.2	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、 輪花、3足ハマ瓶、 蛇ノ目圓高台	56
69	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	10.4	5.0	2.8	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、 輪花、3足ハマ瓶	56
70	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	10.5	4.8	2.8	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、 輪花、3足ハマ瓶	56
71	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	11.2	4.4	3.0	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、 輪花	56
72	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	11.2	4.4	3.0	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、 輪花、3足ハマ瓶	56
73	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	11.0	4.2	3.0	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、 輪花、3足ハマ瓶	56
74	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	皿	9.8	4.2	2.8	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、 輪花、3足ハマ瓶	56
75	二の丸時習館横 1975.2.11	青磁染付	皿	19.4	8.0	3.8	施釉、弦文、見込?、 蛇の目剥削ぎ	—	ロクロ成形、 青磁釉	56
76	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器色絵	香炉	(12.2)	8.5	7.5	施釉、色絵付け	施釉、鶴・梅	ロクロ成形、 切り高台	57
77	二の丸時習館横 1975.2.11	青磁	碗	(6.7)	(3.1)	5.0	施釉	施釉	ロクロ成形、 青磁釉	57
78	二の丸時習館横 1975.2.11	磁器染付	小壺	7.1	2.5	2.4	施釉	施釉、文様?	ロクロ成形、砂目	57
79	二の丸時習館横 1975.2.11	白磁	紅皿	5.2	1.7	1.8	施釉	施釉	貝殻状型押し成形	56
80	二の丸時習館横 1975.2.11	白磁	戸車	径3.7	幅0.9	3.7	—	施釉	ロクロ成形、 滑車部に透明釉	57
81	二の丸	你生土器	甕棺(壺棺)	(28.0)	—	(10.2)	ナデ	ヨコナデ、ナデ		83
82	二の丸	土師器	小皿	9	4.4	2.7	回転ナデ	回転ナデ、 底部糸切り離し	油煙	82
83	二の丸	土師器	小皿	(9.1)	(5.2)	2.3	回転ナデ	回転ナデ、 底部糸切り離し		82
84	二の丸	土師器	小皿	8.8	4.6	2.3	回転ナデ	回転ナデ、 底部糸切り離し		82
85	二の丸	土師器	小皿	7.2	5.0	1.4	回転ナデ	回転ナデ、 底部糸切り離し	油煙	82
86	二の丸	土師器	焼塙窓蓋	6.4	—	1.0	布目	ナデ		82
87	二の丸	土師器	焼塙窓蓋	6.2	—	1.1	布目	ナデ		82

報告	造構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
88	二の丸	土師器	燒塗壺蓋	(6.6)	—	1.1	布目	ナデ		82
89	二の丸時習館跡 ゴミ穴	土師器	燒塗壺蓋	7	—	1.2	布目	ナデ	表面に布目が見られる。側面には工具痕が見られる。	60
90	二の丸	土師器	燒塗壺	5	—	6.7	ナデ	ナデ、底部板状压痕	ハジケ著しい	82
91	二の丸	土師器	燒塗壺	(5.2)	—	6.5	ナデ	ナデ、指押え	クレープ状成形	82
92	二の丸	土師器	燒塗壺	(5.2)	(4.3)	6.8	ナデ	ナデ、		82
93	二の丸	土師器	燒塗壺	(5.2)	—	6.3	ナデ	ナデ	外面ハジケ(被然)	82
94	二の丸	陶器	小丸碗	9.4	3.3	4.5	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
95	二の丸	陶器	小丸碗	(9.1)	3.3	4.6	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
96	二の丸	陶器	小丸碗	8.9	3.1	4.5	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
97	二の丸	陶器	小丸碗	—	—	4.6	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
98	二の丸	陶器	小丸碗	8.8	3.0	4.6	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
99	二の丸	陶器	小丸碗	(9.0)	3.4	4.7	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
100	二の丸	陶器	小丸碗	8.4	3.2	4.9	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
101	二の丸	陶器	小丸碗	8.5	3.2	4.4	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
102	二の丸	陶器	小丸碗	9.1	3.1	4.7	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
103	二の丸	陶器	小丸碗	(9.4)	(3.3)	4.4	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	78
104	二の丸	陶器	小丸碗	(9.3)	3.4	5.5	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
105	二の丸	陶器	小丸碗	8.6	3.0	4.35	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
106	二の丸	陶器	小丸碗	(8.9)	3.2	4.5	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
107	二の丸	陶器	小丸碗	(8.5)	3.1	4.45	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	78
108	二の丸	陶器	小丸碗	(8.7)	3.3	4.6	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
109	二の丸	陶器	小丸碗	8.8	3.0	44	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
110	二の丸	陶器	小丸碗	8.8	3.1	4.3	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
111	二の丸	陶器	小丸碗	(8.9)	3.0	4.5	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
112	二の丸	陶器	小丸碗	(8.9)	(3.1)	4.2	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	78
113	二の丸	陶器	小丸碗	(8.8)	3.2	4.2	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	78
114	二の丸	陶器	小丸碗	(8.7)	2.9	4.4	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	78
115	二の丸	陶器	小丸碗	(8.9)	3.2	5.0	施釉	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	78
116	二の丸	陶器	小丸碗	(8.6)	3.0	4.7	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	78
117	二の丸	陶器	小丸碗	(8.4)	3.5	4.5	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	81
118	二の丸	陶器	小丸碗	(8.6)	(2.9)	4.9	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	81
119	二の丸	陶器	小丸碗	(9.0)	(3.3)	4.4	施釉、銅緑釉上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	81

報告	造構・位置 (注記)	種類	器種	法 畳 (推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口 径	底 径	器 高	(内)	(外)		
120	二の丸	陶器	小丸輪	(8.6)	3.2	4.4	施釉、鋼線輪上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	81
121	二の丸	陶器	小丸輪	(8.8)	3.7	4.4	施釉、鋼線輪上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	81
122	二の丸	陶器	小丸輪	(9.1)	(2.9)	4.9	施釉、鋼線輪上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	81
123	二の丸	陶器	小丸輪	(9.0)	3.0	4.5	施釉、鋼線輪上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	81
124	二の丸	陶器	小丸輪	(9.0)	(3.2)	5.0	施釉、鋼線輪上掛け	施釉	ロクロ成形、透明釉、足ハマ底	81
125	二の丸	陶器	小丸輪	(8.6)	3.0	4.7	施釉	施釉	ロクロ成形、透明釉、3足ハマ底	81
126	二の丸	陶器	碗	(8.7)	5.0	6.1	施釉	施釉、削出し高台	ロクロ成形、透明釉	81
127	二の丸	陶器	小碗	8.3	3.4	6.2	施釉	施釉、山水文	ロクロ成形、透明釉	78
128	二の丸	陶器	小碗	(8.7)	3.2	4.7	施釉、見込象嵌	施釉、象嵌	ロクロ成形、灰釉？、3足ハマ底	81
129	二の丸	陶器	小碗	(8.6)	(3.4)	4.1	施釉	施釉、象嵌	ロクロ成形、灰釉？、3足ハマ底	81
130	二の丸	陶器	小碗	(8.7)	3.2	4.7	施釉	施釉、象嵌	ロクロ成形、灰釉？、3足ハマ底	81
131	二の丸	陶器	小碗	8.6	3.4	3.9	施釉	施釉、象嵌	ロクロ成形、灰釉？、3足ハマ底	81
132	二の丸	陶器	小碗	(9.4)	3.0	4.7	施釉	施釉、象嵌	ロクロ成形、灰釉？、3足ハマ底	81
133	二の丸	陶器	小碗	(8.9)	3.2	4.2	施釉	施釉、象嵌	ロクロ成形、灰釉？、3足ハマ底	81
134	二の丸	陶器	皿	—	5.6	(4.9)	施釉、鉄輪と鋼線輪掛け分け、蛇の目輪剥ぎ	施釉(透明釉)、削出し高台	ロクロ成形	81
135	二の丸	陶器	火入	(10.8)	7.3	6.5		施釉(透明釉)	ロクロ成形	82
136	二の丸	陶器	甕蓋	(11.8)	—	(6.6)	ナデ、施釉	ナデ、施釉	粘土帯輪積み成形か、鉄輪	82
137	二の丸	陶器	土瓶蓋	4.5	—	3.9		施釉(鉄輪)	ロクロ成形	82
138	二の丸	陶器	土瓶蓋	6.2	—	3.2		施釉(鉄輪か鉄輪)	ロクロ成形	82
139	二の丸	陶器	土瓶蓋	6.8	—	3		施釉(鉄輪か鉄輪)	ロクロ成形	82
140	二の丸	陶器	土瓶	(6.7)	—	(7.5)	施釉	施釉、象嵌	ロクロ成形、灰釉？	82
141	二の丸	陶器	土瓶	7.5	6.1	8.2	施釉	ケズリ、白化粧土、染付、「真」、施釉	ロクロ成形、外施釉(白色釉)	83
142	二の丸	陶器	土瓶	8.1	6.9	13.8	施釉	ケズリ、施釉(白色釉)	ロクロ成形	83
143	二の丸	青磁染付	碗	(11.8)	3.4	6.6	施釉、縁文、見込龍文？	施釉、青磁釉、高台鋸、朱書蔚山町茨木	ロクロ成形、焼継ぎ	79
144	二の丸	磁器染付	碗	(11.7)	(4.4)	5.3	施釉、釉剥ぎ後アーミニア窓、見込五弁花	施釉、丸文	ロクロ成形	79
145	二の丸	磁器染付	端反碗	11.2	4.0	5.4	施釉、見込斜格子、アーミニア窓	施釉、砂目	ロクロ成形	79
146	二の丸	磁器染付	端反碗	(10.5)	(4.0)	6.0	施釉、縁二重格子、蛇の目輪剥ぎ後アーミニア窓	施釉、斜格子文	ロクロ成形	79
147	二の丸	磁器染付	端反碗	(11.2)	3.8	5.6	施釉、釉剥ぎ後アーミニア窓、見込斜格子	施釉、二重格子文	ロクロ成形	79
148	二の丸	磁器染付	端反碗	(10.5)	3.9	6.3	施釉、縁波文、見込草文	施釉、蓮子文に鶴	ロクロ成形	79
149	二の丸	磁器染付	端反碗	(10.7)	—	(5.4)	施釉、緑青海波文、見込草花文	施釉、蓮子文に蝶	ロクロ成形	79
150	二の丸	磁器染付	端反碗	(8.8)	(3.6)	4.1	施釉、見込斜格子文	施釉、格子文に花(梅)	ロクロ成形	79

報告	造構・位置 (注記)	種類	器種	法・量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
151	二の丸	磁器染付	壺反碗	(9.5)	3.6	5.7	施釉、見込岩波文?	施釉、動物 or 山水?	ロクロ成形	79
152	二の丸	磁器染付	壺反碗	(10.0)	(4.1)	5.7	施釉、線渦文、見込草花文	施釉、鐵線花文	ロクロ成形	79
153	二の丸	磁器染付	壺反碗	(10.3)	(4.3)	5.2	施釉、線渦文、見込文様?	施釉、花文	ロクロ成形	79
154	二の丸	磁器染付	壺反碗	(10.2)	(3.8)	5.7	施釉、線雷文、見込寿字文	施釉、藤鉄・幾何学文+よろけ織文、被通弁	ロクロ成形	79
155	二の丸	磁器染付	壺反碗	(10.3)	4.0	6.1	施釉、線雷文、山水文	施釉、山水文	ロクロ成形	79
156	二の丸	磁器染付	壺反碗	(9.9)	(3.9)	6.2	施釉、線斜格子文か、見込「米」鉢	施釉、釘抜紋	ロクロ成形	79
157	二の丸	磁器染付	壺反碗	(10.6)	(4.7)	6.1	施釉、線渦文、見込波文に松竹梅文	施釉、花唐草文に青面波文	ロクロ成形	79
158	二の丸	磁器染付	丸碗	(8.7)	(2.9)	4.0	施釉	施釉、花文(水仙)	ロクロ成形	79
159	二の丸	磁器染付	壺反碗	(8.8)	4.1	4.7	施釉、線文様不明	施釉、变形連弁文	ロクロ成形	79
160	二の丸	磁器染付	壺反碗	(8.4)	(3.3)	5.1	施釉	施釉、花文	ロクロ成形	79
161	二の丸	磁器染付	壺	7.4	2.7	3.7	施釉、波鳥文	施釉	ロクロ成形	83
162	二の丸 武家屋敷址	磁器染付	壺口	(7.2)	4.7	5.6	施釉	施釉、唐草文、高台「福」?	ロクロ成形	82
163	二の丸	磁器染付	八角鉢	(15.5)	7.3	7.7	施釉、芙蓉手写文、見込瓢箪に家配	施釉、文様不明	ロクロ型押し成形、蛇の目四形高台	82
164	二の丸	磁器染付	縹蓋	11.2	—	2.9	施釉、锯四方神文、天井松竹梅文	施釉、みじん唐草文	ロクロ成形	79
165	二の丸	磁器染付	皿	(13.6)	8.0	3.9	施釉、千鳥に鹿	施釉	ロクロ成形、口紅	80
166	二の丸	磁器染付	皿	(13.4)	8.0	3.8	施釉、千鳥に鹿	施釉	ロクロ成形、口紅	80
167	二の丸	磁器染付	皿	(13.4)	(8.1)	4.95	施釉、千鳥	施釉	ロクロ成形、蛇の目四形高台、口紅	80
168	二の丸	磁器染付	皿	(14.6)	(9.0)	4.6	施釉、線区画、内扇子・花・桜	施釉、唐草文	ロクロ成形、蛇の目四形高台	80
169	二の丸	磁器染付	皿	(14.7)	(8.8)	4.7	施釉、線区画、内扇子・花・桜	施釉、唐草文	ロクロ成形、蛇の目四形高台	80
170	二の丸	磁器染付	皿	10.5	4.1	3.0	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形	80
171	二の丸	磁器染付	皿	(10.4)	4.2	3.0	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、3足ハマ底	80
172	二の丸	磁器染付	皿	(10.9)	4.1	2.9	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、3足ハマ底	80
173	二の丸	磁器染付	皿	(10.1)	4.8	2.7	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、3足ハマ底	80
174	二の丸	磁器染付	皿	(10.0)	4.1	2.8	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、3足ハマ底	80
175	二の丸	磁器染付	皿	(10.2)	(4.0)	2.7	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形	80
176	二の丸	磁器染付	皿	10.0	4.8	2.8	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、3足ハマ底	80
177	二の丸	磁器染付	皿	10.1	4.1	2.5	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、付着物	80
178	二の丸	磁器染付	皿	(10.4)	(5.1)	2.65	施釉、釘抜文	施釉、文字「二丸」	ロクロ成形、3足ハマ底	80
179	二の丸	磁器染付	皿	(9.4)	5.4	(2.95)	施釉、菊文か	施釉、唐草文	ロクロ成形	80
180	二の丸	磁器染付	皿	(10.8)	(5.0)	2.6	施釉、花文	施釉、唐草文	ロクロ成形	80
181	二の丸	磁器染付	皿	9.0	3.0	2.75	施釉、丸文	施釉、唐草文	ロクロ成形	80
182	二の丸	磁器染付	皿	(10.9)	5.7	2.6	施釉、線雷文、丸文	施釉、唐草文	ロクロ成形、清朝風	80
183	二の丸	磁器染付	皿	(9.1)	4.3	2.7	施釉、山水文	施釉	ロクロ成形	80
184	二の丸	磁器染付	皿	(8.4)	4.0	2.4	施釉、山水文	施釉	ロクロ成形、3足ハマ底	80

報告	造構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
185	二の丸	磁器染付	皿	10.0	6.3	2.9	施釉、山水文	施釉、山水文(帆船)	ロクロ成形	80
186	二の丸	磁器染付	皿	(9.6)	3.9	3.4	施釉、緑模文、蛇の目駒ハギ後アルミナ塗布	施釉	ロクロ成形	80
187	二の丸	磁器色絵	皿	(9.0)	5.0	2.7	施釉、色絵、梅に鶴	施釉、唐草文	ロクロ成形	80
188	二の丸	磁器染付	香炉・火入	(9.6)	—	7.1	施釉、緑模文	施釉、丸文+蝶	ロクロ成形	82
189	二の丸	磁器色絵?	鉢用蓋	(11.2)	—	(3.5)	施釉	施釉、梅文	ロクロ成形	82
190	二の丸	赤絵か	皿	—	—	(4.8)	施釉、舟彌赤絵、金彩	施釉	ロクロ成形、高台碌砂	80
191	二の丸	磁器染付	大碗	16.3	5.6	7.3	染付後施釉「龜一」	施釉	ロクロ成形、4足はマ痕	83
192	二の丸	磁器染付	皿	15.6	6.9	5.4	施釉、見込「歩二三」	施釉	ロクロ成形、コバルト手書き	83
193	二の丸	白磁	碗蓋	9.1	—	2.7	施釉	施釉	ロクロ成形	83
194	二の丸	磁器染付	湯呑碗	6.5	3.6	7.3	施釉	施釉、「高等官食堂」銘、高台銘不明	泥漬流し込み成形?	83
195	熊本城 (1989.9.1)	陶器	擂鉢	28.6	9.65	11.0	回転ナデ、卸し口、施釉	回転ナデ、底回転糸切り離し、施釉		103
196	熊本城 (1989.9.1)	陶器	土瓶蓋	(6.2)	1.6	3.4	回転ナデ	施釉	施釉後装飾品貼付	101
197	熊本城 (1989.9.1)	陶器	土瓶蓋	5.4	2.0	3.3	回転ナデ	施釉		101
198	熊本城 (1989.9.1)	陶器	土瓶	7.3	4.3	8.8	回転ナデ、施釉	回転ヘラケズリ、施釉、煤付着	内側の注口取付部穴3ヶ所、脚部3足貼付、吊り手2個貼付。底部に煤付着	101
199	熊本城 (1989.9.1)	陶器	土瓶	7.6	5.2	10.0	回転ナデ、施釉	回転ナデ、回転ヘラケズリ、施釉	内側の注口取付部穴3ヶ所底部に煤付着、脚部三足貼付、吊り手2個貼付	101
200	熊本城 (1989.9.1)	瓦質土器	手培り?	19.2	16.3	21.7	丁寧な回転ナデ	貼り付け把手、高台、丁寧な回転ナデ、鄭描文、条痕	高台貼付け	105

33 二の丸御門跡

報告	造構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
1	二の丸御門址西側第六師団1980.8.12	白磁	鉢	(14.0)	(7.0)	6.6	施釉	施釉	泥漬流し込み成形	77
2	二の丸御門址西側第六師団1980.8.12	白磁	鉢	(14.0)	7.1	6.5	施釉	施釉	泥漬流し込み成形	77
3	二の丸御門址西側第六師団1980.8.12	磁器染付	鉢	(15.3)	(10.0)	3.8	施釉	施釉、陸軍五芒星、裏印「名陶」	泥漬流し込み成形、軍用食器	77
4	二の丸御門址西側第六師団1980.8.12	磁器染付	鉢	(15.8)	(10.0)	6.9	施釉	施釉、陸軍五芒星、裏印「名陶」	泥漬流し込み成形、軍用食器	77
5	二の丸御門址西側第六師団1980.8.12	磁器染付	鉢	(17.2)	(12.9)	4.5	施釉	施釉、陸軍五芒星、裏印「名陶」	泥漬流し込み成形、軍用食器	77

三の丸地区

(藤崎台)

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法 番(推定)			調整・文修など		備考	コン テナ
				口 番	底 番	器 高	(内)	(外)		
1	藤崎台神殿址 石列	磁器染付	碗	(9.4)	(3.2)	5.1	内底に菊花文	外面に二重網目文、高台内に溝幅		91
2	神殿址 罗列区	白磁	紅皿	4.0	1.1	1.2				91
3	礎列口 43.14	瓦	軒平瓦	(9.7)	—	(5.5)	唐草文		瓦当部に刻印「○間山新」キラ付着	91
4	藤崎台造跡神殿址 南の井戸(井・S)	陶器	片口鉢	(22.2)	8.2	11.3	白土刷毛塗り、 透明釉	白土塗付後、 焼き取り		85
5	藤崎台造跡神殿址 南の井戸(井・S)	白磁	碗蓋	(9.3)	(3.6)	3.1				85
6	藤崎台神殿址 北の井戸	陶器	碗または 深皿	—	4.3	(2.5)	内底に山水文	高台は露胎	京焼風陶器	84
7	藤崎宮神殿址 北の井戸(井口号 (口は2か?))	陶器	土瓶蓋	7.2	1.3	3.9		白土に透明釉		84
8	藤崎台神殿址 北の井戸	土師器	坪	(10.3)	7.5	2.4		外底は糸切り離し、 外周は静止ヘラケズリ	油壺の付着から灯 火具と考えられる	89
9	藤崎台神殿址 北の井戸	土師器	坪	(11.1)	7.8	2.3		外底は糸切り離し、 外周は静止ヘラケズリ		89
10	藤崎台神殿址 北の井戸	土師器	坪	12.0	8.7	2.3		外底は糸切り離し、 外周は静止ヘラケズリ		89
11	藤崎台神殿址 北の井戸 (図28-3)	土師器	坪	(8.4)	5.0	1.9		外底は糸切り離し	油壺の付着から灯 火具と考えられる	89
12	藤崎台神殿址 北の井戸	土師器	坪	(10.6)	(7.5)	2.5		外底は糸切り離し		89
13	藤崎台神殿址 北の井戸	磁器染付	碗	(9.9)	3.9	5.3	内底に菊花文	外面に二重網目文、 高台内に溝幅		84
14	藤崎台神殿址 北の井戸	磁器染付	碗	—	4.5	(4.3)		外面に龜甲文と蔓 草文		84
15	藤崎台神殿址 北の井戸	白磁	碗	(10.1)	4.2	5.4				84
16	藤崎宮神殿址 北の井戸 井口号 (口は2か?)	磁器染付	猪口	(8.2)	(6.0)	6.8		外面に松竹梅文、 高台内の角枠内に 溝幅		84
17	神殿址 神 井 N 4	磁器染付	碗	11.15	—	(5.8)	見込みに手書き五 弁花	外面に花唐草文、 高台内の角枠内に 溝幅	34-93とセットの 可能性大	84
18	神殿址 神 井 N 8	陶器	蓋	10.4	—	2.2		外面に松文		84
19	神殿址 神 井 N 9	磁器染付	皿	(13.6)	(7.9)	3.9	内面に若松文	外面に唐草文、高 台内の角枠内に溝 幅	口縁は輪花状	84
20	神殿址 神 井 N10	磁器染付	皿	(9.8)	(5.2)	2.1	内側面に草花文、 内底に手書き五弁 花	外面に唐草文、高 台内の角枠内に溝 幅		84
21	神殿址 井 N	陶器	皿	9.1	4.0	2.8	内面は針彫りで蘿 蔓文、その後に透 明釉	内外面は白土刷毛 塗り(春刷毛目) 下上位は白土浸け 焼け	口縁は輪花状	84
22	神殿址 神 井	白磁	皿	17.3	8.1	5.8	型打彫刻文にて如 意頭文と唐草文を 意匠化した文様		口縁は輪花状	85
23	神殿址 神 井 N	磁器染付	皿	(13.9)	(7.7)	4.0	内面に若松文	外面に唐草文、高 台内の角枠内に溝 幅	口縁は輪花状	84
24	神殿址 井 N	磁器染付	猪口	(9.6)	(7.1)	6.2		地文は篆文で丸枠 内に傳棚		84
25	藤崎台神殿址 井 Nの南 PA	瓦	軒丸瓦	(15.1)	—	(3.1)	瓦当文様は九曜紋		丸瓦部分は欠損 カキヤブリ	85

報告	遺跡・位置 (注記)	種類	器種	法 異 (推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
26	井戸周辺No.3P	陶器	皿	(13.0)	3.6	3.5	内面は網目状、内底は蛇ノ目軸剥ぎ	灰釉		117
27	井戸周辺No.1 11 井戸周辺、No.7接合不能	陶器	土瓶蓋	10.3	4.4	2.1		鉄釉		117
28	井戸周辺No.3 井戸周辺	陶器	蓋	4.3	—	4.0		黒灰釉		117
29	井戸周辺No.3P	陶器	鉢	33.8	21.4	11.8	最終的には回転ナマダだが當て具痕跡は明確でない	灰釉		117
30	井戸周辺No.3P	磁器 赤絵	皿	—	—	(2.9)	文様は不明	体部下位には砂が付着		117
31	井戸周辺No.3P	磁器染付	碗	(9.1)	(3.9)	4.8		岩と草の文様		117
32	井戸周辺No.3 井戸周辺	磁器染付	端反碗	(10.1)	3.5	5.6		草花文		117
33	井戸周辺No.3P	磁器染付	広東碗	(10.8)	(5.7)	6.1	岩波文	菊文+達山文		117
34	井戸周辺No.3P	磁器染付	端反碗蓋	(9.0)	(3.8)	2.7	花文	草文		117
35	井戸周辺No.3P	白磁	皿	(14.2)	(9.3)	3.9		蛇の目回形高台		117
36	井戸周辺No.3 井戸周辺	磁器染付	皿	(12.9)	7.2	3.4	海浜風景		輪花皿、足付ハマ底、蛇の目回形高台	117
37	藤崎台神殿址 P11号	白磁	碗		(5.7)	(3.3)			大宰府分類の純IV類	87
38	藤崎台神殿址 P11号	土師器	小皿	(7.6)	(4.2)	1.5			口縁の内外面に油煙	87
39	藤崎台神殿址 P11号	白磁	碗	(8.1)	(2.8)	5.0				87
40	神殿址 P に 了	磁器染付	碗	(37.2)	—	13.8	樹木と桜	菊文	蛇の目回形高台、化学コバルト	87
41	藤崎台神殿址 P る	陶器	皿	12.3	4.5	4.0	蛇の目軸剥ぎ		内外面に灰釉	87
42	藤崎台神殿址 P	白磁	碗	(8.0)	(3.4)	4.1			口縁唇部に口鶴	87
43	神殿址 神 る 了	磁器染付	皿	(10.3)	(6.1)	2.8	楼閣山水文	花文、高台内に変形「福」字銘	口唇部に口鶴	89
44	藤崎台神殿址 P る	磁器染付	皿	(12.6)	7.0	3.5	器物文 (本・扇)		輪花皿、足ハマ底3ヶ所、蛇の目回形高台	87
45	神殿址 神 る 了	磁器染付	皿	(20.3)	(11.4)	2.7	東屋山水文	高台内にはハリ痕跡	輪花皿	89
46	藤崎台神殿址 P る	磁器染付	鉢	(15.4)	6.1	7.3	文様不明 (流水を表現か)	菊文		87
47	藤崎台遺跡神殿址 Pろ号	陶器	皿	(11.6)	4.5	3.2	胎土目		内外面に灰釉	87
48	藤崎台遺跡神殿址 Pろ号	陶器	碗または 深皿	(11.8)	(4.2)	4.4	内底に山水文 (長須)		京焼楓陶器	87
49	藤崎台遺跡神殿址 Pろ号	白磁	碗	(10.2)	(3.7)	4.5	施釉			87
50	藤崎台遺跡神殿址 Pろ号	青磁染付	歌碗	(12.8)	(4.7)	6.0	内口縁は四方陣文、 内側面は草花文、 内側内に牡丹文か、 内底は不明	高台内は角棒内に 満福		87
51	藤崎台神殿址 (注 記なし) Pい号 かPろ号どちらか 不明	白磁	碗	(8.8)	(3.5)	5.0			口唇部に口鶴	87
52	神殿址 神殿址了	陶器	灰落し	—	5.7	(6.8)		軸下彩 (呂須)、上 縁とともに飯文を描 き、上繪は褐色	キセルで叩いたた め。口縁が細かく 欠けている	88
53	藤崎台遺跡神殿址 北東区1号	土師器	小皿	(8.5)	(5.4)	1.95			外底は系切り離し	89
54	藤崎台遺跡神殿址 北東区1号	磁器染付	碗	9.7	4.2	5.5		雪輪草花文、高台 内には略化した 「太明」が書かれ る		86

報告	遺構・位置 (記)	種類	器種	法・量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	高	(内)	(外)		
55	藤崎台遺跡神殿址 北東区1号	磁器染付	小碗	7.7	2.9	3.8		八ツ橋、草花文		86
56	藤崎台遺跡神殿址 北東区1号	磁器染付	碗	10.1	3.8	4.9		草花文		86
57	藤崎台遺跡神殿址 北東区1号	磁器染付	皿	19.5	10.1	4.1	内側面に草花文、 内底に蛇ノ目地剥 ぎ、見込みにコシ ニヤク五弁花			86
58	藤崎台遺跡神殿址 北東P4	磁器染付	端反碗蓋	9.2	3.5	2.9	内見込みに岩波文	格子文		86
59	藤崎台遺跡神殿址 北東P4	磁器染付	端反碗蓋	(8.5)	—	2.9	口縁に弧文、見込 みには龟	鶴と桟上フリ松		86
60	藤崎台遺跡神殿址 北東P4	磁器染付	小丸碗	6.6	2.6	5.5		格子文		86
61	藤崎台遺跡神殿址 北東P4	磁器染付	小丸碗	(6.4)	(2.7)	5.2		織文		86
62	藤崎台遺跡神殿址 北東P4	磁器染付	皿	18.5	11.3	3.1	内側面は花唐草で 窓に竹、内底は手 描き五弁花	外面に唐草文、底 面にハリ痕跡、高 台内に「太明年製」	足ハマ底	86
63	藤崎台遺跡神殿址 北東P4	白磁	菊形皿	(13.6)	(3.6)	3.8		蛇ノ目圓形高台		86
64	藤崎台遺跡神殿址 北東P4	磁器染付	皿	(12.3)	(6.8)	3.6	内底には二重格子 と幅縁		蛇ノ目圓形高台、 足ハマ底	86
65	藤崎台遺跡神殿址 北東P4	磁器染付	鉢	(14.2)	(7.9)	4.8	内側面には松と草 と墨書きによる宝 文	唐草文、高台内の 角棒内に変形字銘		86
66	藤崎台西北辺 1960.3.5	陶器	土瓶蓋 (落とし蓋)	7.3	3.0	2.6		轟灰軸		84
67	藤崎台西北辺 1960.3.5	青磁	小碗	6.4	3.2	4.9				84
68	藤崎台西北辺 1960.3.5	磁器染付	端反碗	10.2	3.8	5.7	格子文	格子文		84
69	藤崎台西北 1960.3.5	磁器染付	端反碗	10.3	3.7	6.3	内底には略化した 花文、内面口縁は波 紋	波千鳥文		84
70	藤崎台藤崎宮経藏 址2 1960.3月	瓦	軒丸瓦	16.3	—	(5.5)	三巴文(左巻き) 珠文は9個			91
71	藤崎台遺跡神殿址	土師器	小皿	(5.8)	(3.4)	1.2			油煙の付着から灯 火具と考えられる、 外底は糸切り離し	89
72	藤崎台遺跡神殿址	土師器	小皿	(7.0)	(3.6)	1.4			外底は糸切り離し	89
73	藤崎台遺跡神殿址	土師器	小皿	(7.2)	(3.9)	1.2			外底は糸切り離し	89
74	藤崎台遺跡神殿址	土師器	小皿	(7.5)	(4.4)	1.4			外底は糸切り離し	89
75	藤崎台神殿址 東 三	土師器	坪	7.3	4.2	1.8	内底に静止ナデが 施されない			86
76	藤崎台遺跡神殿址	土師器	坪	(8.1)	(4.0)	1.6	内底に静止ナデが 施されない		油煙の付着から灯 火具と考えられる	89
77	藤崎台遺跡神殿址	土師器	坪	(9.2)	4.0	2.2				89
78	藤崎台遺跡神殿址	土師器	坪	(10.1)	(7.0)	2.1		外周は静止ヘラケ ズリ		89
79	藤崎台宮址 1960.3月	土師器	坪	9.8	4.3	2.1			油煙の付着から灯 火具と考えられる	89
80	藤崎台遺跡神殿址	土師器	坪	(10.0)	(6.0)	1.7		外周は静止ヘラケ ズリ	油煙の付着から灯 火具と考えられる	89
81	藤崎台遺跡神殿址	土師器	坪	(9.2)	(6.6)	2.0		外周は静止ヘラケ ズリ	油煙の付着から灯 火具と考えられる	89
82	藤崎台遺跡神殿址	土師器	坪	(10.3)	(5.6)	1.8				89
83	藤崎台遺跡神殿址	土師器	坪	(10.5)	(6.6)	2.2	布を使ったとみら れる1方向のナデ が観察できる		油煙の付着から灯 火具と考えられる	89
84	藤崎台宮址 1960.3月	土師器	坪	(10.4)	6.9	2.1		外周は静止ヘラケ ズリ		89
85	藤崎台遺跡神殿址	土師器	坪	(11.4)	(7.9)	2.2		外周は静止ヘラケ ズリ	油煙の付着から灯 火具と考えられる	89

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コンテナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
86	藤崎台遺跡神殿址	土師器	环	(11.3)	7.5	1.6		外周は静止ヘラケズリ		89
87	藤崎台遺跡神殿址	土師器	环	(13.0)	(9.0)	2.4				89
88	藤崎台神殿址 3月14日 他と同じ発掘調査	陶器	碗	—	4.7	(1.3)		透明釉、高台内印銘「松永吉」	京焼風陶器	88
89	神殿址	陶器	大鉢	31.9	14.1	16.0	上位に白土刷毛塗りと灰釉、粘土目8ヶ所	上位に白土刷毛塗りと灰釉	輪花大鉢、高台外側面を斜めに削るのは18C以降の特徴	90
90	熊本県筑野川現場出土 1960.4.9 西山中学生徒持参	陶器	土瓶	7.1	5.2	10.2		上位に灰釉、下位にススの付着		85
91	藤崎台神殿址	磁器染付	小鉢	(6.7)	(3.0)	4.4		化学コバルトで菖蒲を描く		88
92	藤崎台神殿址	磁器染付	小鉢	(6.5)	2.85	4.3		化学コバルトで菖蒲を描く		88
93	藤崎台神殿址	磁器染付	小鉢	(6.4)	2.9	4.4		化学コバルトで菖蒲を描く		88
94	神殿址	磁器染付	碗蓋	10.0	—	2.9	見込みに五弁花(手書き)	花唐草文、つまみの見込み角棒内に溝福	34-17とセットの可能性大	88
95	藤崎台神殿址	磁器染付	碗蓋	(9.8)	—	2.9	内面の口縁に四方博文、見込みに五弁花(手書き)	草文		88
96	藤崎台神殿址	磁器染付	端反碗蓋	9.1	—	2.9	内面口縁に略化した西方博文、内面見込みに花文	捺花文、つまみ見込みの角棒内には変形字跡		88
97	藤崎台神殿址	青磁	碗蓋	9.2	—	2.6				88
98	神殿址	磁器染付	瓶	(3.9)	(8.4)	17.8		篆文、草花文		88
99	藤崎台宮址 1960.3月 埋土	青磁	鉢	(6.4)	(5.6)	7.7		施釉、陽刻の印文(文様不明)、高台内にゴム印「有8」		92
100	藤崎台宮址 壬土100 1960.3月	瓦	軒丸瓦	15.3	—	(3.7)	三巴文(右巻き) 珠文は16個		結合部にカキヤブリ	92
101	藤崎台宮址 1960.3月	瓦	軒平瓦	(15.8)	—	(11.4)	蛇の目紋		キラコ付着、丸瓦部凸面丸枠内に「七」の刻印、鉄継ビキ痕	93
102	藤崎宮址壬土瓦 1960.3月	瓦	軒平瓦	(11.7)	—	(8.1)	蓮華文、唐草文			92
103	壬土106藤崎宮址	瓦	軒平瓦	(17.4)	—	(8.2)	蓮華文、唐草文			92
104	藤崎宮址	瓦	軒平瓦	(14.6)	—	(10.0)	蓮華文、唐草文			93
105	藤崎宮址壬土瓦 1960.3月	瓦	軒目板桟瓦	(24.3)	—	(20.2)	三巴文、唐草文		瓦当部貼り付け	92
106	藤崎台藤崎宮址 1964.3月	瓦	道具瓦	(14.5)	—	(4.4)	円文		指跡あり 結合部にカキヤブリ	93

35 二の丸御屋形跡(熊本博物館)

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コンテナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
1	側溝付近 I-1 (1973.8.7)	灰釉陶器	徳利	—	—	—			胸部最大径が12.5cmと大きく、八合徳利と考えられる	S2
2	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	碗	(8.0)	(3.4)	5.1	内底は五弁花文を手書き	外面は楓文		S2
3	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	小坪	(6.0)	2.6	3.5	内底に花文			S2
4	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	小丸碗	(6.2)	(3.4)	5.1		外面に蓮華と蝶2頭		S2
5	側溝付近 I-1 (1973.8.7) (I-1は棚番号)	磁器染付	蓋付鉢	(8.9)	—	5.1	内面口縁には輪剥ぎ	外面に宝文		S2

報告	造構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
6	三の丸 AT 1973.8.2~8.6 約1m下か	磁器染付	碗	(9.2)	(3.8)	5.8		高台内鉢款「波25」 手描きカゴム印か は不明	外面は化学コバルトで文様を描き、 次に墨書きで線縁を描き輪花状にする手法	54
7	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	盖	(10.4)	—	2.7	内面口縁には四方 神文 内面見込みには草 花文	外面に波・草・花 文		52
8	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	端反碗蓋	(7.6)	3.2	2.3	内面の口縁に連弧 文、見込みには岩 波文	外面に鶴と太湖石		52
9	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	端反碗蓋	(9.2)	—	3.0	内面見込みに軸の 発色が淡く不明瞭 な文様	外面に草・花文		52
10	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	皿	(13.6)	(5.4)	3.8	内底は雄な蛇ノ目 輪剥ぎ 内面体部は草花文 内面見込みは墨化 した花纹		文様はいざれも化 学コバルト	52
11	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	皿	—	8.5	3.4	内面体部は花文、 見込みには墨化 した海浜風景	外面に唐草文	蛇ノ目圓形高台	52
12	三の丸 AT 1973.8.2~8.6 約1m下か	磁器染付	皿	13.6	8.4	4.0	内面見込みには松竹 梅円形文で体部は 花文	外面は菊文	蛇ノ目圓形高台、 文様は型紙描りで 化学コバルト使用	54
13	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	蓋	(12.0)	—	2.3		外面の文様は化学 コバルトで牡丹文 ・梅文		52
14	三の丸 A-2	磁器色絵	小坪	(5.5)	2.1	2.3		外面に羽子板と羽 根		54
15	側溝付近 (1973.8.7)	磁器染付	合子蓋	5.4	—	1.0		外面に宝と対舟		52
16	側溝付近 (1973.8.7)	磁器白磁	合子身	(4.8)	—	1.4				52
17	714 ニノ丸址、n. トレント鉢本植敷 (側溝付近 (1973.8.7)	石製品	鉢型	—	2.0	3.0	錦(かん)の鉢型 「元治元年」銘あり		革筋などの引出に つける金属製の 取っ手。1864年製 か。	55
18	伝役屋敷(院長官 舎南側排水溝付 近)	陶器	端反碗	(10.2)	3.5	6.1		外面は白象嵌で九 曜紋 透明釉	松尾焼の特徴(象 嵌は口文中に白土を 埋めるが、雜で圓 みがある)	49
19	伝役屋敷 (1973.8.10)	陶器	擂鉢	(2.1)	—	5.4		鉢輪	鳥の巣入れと考え られる	49
20	伝役屋敷 (院長官舎南側排 水溝付近)	陶器	蓋小甕	(4.7)	—	—			灰釉で長石が多い ことから信楽焼の 可能性が高い	49
21	伝役屋敷 (院長官舎南側排 水溝付近)	陶器	鉢	(4.8)	—	—		灰釉に御絞輪タン バンを施す	手水鉢と考えられ る	49
22	伝役屋敷 (1973.8.10)	磁器白磁	碗	(6.7)	(16.5)	—				49
23	伝役屋敷 (院長官舎南側排 水溝付近)	磁器青花	皿	82.6	—	—	内面の口縁に青海 波文			49
24	伝役屋敷 (院長官舎南側排 水溝付近)	磁器染付	端反碗	4.2	(9.0)	(4.2)	内面の口縁に雷文		外面は花唐草文、高 台に櫻文、高台内に 手書きの款款「乾」 (乾隆帝の乾の篆書)	49
25	伝役屋敷 (院長官舎南側排 水溝付近)	磁器染付	碗	(4.6)	(14.4)	—			外面には化学コバ ルトを用いて櫻文	49
26	伝役屋敷 (院長官舎南側排 水溝付近)	磁器染付	小丸碗	5.1	(6.2)	2.9		外面には丸文		49
27	伝役屋敷 (院長官舎南側排 水溝付近) 博物館発掘調査	磁器染付	輪花皿	(2.3)	—	(9.6)	内面に松文	蛇ノ目圓形高台で、 高台内に字銘がある が彌りが悪く不明	後継がみられる	49

報告	造営・位置 (注記)	種類	器種	法 異(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口 径	底 径	器 高	(内)	(外)		
28	伝役屋敷 (1973.8.10)	磁器染付	皿	3.8	(13.2)	4.8	内面底部に松や遠山、内底に蛇ノ目 釉剥ぎ、内底には 略化した草花文		いわゆる化学コバルトで描く	49
29	伝役屋敷 (院長官舎南側排水溝付近)	磁器白磁	皿	(2.6)	(5.0)	—	内底は粗い蛇ノ目 釉剥ぎ			49
30	伝役屋敷 (院長官舎南側排水溝付近)	磁器染付	皿	2.5	(22.4)	(14.6)			化学コバルトで 「熊」。これは「熊 本舎台」と考えら れる	49
31	伝役屋敷 (1973.8.10)	磁器染付	蓋	(2.9)	(10.3)	—			外面には熨斗形の 把手が付く、縁と 後文か	49
32	伝役屋敷 (院長官舎南側排水溝付近) 伝役屋敷 (看護学部裏側 ト)	磁器色絵	筒 形 瓶	(4.7)	—	4.0			外面上位には草花 文、下位には柳形蓮弁 文染付	49
33	二ノ丸 c-2 トレ ンチ 48.8.11	瓦	軒目板桟瓦	29.4	—	(20.6)	瓦当丸部九曜紋 瓦当平部九曜紋、 清草文		キラコ付着、カキ ヤブリ	55
34	二ノ丸 e-2 トレ ンチ 48.8.26	瓦	軒丸瓦	15.5	—	(9.6)	蛇ノ目紋		脚部線カマキリ、 布目が見られる	55
35	三の丸連隊本部前 C-2 73.8.26	白磁	碗	—	6.1	2.1			大宰府陶IV類	50
36	三の丸連隊本部前 C-2 73.8.26	白磁	皿	—	(5.6)	3.1			高台が太い(元様 式である)	50
37	三の丸連隊本部前 C-2 73.8.26	陶器	小壺		(7.6)	4.2		外面に灰釉 糸切り底		50
38	連隊本部前	陶器	碗		(4.2)	5.2	内底に蛇ノ目釉剥 ぎ			51
39	連隊本部前	陶器	皿	—	6.2 +K439	4.5	内側面は白土刷毛塗 りに透明釉、内底 には蛇ノ目釉剥 ぎに鉄塗付、砂 目	透明釉		51
40	連隊本部前	陶器	皿	—	(7.0)	5.1	内面は白土刷毛塗 りに透明釉、内底 には蛇ノ目釉剥 ぎ			51
41	三の丸連隊 1973.8.15	陶器	皿	(19.1)	(7.4)	7.5	内面は白土刷毛目 に鉄釉、内底は蛇 ノ目釉剥ぎ	高台下位にアルミ ナ付着		50
42	連隊本部前	軟質陶器	脚付鉢	(13.4)		10.1		体部下位に真須で 河骨文		51
43	三の丸連隊本部前 C-2 73.8.26	陶器	土瓶蓋	—	(5.2)	3.3		外面に鋼線釉		50
44	連隊本部前	陶器	土瓶蓋	—	6.1	3.3		外面に灰釉 糸切り底		51
45	連隊本部前 I-1 (I-1 は番号)	陶器	半胸甌	(28.7)	—	(22.7)		外面には二彩手 (鉄釉と鋼線釉) で松文を描く		51
46	なし 三の丸連隊 本部	土器質	焜炉目皿	7.7	—	7.75				50
47	三の丸連隊本部前 C-2 73.8.26	磁器青花	皿	3.1	(9/8)	2.8	内底に蓮花文	外面の口縁に波瀬 文、体部に芭蕉葉 文	基筒底	50
48	三の丸連隊本部前 C-2 73.8.26	磁器青花	碗	—	(5.0)	1.8	内底に蛟龍文		底部は體明心で少 し盛り上がる	50
49	三の丸連隊本部前 校庭樹樋 1973.8.15	磁器染付	小壺	(9.5)	(3.4)	5.0		外面に根上がり松 文		50
50	三の丸連隊本部前 二の丸 C-3	磁器染付	小壺	(7.1)	2.6	3.7		外面に俊文		50
51	連隊本部前	磁器染付	皿	(10.6)	(7.0)	2.3	内面に水波風景	外面に芭蕉葉文、 高台内に「大明・ ・」の文字	成形は糸切り細工	51

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コンテナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
52	三の丸連隊本部前 C-2 73.8.26	磁器染付	香炉	8.6	5.4	5.0		外面に連山文		50
53	三の丸連隊本部前 C-2 73.8.26	白磁	紅皿	4.6	1.4	1.4		外面の施釉は口縁付近のみで難		50
54	看護学校運動場 I-1 (I-1は番号)	陶器	鉢	(14.8)	(6.3)	6.6	内外面とも白土刷毛塗りに透明釉、内底は蛇ノ目釉剥ぎ			53
55	看護学校運動場	陶器	土瓶蓋	(8.8)	3.2	1.9	内面は露胎	白土塗りに透明釉、呉須で略化した花文		53
56	看護学校運動場 I-1	陶器	擂鉢	(37.2)						53
57	看護学校運動場 I-1	白磁	小坪	—	(6.4)	3.8				53
58	看護学校運動場 I-2	磁器染付	小坪	(6.6)	(2.3)	2.85		外面に蓬莱山 高台内の字鎬は不明		53
59	看護学校運動場	磁器染付	端反碗	(9.4)	(3.6)	6.3	内底は松竹梅円形文	外面は地文として 小花文、枠内に花文や文机と思われる器物	化学コバルトによ り型紙捺り	53
60	看護学校運動場 I-1	磁器染付	瓶蓋	(4.2)	—	—	三足ハマ瓶	外面に蕉文		53
61	看護学校運動場	磁器染付	大皿	(22.4)	13.5	3.4	内底に連続弧文・ 花文、見込に「永 楽年製」	外面上位に連続弧文・ 花文・花文染付、施 釉、釉剥ぎ	「赤壁の戦い」の 場面を描く。焼襷 底あり、「美作文 三口」銘	53
62	看護学校運動場 I-2 (I-2は 番号)	白磁	小坪	(4.7)	(2.0)	2.65		外面は菊花状に型 打、高台周囲の粗 曲が緩やか(古式の 様相)		53
63	看護学校運動場 I-1	磁器染付	小坪	—	(1.5)	—		外面に草花文		53
64	看護学校運動場 I-2	磁器染付	角鉢	15.2	8.2	8.6	内底と内口縁に両 千鳥	外面には波瀾文・ 溝・鳥 高台側面に矢来短 文	型打成形	53
65	看護学校運動場 博物館発掘	磁器色絵	大形壺蓋	—	—	—				53
66	715 看護学校運動 場「カン・ウン」	石製品	基石	—	0.8	2.1				53

37 二の丸御星形跡

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法量(推定)			調整・文様など		備考	コンテナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
1	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	白磁	瓶	—	(6.9)	(2.5)	施釉	施釉	ロクロ成形、透明 釉、大宰府IV類	70
2	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	白磁	瓶	—	—	2.3	施釉、櫛目文	施釉	ロクロ成形、大宰 府V-4類	70
3	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	陶器	瓶	11.2	—	7.1	施釉	施釉(鋼釉)	ロクロ成形、透明 釉、底部に砂目積 み痕跡	70
4	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	陶器	瓶	(13.0)	—	3.4	施釉、 蛇の目釉剥ぎ	施釉	ロクロ成形、薺灰釉	70
5	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	陶器	瓶	(10.5)	(3.8)	6.1	施釉	施釉(灰釉)	ロクロ成形、鐵釉、 足ハマ痕	70
6	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	陶器	瓶	(3.8)	(4.0)	6.4	施釉	施釉	ロクロ成形、薺釉	70
7	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	陶器	小丸瓶	(6.9)	(3.2)	5.6	施釉	施釉(鋼釉)	ロクロ成形、 透明釉	70

報告	造営・位置 (注記)	種類	器種	法 畳 (推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
8	№97 熊本城二の丸 三の丸一括 昭和54.3.15～6.30調査分	陶器	角皿か	-	-	-	施釉、見込み隙刻、草文捺付け	施釉	ロクロ成形、長石釉	71
9	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	陶器	皿	(16.6)	(5.6)	5.0	施釉、刷毛目文様、蛇の目釉剥ぎ後鉄錆塗付	施釉	ロクロ成形、透明釉	71
10	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	陶器	皿	(9.3)	(3.4)	2.5	象嵌、施釉	施釉	ロクロ成形、透明釉	71
11	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	陶器	皿	(8.8)	(3.5)	2.0	象嵌、施釉、花文	施釉	ロクロ成形、透明釉	71
12	二の丸 三の丸 (昭和4.3.15～6.30調査分)	陶器	土瓶蓋	(8.1)	-	2.2	無釉	施釉、白化粧、刷毛目塗り	ロクロ成形、土灰釉	73
13	二の丸 三の丸 (昭和4.3.15～6.30調査分)	陶器	土瓶蓋	(8.6)	2.9	2.7	無釉	施釉 (ナマコ釉)、底部系切り	ロクロ成形	73
14	二の丸 三の丸 (昭和4.3.15～6.30調査分)	陶器	急須蓋	3.3	-	2.9	無釉	施釉 (波紋、釉不明)	ロクロ成形	73
15	№56 二の丸・三の丸 (昭和4.3.15～6.30調査分)	陶器	蓋	-	-	-	ナデ、布目	ナデ、指彌正痕	型成形、飾り (動物) 貼付け、素焼き	73
16	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分 №69	焼結陶器	擂鉢	-	-	(7.9)	回転ナデ、擂り目	回転ナデ		74
17	№56 二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	陶器	擂鉢	(37.1)	(12.6)	14.0	回転ナデ、擂目、施釉	回転ナデ、高台貼付け、施釉	鉄釉、見込に重ね底痕あり	74
18	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	陶器	片口鉢	(23.0)	(9.8)	(10.8)	穿孔、白化粧土、施釉	注口貼付、白土刷毛目、施釉、蓋みあり	ロクロ成形、鉄釉	75
19	二の丸・三の丸 (昭和4.3.15～6.30調査分)	陶器	杓子	(8.1)	(3.9)	5.7	染付 (鉄釉團線)、施釉	施釉	ロクロ成形、透明釉、取っ手に穿孔あり	73
20	№56 二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	陶器	植木鉢	(33.7)	-	(24.0)	回転ナデ、施釉、透明釉？、印刻 (象嵌)、白化粧	回転ナデ、印刻 (象嵌)	ロクロ成形、透明釉	75
21	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分 駐車場下西側土中	陶器	壺	(12.6)	-	(31.8)	當て貝底、回転ナデ、施釉	タタキ目、回転ナデ、施釉	タタキ成形、ロタロと併用、鉄釉	75
22	二の丸 三の丸 (昭和4.3.15～6.30調査分)	陶器	行平鍋	(19.3)	(8.8)	(8.5)	施釉、彩色	注口貼付、施釉、飛び施、鉄壁	ロクロ成形、内外塗布	73
23	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	磁器染付	碗蓋	(10.0)	(5.6)	3.0	施釉、天井花文	施釉、花文	ロクロ成形、清朝風	73
24	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	磁器染付	碗蓋	9.0	-	2.6	染付、施釉 緑雷文、天井松竹梅文	染付、施釉、花文組合せ	ロクロ成形、端反碗とセット	70
25	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	磁器染付	碗蓋	(8.8)	-	2.7	施釉 緑丸文、天井松竹梅文	施釉、丸文	ロクロ成形、印刷手、端反碗とセット	73
26	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	白磁	碗蓋	-	-	1.9	施釉	施釉	ロクロ成形、陸軍用、瓶97とセット	73
27	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	磁器染付	端反碗	(8.2)	4.0	3.9	染付、施釉、見込若松文	染付、施釉、若松文	ロクロ成形	70
28	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30調査分	磁器染付	端反碗	(10.4)	3.9	5.7	染付、施釉 緑雷文、見込松竹梅文	染付、施釉、龍文	ロクロ成形	70

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法・量(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
29	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	端反碗	(10.4)	(4.4)	6.1	染付、施釉、 見込文様不明	染付、施釉、草文	ロクロ成形、 盤付に砂付着	70
30	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	端反碗	(10.6)	(4.2)	5.7	染付、施釉、綠彩 文、見込松竹梅文	染付、施釉、草文組合せ	ロクロ成形	70
31	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	白磁	端反碗	(8.2)	(4.2)	3.7	施釉、見込み陰刻 (寿字文)	施釉、高台削り出 し(蛇の目高台)	ロクロ成形	70
32	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器色絵か	端反碗	(8.0)	(3.4)	3.9	施釉、色絵、山水 文(富士に帆船)、 金彩か	施釉	ロクロ成形、 口縁(紅?)	70
33	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	広東碗	(10.6)	(6.2)	5.7	染付、施釉、 見込岩波文	染付、施釉、 不明文様	ロクロ成形	70
34	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	広東碗	(11.4)	6.8	6.7	施釉	施釉 千島文	ロクロ成形	70
35	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	広東碗	(10.9)	5.7	5.9	染付、施釉、 見込岩波文	染付、施釉、 山水文	ロクロ成形	70
36	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	丸形碗	(10.2)	(4.2)	4.9	施釉	施釉、梅文	ロクロ成形	70
37	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	丸形碗	(11.4)	(4.6)	-	施釉、蛇の目軋 ぎアルミナ盛布か	施釉、不明文様 (虫文)	ロクロ成形	70
38	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	丸碗	(6.9)	(3.6)	3.6	施釉	染付、施釉、 山水文に源氏香	ロクロ成形	70
39	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小丸碗	(6.5)	8.6	4.3	施釉	施釉、水裂菊花文	ロクロ成形	70
40	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小丸碗	(5.9)	2.9	4.6	施釉	染付、施釉、 草花文	ロクロ成形	72
41	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小丸碗	(6.3)	(2.8)	4.9	施釉	施釉、二重格子文	ロクロ成形	70
42	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小丸碗	(6.3)	(3.0)	5.3	施釉	施釉、草花文	ロクロ成形	70
43	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	筒形碗	(7.8)	3.6	6.5	施釉、綠斜格子文、 見込五弁花	施釉、草花文	ロクロ成形、 コンニャク印判	70
44	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	筒形碗	7.0	3.0	5.7	施釉、綠斜格子文	施釉、斜格子菊花 文、唐草文	ロクロ成形	70
45	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	筒形碗	(6.2)	(3.2)	6.1	施釉	施釉、岩桜文	ロクロ成形	70
46	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	筒丸碗	(6.8)	3.3	5.4	施釉	染付、施釉、 山水文	ロクロ成形、 盤付に砂付着	70
47	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	白磁	碗	(8.6)	3.2	4.3	施釉	施釉	ロクロ成形、口紅	70
48	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	碗	(9.4)	-	(3.6)	染付、施釉	染付、施釉、 不明文様(文字文)		70
49	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	白磁	碗	(10.8)	(4.0)	6.6	施釉	施釉	ロクロ成形、 蓋26とセット	70
50	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小坪	(7.2)	(2.9)	4.2	施釉	染付、施釉、 寿字文	ロクロ成形、 清朝風	72
51	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小坪	(6.6)	(2.8)	3.6	施釉	染付、施釉、 移文、招蓮弁	ロクロ成形	72

報告	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法 畳(推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口径	底径	器高	(内)	(外)		
52	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小坪?	(7.4)	(3.4)	4.2	染付、施釉	染付、施釉、 扇子文	ロクロ成形	72
53	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小坪	(7.0)	(3.0)	4.4	施釉	染付、施釉、花文	ロクロ成形	72
54	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	白磁	小坪か縫反 縫	(8.0)	(3.2)	4.4	施釉	施釉	ロクロ成形	72
55	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	皿	(13.6)	(8.0)	4.3	染付、施釉、菊十 筋唐草+山水、見 込五弁花	染付、施釉、唐草 文、高台「福」鉢	ロクロ成形、 シンニヤク印判	71
56	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分 P4.5	磁器染付	皿	(12.2)	7.6	2.7	染付、施釉、二重 格子文、山水(帆 船)、足ハマ底	施釉	ロクロ成形、玉緑 口線、蛇の目四形 高台	71
57	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	皿	(13.8)	9.0	3.8	染付、施釉、花文、 見込花丸文	染付、施釉、唐草文	ロクロ成形、蛇の 目四形高台	71
58	二の丸 三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	磁器染付	小皿	(9.0)	4.8	2.4	染付、施釉、 山水文	施釉	内面型押し成形、 コバルト	44
59	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分 跡場 下断面実測分	磁器染付	皿		7.6	2.2	染付、施釉、 草花文	染付、施釉、 底部朱書き	ロクロ成形、ガラ ス焼襯裏あり、足 ハマ底	71
60	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	皿	(8.3)	4.2	2.0	染付、施釉、 草花文	施釉		71
61	二の丸 三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分) № GP	磁器染付	皿	10.1	5.3	2.0	染付、施釉、二十 格子文、見込竹文	染付、施釉 後文	ロクロ成形	71
62	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	皿	(13.4)	5.0	3.9	染付、施釉、山水 文(帆船と逆さ富 士)、見込鉢、蛇の 目袖封ぎ	施釉	ロクロ成形、 玉緑口線	71
63	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分	磁器染付	小皿	(10.0)	5.5	2.9	染付、施釉、 山水文	染付、施釉、 山水文+源氏香	ロクロ成形、 口緑菊花	71
64	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分 P4.5	磁器染付	皿	(14.8)	(8.5)	3.0	染付、施釉、 竹組に花文	施釉	ロクロ成形、口鈎	71
65	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～ 6.30調査分 P4.5	磁器染付	皿	(20.4)	(10.5)	3.0	染付、施釉、 不明文様	施釉	ロクロ成形	71
66	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30 調査分 P4.5	磁器染付	皿	(24.0)	(11.4)	3.6	染付、施釉、 草花文(濃み)	染付、施釉、 不明文様	ロクロ成形、 ハマ痕溶着	71
67	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30 調査分	磁器染付	皿	(12.2)	(5.8)	3.3	染付、施釉、 草花文	施釉	ロクロ成形	71
68	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30 調査分	磁器	皿	(25.8)	-	2.2	施釉、 パラプリント	施釉	ロクロ成形、 口緑輪花	71
69	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30 調査分 跡場下断 面実測分	白磁	猪口	(7.5)	(5.0)	5.7	施釉	施釉	ロクロ成形	72
70	二の丸 三の丸 昭和54.3.15～6.30 調査分	磁器染付	猪口	(7.0)	5.0	6.2	施釉	染付、施釉、 山水文	ロクロ成形	72
71	二の丸 三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	磁器染付	鉢用蓋	7.2	-	2.45	施釉	染付、施釉、 不明文様(水玉)	ロクロ成形	73
72	二の丸 三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	磁器染付	鉢用蓋	(14.3)	-	3.5	施釉	染付、施釉、 市松文	ロクロ成形	73
73	二の丸 三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	磁器染付	蓋付鉢	(12.1)	(6.2)	3.8	施釉	染付、施釉、 草花文	ロクロ成形	73

報告 番号	遺構・位置 (注記)	種類	器種	法 量 (推定)			調整・文様など		備考	コン テナ
				口 径	底 径	器 高	(内)	(外)		
74	二の丸・三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	磁器染付	蓋付鉢	11.9	6.0	6.2	施釉	染付、施釉、 豪文+丸文	ロクロ成形、家紋	73
75	二の丸・三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	磁器染付	蓋付鉢	(9.2)	6.9	9.25	施釉	染付、施釉、 草花文	ロクロ成形	73
76	二の丸・三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	白磁	仏壇器	(7.3)	4.0	5.7	施釉	施釉、 削り出し高台	ロクロ成形	73
77	二の丸・三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	磁器赤絵	仏壇器	(5.9)	3.8	5.8	施釉	施釉、赤絵、削り 出し高台 花文	ロクロ成形	73
78	二の丸・三の丸 (昭和54.3.15～ 6.30調査分)	磁器染付	レング	-	-	-	染付、施釉、 唐草文	染付、施釉、文様 不明、裏銘不明	型押し成形か	73
79	二の丸・三の丸 昭和54.3.15～6.30 調査分	赤絵？	不明	(4.2)	(3.2)	2.4	施釉	施釉、色絵、 草花文	ロクロ成形	73

特別史跡熊本城跡総括報告書
調査研究編

第3分冊

2021年3月

発行 熊本市熊本城調査研究センター
〒 860-8601 熊本市中央区手取本町1-1
TEL (096) 355-2327
印刷 有限会社あすなろ印刷
〒 860-0821 熊本市中央区本山3-3-1
TEL (096) 335-8880

特別史跡熊本城跡総括報告書

調査研究編

第3分冊

2021

熊本市